三つの會話

US41
709
01059064

華
三五
五五
廿

隨筆集 三つの會話

高柳賢三

文藝春秋社

US41
709

石井幸子氏寄贈図書

國立國會
51.3.19
圖書館藏書

1059064

序

全世界が今激動してゐる。嘗ては日支事變は東亞の特殊事情に基く局地的動亂として、世界の注目を集めたことであつた。しかし英獨兩雄の開戰によつて、それよりも遙かに激烈な死鬪が、歐洲の天地に展開し、世界注視の焦點は東亞から歐洲へと移動した。更に日獨伊樞軸の成立によつて、歐亞兩大陸に行はれるこの二つの戰亂の間に、緊密な政治的並に軍事的牽連關係が成立した。そして歐亞兩大陸のいづれからも孤立を保ちうる地位にある米國までも、今や將にこの歐亞に跨る戰亂の渦中に併呑されんとする情勢にある。かくして對英武器貸與法案が今盛んに米國議會で討議されてゐる。同時に對日經濟壓迫が强化の途を辿つてゐるばかりでなく、米國海軍は布哇を根據地として、戰時態勢を整へて、我海軍と相對峙してゐる。戰爭か平和か？　それが目下焦眉の問題となつてゐる。そして又、ソ聯はそれらすべてを嘲笑するが如き、或ひは又得意の微笑を浮べるが如き複雜な表情を湛へて、動亂の擴大を熟視してゐる。

こゝに集めたいくつかの隨筆は、かうした大規模の鬪爭の表面化する直前、著者が特定の任務を帶びて數回歐米を巡回した際、本務の餘暇見聞したところの感想錄である。その中には、時局に何等關係のない閑話もあるが、しかしそれらは全體として、現時世界大動亂前夜の、米、英、獨、白、和、佛各國における雰圍氣のある描寫となるべき運命をもつことゝなつたのである。

昭和十六年二月八日

湘南逗子にて

著者

目次

英語のおしやべり……一一
三つの會話……二〇
怪魚の腹……四五
長壽祕藥……五〇
珍本屋のおやぢ……五四
熊の樂園……五八
コンコウドの人達……六二
ヤンキイ料理……六八
ロングフェロウ家の日本簞笥……七〇
摩天樓……七四
綠都……八一
珈琲夜話……九九
ブレーメンとノルマンディ……一〇四
ミュンヘン會談の前夜……一一三
巴里……一二二
芋市・肉市・さかな市……一二二
居酒屋の唄……一三八

ヴェルサイユ宮……一四六
ジャンとアドルフ……一五四
伯林……一六三
無憂宮……一七一
文庫と圖書館……一八一
圖書・平和宮・放尿坊……一八六
古戰場ウオタルー……二〇六
霧・罌粟の花・マック拓相……二一四
ある午後の英國議會……二二二
ウエストミンスタ・アベー……二三一
ロンドンの古宿……二四〇
白塔……二四四
チェシャヤ・チース……二五二
鐘塔のモーア……二六〇
古物市……二七四
詩聖郷……二七九
忘れ物の天才……二八八
人道主義者の東亞觀……二九七

三つの會話

英語のおしやべり

「蔦色人が蔦色人に向つて、白い言葉でしやべるのは、なんだか變だ」といふのは、故新渡戸先生が、ある學校の英語會に招待されて、英語演說をしたときの、冒頭の辭であつた。在米支那留學生などがお互に英語でしやべつてゐるのをよく見受けるが、日本人の學生などには、これは趣味に合はない。やはり「なんだか變だ」といふ感じがするためだ。尤も支那は大國、北と南とではまるで自國語では通じにくいから、英語の方がお互に便利だといつたことも聞いたが、この說明は、どうかと思ふ。

尤も白色人に蔦色の言葉で饒舌つて分るやうになれば、われわれとして頗る都合がよろしくなるに違ひない。このあひだ東大に南米からお客さんがあつて、ある人がスペイン語ぢや困るといつたら、なに、日本語を習ひにわざわざ渡日したんだから、日本語の方がかへつて喜ばれ

るだらうといふことだつた。それなら東亜新秩序の説明でも、とうとうとやれるだらう。そして萬事この調子でゆくやうになれば、歐米旅行だつて、國際會議だつて、氣樂に出來る。しかし當分は、さうしたことはユートピヤで、少くも歐米人と交渉するやうな場合、それでは實際の用が足りない。

三十年前私の東大在學時代に、英語に興味をもつ同志が集つて、帝大英語會といふものを作つた。これに參加した者は數多くあつたが、そのうちに市河三喜、二荒芳德、白鳥敏夫、森戸辰男などがゐた。市河君は今では英語英文學の大御所として納まつてゐるが、その頃は英語の洒落に凝つてゐたと見え、ある時、初めから終りまで徹底的にパンで埋めた演説をやつて、皆を驚かしたものだ。そして今でも時々この「造詣」が發露するさうだ。二荒君はこのあひだ私の司會したある園遊會で、國際友好鯉のぼり會々長として紹介したが、その頃はかうした會の會長さんにはとてもなれさうもない純良かつ内氣な貴公子であつた。二年ばかり前、北歐から白鳥君が送つてくれた素晴しい英文で書かれた論説で、氏の英語の進境に感心して想起したことであつたが、白鳥君はその頃から覇氣滿々として、英語會でカーライル論をやつて、これに又

大學の仙人と呼ばれた英米法研究以外には趣味のない人と見られたテリー師が、コンメントを加へたことを珍風景として覺えてゐる。森戸君はその後社會運動に關心を持つにいたつたが、その頃は宗教的情緒のこもつた人格主義者といふ印象を與へた。英語會においても、さういつた風味のある演説を聽いたのであつた。かうして三十年前のことを想起すると、興味深いことが多い。その頃の法科大學の先輩では、二上兵治、齋藤博、澤田節三などが、英語が大變上手だとの評判が高かつた。

それから度々出席して、われわれの會を指導してくれた人に、外人では文科のローレンス教師、法科のテリー教師、エッチング畫家リンチ氏、日本人では新渡戸稲造、和田垣謙三兩博士といつた人達があつた。

われわれが學校を去つてからは、かうした英語の熱心家が少くなつたせゐか、あるひはまた社會情勢が變化したせゐか、帝大英語會は永續はしなかつた。

私は、大正十四年、文部省留學生として、ハァバァド大學に留學した。その際ロー・スクールに、パブリック・スピーキングといふ隨意科目があつた。この科目は、なにか語學的に役立つことがあらうと思つて、この科目をとつてみた。初めにゲティスバーグ・スピーチを諳記してこいといふ。そこで一生懸命勉强して先生の前に出て、大聲を張り上げてやると、先生「スプレンディド」と賞讃する。これはいゝと安心すると、次回にもう一度同じ演說をやれといふので、次の時間に又これを繰返すと、今度は先生、一句毎にイントネーションを直すばかりでなく、聲が高すぎるとか、低すぎるとか、感情の表現が、弱すぎるとか、ジェスチアがどうだとか、めちやめちやに直されてしまつて、大いに悲觀した。このコースでは、あらゆる場面の演說のやりかたが敎へ込まれるのであるが、この技巧的に聲を細工することはなんだか僞善的なやうな感じがした。又日本人が米國人と同じ感情表現するなんて、なんだか馬鹿馬鹿しいやうな氣がしたので、この課目は途中で失敬してしまつた。しかし後で考へ直すと、これは一應修得しておいたはうがよかつたとも思つた。

私は英米には度々行く機會をもつたが、まだ講演旅行とか、演說行脚などいふことは、やつたことはない。留學時代は、あちらの知識吸收が目的なので、讀書と見學旅行に時を費し、演說とか講演などは、ちつともやらなかつた。又震災後帝大圖書館復興のため一年半ぐらゐあちらにゐたが、時間は全部個人接觸に費されたので、演說とか、講演などは全然やる機會をもたなかつた。それから國際會議にも十回ばかり出席したが、多くは圓卓會議におけるステートメントが關の山で、演說らしいものをやつたことはないのである。

ところが一昨年の夏太平洋問題調査會の日支事變に關する「インクァイアリ」の問題で渡米した際、桑港に着くと、カナダの舊友エドガー・ター君から手紙が屆けられた。それによると「今度君が渡米したについては、Canadian Institute of International Affairs の會長の資格で、正式に君をカナダに招待するから、カナダの十六の大都市にある各支部の人と會つてくれないか、それには約五週間を必要とするが、カナダ全土の有力な人達に對し、東亞の事態に就いての日本の立場を明らかにすることは、眞にお國のためになることであるし、又君としても、カ

ナダ全土の有力者と友達となる絶好の機會だから、ぜひとも受けろ。金が問題なら、こちらで心配する」といふのである。極めて心を籠めた手紙なので相當動かされたが、別の使命で渡米したこととて、お斷りした。危ふく演說家になるところであつた。

インクァイアリについての交渉の目鼻が大體ついて渡英したが、そこでは、たうとう講演なるものをやらされてしまつた。それは渡米するとすぐRoyal Institute of International Affairsから、日支事變を中心として講演をやるようにといふのである。この協會は國際問題に關心をもつ政治家、實業家、學者などから構成され、國際問題研究團體として最高水準を保つてゐるといふ定評がある。そしてこの團體はわが太平洋問題調査會と特別關係があるので、一回の講演依頼には應ぜざるを得ない義理あひになつてゐるのであつた。そこでたうとう引きうけた。それにしても題目が題目だし、相手がよすぎてかへつていけないので、私の處女講演には荷が勝ちすぎると思つた。しかし引きうけた以上ベストをつくすよりほかないので、二週間ばかり一生懸命で原稿の推敲に當つた。內容は東亞政局の過去現在將來といつたやうなもので、日支事變に、歷史的展開のうちに妥當な地位を與へることに目標をおいた。そしてなるべく客觀的に

非人情的に問題を取扱はうと努力した。それでも日本人が、母國に關する重大問題を取扱ふのであるから、英人から見ると、ジャパニース・ケースを陳述したものと解した人々が多かつたことは、討議に參加した人の論述のうちから窺はれたのである。講演後の討議中には、日本を支持する者、攻擊する者、又その中間を行つて、同情的批判的な議論をする者等、イギリスらしく多岐に分れたが、議論への賛否は別として、論調が高級なのには、流石はと感心した。私はこれらの論爭をも、英人の心理の動きの表現として、やはり客觀的に、見守つたのであつた。そして最後に答辯を求められた際にも、ジャパニース・ケースの支持に陷らないで、この客觀的非人情的態度を維持せんと努めたのであつた。處女講演もかくして無事に終つた。

もう一つ一寸面白かつたのは、牛津大學のジャパン・ソサイエティでやつた時の講演である。交渉に來たのは故ゾルフ駐日大使の令息であつた。なにをお話ししようかといつたら、政治的でない、專門的な話がよからうといふので、「日本におけるイギリス法」といふ題を選んだ。この草稿は週末に、海水浴場のヘイスティングスに行つて、二日で書き上げた。聽衆は學生のほか、法律の先生の顏が見えた。學生達の質問は、日本では、婦人は陪審員となれるかといふや

うな、極めて通俗的興味のあるいくつかの質問をしたのであつたが、法律の先生は「日本ではスコッチ・ローはどの程度研究されてゐるか」といふ質問をした。これに對して、「スコッチ・ローは少しも研究されてゐない。スコッチ・ホッスキーの研究者は相當多いけれど」と答へたので、一座哄笑したことであつた。學園の空氣はどこまでもなごやかで、愉快である。

私は、去年の夏四十八名の男女學生と一緒に渡米した。愉快な旅のうちで一番閉口したのは米人から晝食や晩餐に招待されるとき、いつもスピーチをさせられることであつた。尤も聽衆が變るのなら、同じ話を繰り返せばなんでもないが、いつも、五六十人の日米學生の同じ顏がずらつと並んで、先生なにをいふかと、待ちかまへてゐるのだから、おなじ話を繰り返すわけにはいかない。かうした席では、大抵は原稿なしのオフ・ハンドでやつたが、內容は大抵前晩に考へておくのであつた。しかしこの種のパーティで、一回だけ草稿演說をやつた。それはシヤトルの商業會議所とジャパン・ソサエティの共同主催日本學生歡迎午餐會における二十分演

說であつた。「日本人米國を視る」といふ諧謔交りの話だつたが、このテーブル・スピーチがやはり一番よく出來たやうだ。いろいろお世話になつたシヤトルの領事は、實は又國民使節の日本辯護論をやるのではないかと、ひやひやしてゐたが、あれで安心したと喜んでくれた。この話は大分米人に氣に入つたと見えて、その晩、その要領が全米に放送されたさうである。こんな小さなことでも、努力すれば、やはり成績があがると思つた。

連れて行つた學生の英語を聞いて感じたことだが、今の學生の方が、われわれの帝大英語會時代より、遙かに進步してゐる。これならこの四十八名中から、新渡戸第二世といつた人が、幾人か出て來るかも知れない。又英語の得意なこれらの學生は日本文は駄目かと思つたら、どうしてどうして、なかなかの名文家揃ひである。例へば近刊の「學生日米會談」(日本評論社)のうちの、米國印象記などは、觀察も文體も、なかなかいゝのがある。といつて、學生代表のために「學生日米會談」の宣傳をして、筆を擱かう。(昭和十五・六)

三つの會話

七月二十六日鎌倉丸で横濱を出帆してから二日目に、米國政府が一九一一年の日米通商航海條約廢棄を日本政府に通告したといふニュースがあつた。私は某國に赴任する公使、某國公使館付武官、それから渡米する二三の實業家などと、この廢棄通告の動機や、その經濟的結果などに就いて話しあひ、又スートケースから「條約集」などを取出して來て、來年一月この條約が廢棄された場合、日米の通商關係や在米邦人の地位にどういふ影響を及ぼすことになるか、殊に最惠國約款がなくなつた場合、米國が日本に對して、どういふ處置に出ようといふのかなどの點に就いて、いろいろと考へてみた。同行の學生達からも、毎日のやうに、「どうでせう」と聞かれるが、勿論正確な返事は出來ない。船中ニュースは、何といつても貧弱だ。廢棄通告の背景などは、今までの經過から想像するより外ないのであつた。

八月三日早朝、ホノルルに着く。ホノルルは私の度々行つたところだけに、米人側にも邦人側にも、舊知が多い。これら舊知の人達が多數船に迎へに來てくれたのは、何より愉快だつた。ところが其處にひよつくり姿を現はしたのが、意外にもM博士だつた。博士はW大學の政治學の教授だ。嘗て東京と京都で同氏夫妻と親交を結んだのをきつかけに、それ以來ずつと書信の往復を斷たなかつたが、一九三六年にはヨセミテの太平洋會議で再會した。又昨年の夏はロンドンの町で會ひ、岡本參事官の招待で、日本人倶樂部で一緒に鋤燒を食つたのだつた。その時彼は、歐洲の政局視察に來てゐるのだつた。一體ハワイにはどうして來てゐるのかと訊くと、今夏は夏期學校に教へに來たのだといふ。兎に角、君がハワイに來るといふことを傳へ聞いたので、東亞の情勢その他に就いてゆつくり話しあひたいと思つて、君の都合を聞きに來たのだといふ。そこで私の日程を調べると、自分が是非出席して挨拶しなければならぬことになつてゐるのは、ロータリー倶樂部主催の午餐會と、夜の日系市民協會の晩餐會とであつた。今更ワイキキ・ビーチやヌアノ・パリーやパインアップル工場の見學でもあるまいと、ロータリー倶樂部で準備してくれた見學の部は全部省略することとし、プログラムを全部M君に任せた。M君は午後ゆつ

くり話す機會を作るが、午前中大學の方へ來て、總長その他の人に會はないかといふので、午前中はハワイ大學で過した。

高楠博士その他二三の教授に會つた後、M君と一緒に總長室を訪ねた。總長も十數年來の舊知である。氏は國際政治に就いても相當の造詣をもつてゐる。そして最近歐洲から歸りたてのほやほやだつた。氏はハワイに於ける日支人間の接觸が米大陸に比して良好なる狀況などを說き、東亞の最近の動きに就いて、いろいろの質問を私に發し、次いで言つた。

「歐洲の政局は相當に行き詰まつてゐるから、何時戰爭になるか分らんね。獨ソの政治的接近の可能性は相當濃厚なやうに思ふがどうだね。」

「然し現在に於ける獨ソ兩國間の交涉は、未だ經濟の分野に限られてゐるので、獨ソが政治的接近にまで行けるかは、ナチズムとコンミュニズムの鋭いイデオロギー的對立に照して、問題ではないでせうか。」

「ところが、去年の末頃からドイツの新聞紙で、從來のソ聯攻擊の記事がぱつたり止つたのは注目に値ひすべきではないかね。これはヒトラー總統が、場合によつては、ソ聯と政治的に接

近しようといふ意圖があるからだと解釋できはしないか。そして英佛の包圍政策への對抗策として、彼がこの意圖を堅めるにしても怪しむには足らぬ。尤もさうした場合、スターリンがどういふ態度に出るか未だ幾分疑問だがね。又イデオロギー的對立だが、實踐から見れば、ナチの統制經濟とソ聯の統制經濟との間に、どれだけ開きがあるか、學者はナチ經濟は國家資本主義か國家社會主義かを議論してゐるやうだが、實踐的には紙一重でね。兩者とも、レセ・フェールを根柢とする西歐資本主義と對蹠的地位に立つことは事實だからな。それに國際政局がイデオロギーだけで動くやうに考へるのは皮相だよ。」

「さうした獨ソの政治的接近の可能性についてはまだ十分考へなかつたが、さうした場合、東亞政局に對する影響に就いては、どう觀察してゐられますか。」

「それは君に訊きたいところで、頗る微妙な問題だね。それは一面、ソ聯の歐洲に對する利益と東亞に對する利益のバランス問題で、他面は、日本が英米との關係を將來どう調整する意圖であるかによつて決定される問題だ。時に東京會談は巧く行きさうかな。」

「まだ相當迂餘曲折があると思ひます。」

「大分日本の反英デモは猛烈のやうだな。どうも日本人のやり方には、我々にとつて不可解なことが多い。日本政府は一面日米關係の改善に努力してゐるやうだが、あゝいふことをすれば日米關係の惡化に導くに決まつてゐる。米國人は直ちに、これを以て同時に反米デモでもあると理解することが、日本では分らぬだらうか。」

「それは分る人もあるが、分らん人も多いでせう。又さうした打算からでなく、支那事變以來英國人の支那現地に於ける態度に對する國民の憤慨は相當根强いので、その非合理的な爆發でもあるのでせうな。」

「しかし政府は出來るだけそれを抑へるやうにしなければ、日英會談も巧く行かないのではないか。第一米國を刺戟することは、結局日英會談の成立を妨げることになるだらう。」

この八月三日の會話中の獨ソ提携論は、その時やゝ突飛の議論のやうにも思はれたが、その月の終頃には、同氏の慧眼に敬服せざるを得ない事態に國際政局は展開したのであつた。

グリン・ランタンで開かれたロータリー倶樂部の日本學生代表歡迎のための午餐が終る頃、M君はハワイ大學の政治學教授のC君、國際政治を專攻する少壯講師N君と一緒に自動車で迎へに來た。

約三十分のドライヴを終へて、町外れのある靜寂な料亭に入り、戸外の東屋に陣取つて、隔意なき會談に入つた。

「今度の日米通商航海條約廢棄はどういふ動機から行はれたのでせう?」

「ハル長官はその理由に就いて沈默を守つてゐるやうだが、外部から見ると、三つのことが考へられる。第一は支那に於て米國人の生命財産への日本政府の態度に對する抗議的なジェスチュアであるといふ解釋が一つ。今一つは、更にそれ以上にローズヴェルトやハルは集團安全派の考へ方から、從來もイタリヤ、ドイツ、日本を『侵略者』であると時々宣明したが、この見地から、日本に對する敵對的ジェスチュアとして廢棄通告をやつたといふ解釋が一つ。それから第三には、さうした意味よりもむしろ、東亞の新事態に順應しつゝ、米國の將來の在支權

益の保障を得る機會を作るためといふ解釋が一つ、三つのことが考へられる。」
「君はその三つの解釋のうち、何處に眞の動機があると思ふんですか？」
「一昨年秋ローズヴェルトの例のシカゴ演說に對する輿論の受けが惡かつたから、第二の解釋を重點とするとも思はれない。第三の解釋は、あんな唐突なジェスチュアを示さないでも出來るから、それも餘り甘く見すぎた解釋と思はれる。自分は寧ろ第一に重點があるのではないかと思ふがね。」
「自分はむしろ第三のハイポシシスに重點があると解釋しますね。その理由は、我々の好むと好まざるとに拘らず、かうなつては重慶政府が盛返してくることは殆ど絕望だ。米國として蔣介石を助けるため、日本と正面衝突をするところまで行くことは、恐らく輿論が許すまい。然し日本の所謂東亞新秩序が東亞の閉鎖經濟を目標とするのではないかを、米國では恐れてゐる。そして滿洲國の場合は、勿論、北支、中支に於ける日本の動きを見ると、さうした恐怖を理由づけるものが相當ある。從つて東亞新秩序の經濟的機構を閉鎖的ならしめぬやう日本政府と交渉を開くため、この相當强い警戒的ジェスチュアに出たのだと、私は解釋する。

「國務省には、集團安全派の勢力が相當强いやうですな。」
「それはさうだ。然し米國の輿論は現在のところまだ、なかなかそれには追ついて行かないだらう。」
「第一又は第三のハイポシシスに基くジェスチュアとすれば大部分ついて行くよ。兎に角この廢棄通告は、一般に好評だね。」
「私はハル長官が沈默してゐるところに意味深長なところがあると思ふ。歐洲の形勢がどうなるか、今のところ分らない。例へば日獨伊樞軸對英佛米の鬪爭といふやうな形勢に展開すると せば、集團安全派の議論が表面に出て來る。英佛米は必ず集團安全派の勢力を利用し、日獨伊に世界平和の攪亂者といふ烙印を押すに決まつてゐる。しかし歐洲の戰爭に米國が參加するやうな場合に、米國は成るべく日本と敵對的とならぬやう工作して置かねばならぬことも考へられるからね。」
「特にこの時機を選んだのには、東京會談に就いて、英國に聲援を與へる意味もあらうな。ローズヴェルトは、政府提案の中立法改正が議會を通過しないで英國を失望させたところだから、

これに對する友好的ジェスチュアを示す意味合もあつたらう。」
「ロ大統領は個人的に特に親英的だとの噂がありますな。」
「一九三七年スペイン内亂に對する中立法の適用の場合には、それが強く現はれてゐたね。ワシントン駐在のスペイン大使からの強硬な抗議があつたに拘らず、ロ大統領はスペイン内亂は『北米合衆國の平和に脅威を與へる』との理由で、早急にフランコ側とスペイン政府側兩方とに軍需品の輸出禁止をやつたが、あれは結局フランコ側を支持することになり、ひいてはソ聯とフランスを怒らせ、獨伊側を喜ばせた。米國の態度としては奇々怪々なジェスチュアに見えるが、實は英國の投資が多くフランコ政權の支配圏内にあつたので、英政府がこれに敵對的態度を示し得ない事態を見てとつて、あゝいふ行動に出たのだね。」
「あの時のスペインの内亂が『北米合衆國の平和への脅威だ』といふのは頗る變だつたな。」
「あれは從來の中立に關する一般國際法の原則に違反するだけでなく、米西間に締結された一九〇二年のマドリッド條約違反でもあるので、あれはロ大統領が親英感情から來た政策を無理やりに通したのだと解釋する外ない。」

「日米通商條約廢棄通告の直前、ヴァンデンバーグ上院議員が日米通商條約廢棄論をやつたが、あれが案外受けがよかつたので、共和黨を出しぬく内政的意味もある。」
「成程、情勢上對日軍需品輸出禁止をやるべしとの輿論が強くなつた場合、法律的支障を除去しておくといふ考慮もあらうな。最惠國約款があつては、輸出禁止の處置は條約違反の非難を受けるからね。」
「しかしスペインに對してとつた筆法で行けば、そんなことは問題ではないぢやないか。」
一同の話題は更に日米學界の消息に移つて興趣は盡きなかつたが、M君は時計を出してもうそろそろ歸らうと言つて立上り、自動車を操縦して、我々三人をホノルルの町に連れ歸つたのであつた。

八月十一日から一週間に渉る日米學生會議も終了し、學生等は羅府、ヨセミテ、パロ・アルト、桑港、ポートランド等を見學して、九月初旬沙市に着いた。この短い期間に、歐洲の政局

は急激の變化を見せたのであつた。

獨ソ間の經濟協定の成立に次いで、獨ソ不可侵條約の成立が報ぜられ、防共樞軸の弱體化はソ聯の東亞に於ける積極的進出を意味するものといふ意見が新聞に掲げられ、日本の孤立を危ぶましめるかと思ふと、ドイツのポーランド攻擊が開始され、英佛側のドイツとの戰時狀態存在の宣言があり、更にローズヴェルトの米國嚴正中立の宣言があつた。ヒトラー總統や、英國皇帝や、チェンバレン首相や、ロ大統領等の肉聲の、しかも異常の國際的重要性をもつ放送を聽いて、學生達は思はぬ拾ひ物をしたと大悅びであつた。私は羅府、パロ・アルト、桑港等で多くの國際關係の學者と時局に就いて語りあつたが、いづれもこの歐洲政局の思ひがけぬ激變に對して、相當どぎまぎしてゐる態度がありありと見られた。東亞政局に就いて從來一定の見解をもつてゐた學者でも、その見解を支持する勇氣がなくなつた。結局もう少し事態が明瞭とならねば、なんともいへぬといふことに歸着した。

在米邦人側の各地有識者と會談すると、いづれも歐洲政局が東亞に及ぼす影響に最大の關心をもち、一憂一喜の狀態である。それと同時に、これらの人達は日米通商條約問題が非常に氣に

懸つてゐる。永く太平洋沿岸で農業商業に從事してゐる人達は、通商條約廢棄の結果として、再び排日的立法の復活を惹起しはしまいかと心配してゐた。銀行、會社の代表者は、條約廢棄の結果として移民法上所謂『條約商人』の地位を喪失して、滯在や往來に多大の不便を來たしはしまいかと憂へてゐた。より政治的な關心の强い人達は、軍需品の對日輸出禁止が招來され、東亞新秩序の建設事業に、ある支障を齎しはしないかを憂慮してゐた。

滯米最後の一週間は、私自身にとつて相當忙しい週間であつた。I・P・Rグループの主催で、シアトルの各方面の識者の小集會では、東亞新秩序に就いての我國におけるインテリの近時の思潮を解說する筈であつたが、十分準備の時間がなかつたので雜談的に東亞を中心とする日米關係に就いて話し、いろいろな論議が交された。次にワシントン大學で、一時間ばかり、「東洋と西洋」といふ題で講演した。夏休み中のこととて聽衆はさう多くはなかつたが、いづれも熱心にこれを傾聽してくれたのは嬉しかつた。それから、ジャパン・ソサイエティと商業會議所との共同主催の午餐會で、「日本人米國を視る」といふ演說をした。これは羅府で電報で打合せ、私は「日本人世界を視る」といふ題目にしておいたので、その積りで、日本人の世界政

局觀を考へてゐたのだが、前日の新聞で私の演說の題が「日本人米國を視る」になつてゐるので、ジャパン・ソサイエティに問合はせてもらふと、さういふ題でもう印刷になつてゐるといふのである。そこで當日の朝、領事館の秘書役に口述して原稿を整へた、割合ユーモラスな草稿が出來上つた。ところが案外にこの俄か造りの演說が受けたと見えて、その晩この演說の內容が、ラヂオで全米に放送されたさうである。

沙市を出帆する前日、ホテルに電話がかゝつて來た。舊知の米國經濟學者M君である。暫らくぶりでゆつくり話したいから、お茶に來ないかといふので、私はその宿舍を訪ねた。

「歐洲の政局は戰爭らしく見えるが、米國への影響はどうなると思ふ？」

「經濟的ブームが來るよ。又米國は嚴正中立だと大統領はいつてゐるが、『當分中立』に間違ひないが、漸次中立ではゐられなくなるだらう、勿論。」

「中立法改正は實現すると思ふかね。孤立論者の反對は强くはないだらうか？」

「それは强い反對はあるさ。中立法改正は英佛側への實質的援助だからな。孤立主義からいへば、戰爭參加への一步手前であるには違ひない。しかしね、武器製造業者は、轉がつて來る大きな利益をみすみすミスすることはしないだらうからな。猛烈なロビイングが開始されるさ。改正法の通過は間違ひないところだ。」

「時に東亞問題に就いて、對日輿論の反感は隨分强いな。」

「それは非常に强いさ。支那事變があゝいふ風に新聞で取扱はれては、一般的感情は惡化するにきまつてゐる。新聞も日本側に有利な記事を大きく取扱つては、商賣上つたりさ。」

「孤立論者といふのは、日本では、米國が東亞への米國の干涉をチェックしてゐるグループとして大いに期待してゐるが、孤立論の思想的背景は？」

「商業的に世界各地に發展し、政治的同盟を避け、歐洲の戰爭に對し無關心の態度を取るといふのが、ワシントン大統領の遺訓に基き、十九世紀に米國の外交政策の基調をなしたのだが、かうした舊來の孤立論の支持者など今は少數だね。今の所謂孤立論者といふのは、あれは本質的には、大部分帝國主義者だよ。舊來の孤立主義は、十九世紀末に米西戰爭の結果、米國がフィ

リッピンを合併した以後は無力だ。」

「歐洲のマハトポリティーク論者は、國家間の鬪爭といふことを一種の自然法則と考へてゐるが、君の帝國主義者だとするアメリカの孤立論者もこれと同樣の世界觀をもつといふのか。」

「全然同一さ。尤もね、ドイツ人のやうな無遠慮な表現は、極力避けてゐる。この派は時には妥協もし、平和運動も支持するが、その思想の根柢は帝國主義だよ。」

「歐洲に對しては不干涉主義、兩米大陸に對してはモンロー主義、東洋に對しては協力主義といふことが、米國の外交政策の基調だといふ學者もあるな。」

「それが帝國主義者達の現實的見地からの政策表現さ。帝國主義を隱蔽するのは巧みだらう。『協力』は美名、『干涉』の別名さ。フィリッピン合併は領土擴張主義の直接の表現だが、支那の『門戶開放』はいかにもフェヤ・プレーの標語のやうな美名だが、あれも支那に於ける『干涉』の一種だからね。」

「その帝國主義は『通商國旗に伴ふ』ではなく、むしろ『國旗通商に伴ふ』の方だらう。」

「その區別は紙一重でね。フィリッピン合併當時は『通商國旗に伴ふ』の思想でやつたのだ

が、今では『國旗通商に伴ふ』の思想の方が強いだらう。アメリカのやうな國では、英帝國でも崩壞して、これをアメリカの領土に編入するのでもなければ、新領土を得ても結局大したことにはならぬからな。彼等の根本思想はかうさ。アメリカの經濟的發展は、國內の產業を保護し、米國の生產物の捌を外國に求めねばならぬ事態に立到つてゐる。又外國に投資して、利潤を吸收する必要がある。そのためには、補助金、關稅、外交手段、しかし結局のところ海軍力を以て、これを保護增進せねばならぬ。從つて彼等は大體大海軍論者でもあるのさ。一九三八年に超海軍案が兩院を通過したのは、帝國主義の考へ方が、今でも隱然たる勢力をもつことを物語つてゐる。あれは東亞のみを目標としたのではないとしても、さういつた可能性を承認したことになるのだからね。東洋での帝國主義的戰爭の可能性も考へられてゐない譯ではない。

「孤立論者はどういふ方面からの支持を受けてゐるのか?」

「大體陸海軍方面、武器製造會社、保護關稅を必要とする製造業者、外國に販路を求める製造業者、外國に投資を求める金融業者などだらう。」

「日獨伊の行動を一番猛烈に非難して來たのは、集團安全派と左翼派のやうだな。兩派とも國

際主義者いな世界主義者だが、兩派の經濟思想は氷炭相容れないやうだが、米國の集團安全派は現在どんな情勢か？」

「ウイルスン大統領が、『民主主義諸國のために世界を安泰にする』といふ旗印の下に、歐洲の帝國主義的戰爭に干渉して以來、傳統的孤立主義は再度破られることになつた。本質的には帝國主義的な、マッキンリ、ジョン・ヘイ、マハン提督、シオドア・ローズヴェルトなどに流れを汲む『孤立論』に對して、この派は、平和主義的・世界主義的色彩をもつてゐて、相當勢力を米國の輿論の上にもつに至つた。孤立派はこの派を目して、非現實的だと非難する。國際聯盟加入問題や國際司法裁判所加入問題などで、兩派の爭ひは世界的に有名だらう。」

「集團安全派の根本思想は？」

「R・ゴブデン、J・ブライト一派のフリー・トレーダーの世界觀だらうね。それは『產業資本主義』と『世界經濟』といふことを前提として、金貨本位制をどこまでも維持しつゝ、國際貿易の增進、關稅障壁の撤廢、國境を超えての各種產業間の自由競爭、國際的資源獲得の自由、國際分業等が高調される。かくして國民經濟と世界經濟との離隔を打破すれば、世界到るとこ

ろの人間が經濟的に滿足し、帝國主義的な戰爭は消失して世界平和が招來される。と、かう主張するのだ。いはゞ國際的自由放任主義さ。ハル長官の思想は正にそれだ。この派は大體資本主義的民主々義に同情する傾向がある。」

「どんなグループがこれを支持してゐるのか？」

「國際政治の專門家や新派國際法學者、經濟學者などの間には、その支持者が多いね。それから南部の綿業者と、その關係者が一番この派を支持してゐる。それ以外の農作物生產者は外國との競爭を怖れて保護關稅を要求するので、ついては行かない。その他運送業者、輸出入業者銀行家の間には、これについて行く者が多い。」

「然し世界の現實の動きは、集團安全派の描いてゐる理想とは正に逆の傾向を取つてゐるな。」

「さうさ、この派の人達にとつて何よりも癪に障るのが、オーターキーの發展さ。ソ聯もさうだが、あれは論外だとし、ヒトラーの國民社會主義などは、最も怪しからんと見るのだ。日本の東亞新秩序建設なども、臭いと睨んでゐる。しかしね、自由放任經濟本家本元のイギリス自身が漸次統制經濟に向つたばかりでなく、アメリカのニュー・ディールそのものが統制經濟へ

の方向を示すのだからな。それからハル長官には、互惠通商條約締結の大きな權能が與へられるやうになつたが、ハーディング、クーリッヂ、フーヴァーの孤立派によつて築き上げられた高率關稅を根本的に打破することはとても出來ぬのだからね。」

「近頃は集團安全派は大分好戰的になつて來たやうだな。」

「大分感情的になつたわけだね。ウイルスンの、デモクラシーの爲の戰といふ非合理的氣持に、漸次なつて來た譯だ。ロ大統領の『侵略者』離隔演說は、この派からは大歡迎だつた。

「ところでもう一つの左翼派の方はどうか？」

「この方は御承知のやうに、マルクス、レニンの唯物史觀に基いて、資本主義は自然法則的に帝國主義、世界戰爭へと進展し、各國の勞働者が革命を起し、資本主義は崩壞して共產主義が到來し、そこで世界平和が齎されると說いてゐたのだが、世界の現實の動きは、さうこの派の公式通り動かなかつたからね。第一この世界主義的なコンミュニズムの支持者はソ聯から追放され、ソ聯は一國社會主義に向つた。それで共產主義の內部に分裂が起つて、今では政治的には大した勢力はない。只アメリカの共產黨はスターリンの方針を支持し、ファシズム打破の見

地から、氷炭相容れぬ集團安全派と結んでドイツと日本を猛烈に攻擊したんだが、又々獨ソの政治的接近で分裂が起るだらうよ。」

「時に君自身は、米國を全體どうしたらいゝと思つてゐるのか？」

「僕等は孤立論者さ！」

「え、君が孤立論者？　それは一寸驚いたな。」

「尤もね、僕等の孤立論は、いはゆる『孤立論』とは根本的に異つてゐるのだよ。『孤立派』の思想は先にいつたやうに、本質的に帝國主義なのだ。然しアメリカのやうに、歐洲と亞細亞から隔離した、そして資源の豐かな國で、更に帝國主義的に進出したつて、それは一部の人には利益にはなるだらうが、アメリカ全體としては決して利益にはならない。それを國家の利益と考へるところに、從來の帝國主義者の錯覺があるのさ。僕等も國民の福利を增進することを主張する意味で、國家主義者たることは、帝國主義者と同一さ。又現實主義的であらねばならぬことも帝國主義者の主張と異らないのだが、僕等はアメリカの帝國主義者は非現實的だと見てゐる。」

「一九二九年の世界的不景氣直後の米國議會に於けるいろいろの委員會の調査は、米國帝國主

義の、米國に及ぼした影響を相當深刻に暴露したな。」

「あれでも十分分るやうに、ダラー・ディプロマシーは完全に失敗した。」

「米國は、資源の少い人口增加の激しい君の國などとは違ふからね。國內を改革してゆけば、國民は立派に生活して行けるのだ。海外との通商や投資などにさう重要性をおく必要はない。それにもかゝはらず、少くも國民の三分の一は衣食住に苦しみ、無敎育の狀態にあるのだ。國民經濟の改善に全力をつくさねばならないのだ。販路擴張や海外投資を保護するために、莫大な金を費して大海軍を築き上げるのは不必要なことさ。勿論僕だつて、軍備全廢論なんてユートピアは懷かぬが、米國の地理的地位に照し、軍備は米國本土を守りうる割合小さなもので澤山だ。外國貿易は國內經濟を補充するだけに止めればよく、利潤が多いからとて、どしどし海外投資をする國家的必要もないのだから、それを守るために、大海軍を擁するなどは國家的見地からは愚の骨頂さ。」

「J・A・ホブスンの經濟論といふところだね。」

「先づさうさ。又僕等は現實主義だから、ゴブデン・ウイルスン・ハル一派の世界資本主義にも、レニン・トロッキー一派の世界共產主義にも反對する。ヴィクトリヤ王朝期の自由貿易論は、イギリスの製造業者の爲の理論としては、現實的意味があつた。そして古典派經濟學の隆盛な米國では、この歷史的な經濟論が當然の經濟法則のやうに考へる經濟學者が多いが、機械と技術の進步した今日、國際分業論などは現實性を缺いてゐる。又民族とか國家とかの現實性を輕視して、經濟的個人と利益的集團とだけを現實的と見るところに、この派の人達の錯覺がある。平和維持のための集團保障などいふことは、形を變へた古い同盟條約主義で、平和に貢獻するよりは、戰爭を誘發するだけさ。又トロッキー等の共產主義的世界主義も、實現可能性のない救ふべからざるユートピヤだね。あれも民族とか國家とかの現實性を無視する迷想さ。勿論我々とて國際協力に反對ぢやないさ。調停や、仲裁や、共同利益の爲の集團的な國際的行動にも贊成さ。又國際聯盟の思想に反對するわけぢやない。然し歷史的に成立した不公正の狀態を永久化せんとする聯盟では駄目だ。又『世界經濟』だの『世界市場』だの『世界社會』だの『世界法』だの『世界平和』だのやたらに世界、世界といふ誇大妄想的表現は嫌だね。」

「君の政策論は米國には妥當するやうだが、日本などには通用しないね。」

「そこが要點なのさ。米國に妥當する政策が直ちに日本に妥當せねばならぬと考へるのが、そもそも根本的な誤りさ。世界は、現在、歴史的に成立したいろいろの民族から成つてゐる。又そこには主權國家も、保護國も、植民地もあり、勢力範圍もある。政治形態も、民主々義あり、獨裁主義もある。思想形態もいろいろあるし、又あつて宜い。それらの存在は、それぞれ存在の理由がある。それらは又、常に多彩な變化を辿つてゆく。これを資本主義だとか、共産主義だとか、デモクラシーとかで一色に塗り潰さうといふのが誇大妄想なのさ。僕等はアメリカの政體としては、デモクラシーがいゝと思つてゐるが、他國の獨裁制だつて、歴史性を以て發生したのだらうから、それが一番いゝと思つてる國民に、デモクラシーを押しつけるなんていふ獨斷が、却つて戰爭に導くのだ。」

「先づウイリアム・ジェームスの、多元的宇宙觀といふところだな。」

「さうさ。僕らは多元論者だ。だから大統領が時々各國に向つて放送するあのお説教が、僕等には一番氣に喰はんのさ。あれは結局アメリカの政體や經濟組織を他民族に押しつける態度だからね。己を以て人を推す態度だからね。さうしたお説教で、複雜な歐洲政局や東亞の事態が

改善されるなんて考へるのが、一元論者の迷想さ。それは却つて、内外に、戰爭的感情を激發せしむる結果になるばかりだ。」

「あゝしたお説教の慣習は、いつ頃から始まつたのか？」

「あれは二十世紀の初め米國に帝國主義が現はれ、大統領が世界的立役者になつてからさ。ウイルスンがこれを繼承し、今では時々かういふ芝居じみたことをやらないといけないのさ。新聞紙が又かういふセンセーシ・ナルなことを煽るからな。又御本人もパブリシティを得るのは滿更でもないからね。しかしあれは全く有害無益だ。」

「君のやうな孤立論を支持するのはどんな人達かね？」

「戰爭反對論者も、眞に米國を次の世界戰爭に參加させぬためには、これしかないことを悟りかけて來てゐる。右翼勞働運動者、農業者、保護關税を必要とする工業者の間にも、漸次これに贊成する人が輩出して來つゝある。」

「そこでロ大統領御自身の外交政策はどうか？」

「ハル長官がむしろ學者的、理論的なのに反し、ローズヴェルトは相當ポリティシアン的で、自

己の政治的生活に敏感だ。就任當時のロ氏の動き方を見てゐると、僕等の考へ方に近かつたやうだ。ロンドン世界經濟會議に於けるハル長官の顏を丸潰しにして、一國經濟主義に進んだのは彼さ。又帝國主義者と集團安全派の思想を無視して、米國の政體と氷炭相容れぬソ聯と外交關係に入つたのも彼さ。これには、ハル長官は內心不滿らしかつた。又兩米に就いてニカラガから軍隊を引上げて、『善隣主義』をとつたのも彼さ。これにはハルも賛成だつた。しかしそれから漸次、ロ氏の政策は動搖して來てゐる。日支事變に對する彼の動き方は、御承知のやうに隨分動搖した。然し伊のエチオピア征服に對する中立法の發動、シカゴにおける例の『侵略者』離隔演說、それに次いで突如として出た海軍大擴張案などを見てゐると、むしろ集團安全派を喜ばせる政治的ジェスチュアをしてゐる。この調子では第二次歐洲戰爭には引きずられて行きさうだね。しかし歐洲や亞細亞の問題は、その歷史と寡圍氣を熟知するそれらの地域の人達だけで、地方的な平和と繁榮を築き上げるのが一番いゝので、米國が無智に干涉すれば益々混亂に導くことは、ウイルスンの民主主義のための戰爭がどういふ結果を齎したかで經驗ずみな筈なのだがね。しかし政治には多分の非合理性があるから、日本も餘程警戒せんといけない。」（昭和十四・十二）

怪魚の腹

汽車ならば五日間のアメリカ横斷を、飛行機では、羅府に寄つて用を達しても、一日一晩といふ話、自分の出席する會議には、飛ばなければ、どうしても、期日に間に合はない。

八月初旬の午後二時、U・A・L會社の清掃された赤土の廣い桑港飛行場には、三臺、四臺の飛行機が靜止してゐた。まるで、魚の怪物が四つん這ひにへたばつたといふ感じだ。その中の一臺に、老若男女のお客が、階子を昇つて這入つて行く。それは巨魚に呑まれるヨナのやうに、怪物の腹の中に吸ひ込まれて行く呪はれた姿のやうにも見える。

機內には、十四脚のアームチェヤーが並んで、お客は大體この二人掛けの椅子を一人で占領してゐる。

灰色の服、灰色の帽子の美しいエア・ガールが、客の一人一人のベルトを締めて廻る。その

指の爪が櫻貝のやうだ。チウインガムを配る。新聞を配る。煙草を配る。茶菓を勸める。茶碗もミルクポットも、匙も、悉く紙製だ。毛布をかけてくれたり、枕を當てがつてくれたり、嘔吐筒をこつそり渡したり、なかなか客の心理に對して敏感である。愛嬌もたつぷりな上に、優しくて、親切で、これがヤンキー・ガールかと一寸吃驚させられる。

こんな女らしい女は、花柳章太郎にだつて一寸眞似が難かしいだらう。

さて、機體は滑走を始めた。それはコツコツと土を蹴りながら歩いてゐるやうな、快い振動である。次第にごうごうと激しい鳴動が起る。密閉された機内が蒸し暑くて、息苦しいやうな、耳の穴が塞つたやうな氣持の裡に、いつか機體は上空に昇つてゐる。氣分も亦涼しく、快くなつた。そして平穩な飛翔が續く。あらゆる乘物のうちで動搖の最も少いのは、平穩の空の飛行機だらう。缺點はたゞ間斷なき音響である。

飛行機は一分間三哩の速力で飛ぶのであるが、視野はかなり緩やかに展開されて行く。都市計畫などゝ勿體ぶつてゐるが、大空からは、カリホルニヤの太陽に照された木造の、赤、白、綠のペンキ塗の家屋が、皆同じやうな形で、まるで繪の具塗りの蜂の巣のやうに見える。自

然的造化と人間的技巧との限界は、其處では、殆ど識別し得ない。だが然し、畑の周圍に作られた縱横の畦道、さては田舍の幾筋かの細い道、その曲線の美しさに、人間の創作「道」は傑作であると目を見張る。「テンペスト」の「人間はなんといふ美しいものだらう！」のミランダの驚きを、「道」に於いて、味得させられる。

牧場の牛や馬は、小石がごろごろ轉つてゐるやうに見える。

無限の白い卷雲だ。それは嵐の夜の海浪にも見えるが、又春宵の櫻花のやうにも見える。思はず匂ひや如何にと、寄せる鼻尖に、窓ガラスが冷く當る。

ソートレーキ・シテイで乘り換へた寢臺飛行機には、十二人の旅客が眠つてゐるのだ。けれど、引きづられて行くのだから、引張り手が幽靈だらうが、飛行機だらうが、餘り誰も氣持はよくない。眠れない者は自然、飛行機の安全性に就いて考へる。

機上には、二人の飛行士が陸上とラヂオを通して通話を交換してゐる。全航空路の天候が、

七十三人の氣象專門家から、それぞれ報告されて來る。飛行機の進路には放射光が照り、陸上には、二百五十ケ所に、無數のビーコン・ライツが灯の街を形成して、暗夜に燦然とした指標を與へてゐる。その中を點々として、廿三の着陸驛三十の中間着陸場が施設されてゐる。天の守り、地の護り、共に密であり、嚴である。これほど大切に保護された、人間の睡眠はなからう。

しかしそれだけ、危險に瀕してゐるのでもあることは事實だ。とはいへ、現代の飛行機の安全率は汽車と同率で、保險金額一萬五千弗に對して、紐育シカゴ間の保險料は廿五仙、大陸横斷の場合は金一弗也だといふ。或ひは安心していゝのかも知れない。尤も恐怖病患者は、いやそれは、飛行機旅行の流行を促進させる、政策的低率だなどと、固執する。

氣流が變化したらしい。すらすらと翔けてゐた飛行機が急にぎごちなく搖れ始めた。機體が大浪に乘つたかと思ふと、海底に沈んで行くやうだ。

五臟六腑がもみくちやにされてしまつた感じだ。機は容易に前進しない。

そのうちに、急激にむつと暑くなり、やつとのことで午前九時頃、暴風雨のシカゴに安着したのだつた。そして更に晝間の飛行を續けて、午後二時頃紐育に着いた時は、命拾ひをした感であつた。

飛行機から降りると、U・A・L會社の寫眞班が待伏せてゐて、日本服でアメリカを飛行横斷した開拓者ミセス・高柳の記念撮影を乞うた。

撮影が終ると、新聞記者が寄り添つて來て、「今朝の新聞に、張鼓峰問題の危機が報道されたが、日露戰爭が始まると思ふかどうか」との質問である。天上界の憂ひがやつと去つたと思へば、地上の憂慮が再びぢりぢりと迫め寄せて來たのであつた。（昭和十四・七）

長壽祕藥

コロンブスは三艘の舟を指揮しつゝ、新大陸發見の壯途に就いた。それは一四九二年八月三日であつたが、無收穫な長い航行は續けられて、遂に十月十二日となつた。その午前二時、船體四十噸の「ニイナア」から叫ぶ聲があつた。「陸だ！　陸だ！」。アメリカは發見されたのである。

こんな緣故だのに、「ニイナア」と言へば、「ナアニイ？」と聞き返すアメリカ人が多い。この「ニイナア」の模造船が、桑港の繁華なパウエル街に、船首を突き出してゐることを、彼等に敎へてやりたい。そして、これが桑港の魚料理屋ベルンスタイン・フィッシ・グロットであることを、是非旅人に知らせてやりたい。

ベルンスタインのお客には、二種類ある。店自慢のク・クウ・クラム・チャウダアの想出に誘

はれて、つい足の向くお馴染みの顧客がその一つ、意外な場所の繫船に、思はず近寄つて、大海老、小海老その他さまざまの魚が泳いでゐるショーウインドウを見つけ「料理屋か！」と分つて、急に食慾を擽られて、這入つてみるといふ不意のお客が他の一つ、私も亦その不意客の仲間だつた。

屋内は船の内部を模寫し、いくつかある食堂はそれぞれ「メイン・サロン」「サン・デック」「キャビン・ヌクッス」「アッパア・デックス」などと呼ばれ、お客は自分の好みの食堂に席を選ぶ。特に目に觸れるのは、キャプテンス・ディナアの時さながらの萬國旗の裝飾と、デックから吊された救命袋である。お客の水兵の一團がはしやいでゐた。「自宅に歸つた」積りなんだらう。

この店の數多の自慢料理のうち冠たるものは、ク・クウ・クラム・チャウダアである。このク・クウ・クラムは貝だが、他の食糧品に比較して著しく多量の沃土を含有することが、榮養學者達の均しく發表するところだ。桑港では、ベルンスタイン以外にはこの貝は求め得られない。それで弱い子供や老人の爲に、ベルンスタインの生魚賣場で、この貝を耐水容器に買つて歸るおかみさんの姿はざらである。然しアメリカ第一のク・クウ・クラムはニュー・イングランド地方

で、このベルンスタインのは第二位だといふ話だ。

さてク・クウ・クラム・チャウダアはまづ蛤の濁りスープといふところ。このク・クウ・クラムは、ピュウジェット・サウンドの清流を呑んで肥えた貝だ。貝殻は帆立貝の形、大きさは普通の蛤貝、色は御所人形の顔のやうなぽつとした白さで、殻の縦横の襞目は規則正しくて、まことに端麗である。その貝殻を、鋭利なナイフでぐつと口を開ければ、ぽつたりと落ちてくる肉は赤味を帶びた黄色である。その肉塊を集めて一日も二日も煮込んだ汁に、牛乳、洋粉、バタア、胡椒、鹽で色と味を付けたのが、ク・クウ・クラム・チャウダア。

熱いスープから湯煙と共に昇つて來るのは、セロリと玉葱の香。匙を持つ前の一瞬間を靜かに香りを聽けば、雜念は消えて、この料理の裡に潜在する、自然と人工との調和美を味得する心構へは整ふ。

クリーム色のスープを啜れば、さまざまの觸覺を舌は受ける。まづ柔らかな薄い大きな一片、何かと嚙めば、即刻に消えて、ただ殘るほんのり甘い香ばしさに、クラッカアであつたわい、とうなづく。馬鈴薯の角張つた一塊は、一嚙みで崩れ、微塵の玉葱とセロリは、輕く舌を

うちながら咽喉に流れ込んでゆく。いづれも穩やかな味ひの中に、只一つの刺戟が強く濃厚なのは鹽豚の味、この單調を破る快い變化の効果は、一瞬の闇の中に閃いた稲妻にも譬ふべきである。最後に殘るは、ク・クウ・クラムの堅い肉、それを靜かに嚙みしめ嚙みしめ味ふところが、このスープのクレッシェンドウだ。しかも延命長壽の妙藥沃土を呑むのであるから、いつかは白髪は黑く、禿も毛が生えることだらう。生活の簡易化に成功したアメリカは、こゝでは若返り法の簡易化に成功したのでもあらう。（昭和十四・六）

珍本屋のおやぢ

一九三六年十月三十日の朝、腕時計は十時を示した。正午出帆のプレシデント・フウヴァアに乘込むべくスウトケイスを片手に、桑港のサア・フランシス・ドレイクの十一階から一階へ垂直にエレベーターで一飛降。ロビイに出ると掲示板に大きな見出し、近よれば、「フウヴァア號ストライキの爲出帆見合せ」とある。アメリカに於ける用務の全部を果して、今故國へ向つて第一歩を踏まうとして、踏むことを封じられてしまつたのだ。しかもその禁足は十二日間の長期に亙つた。しかしそのために私は、桑港の町の辻々にある書店を日毎に遍歷して、遂に一つの大きな發見をすることができた。

ある日のことである。見れば我が前に一書房の扉が開いてゐる。いつもの通り吸ひ込まれるやうな氣持になつて、店内に入つて行く。

一體古本屋といふ奴は、どこの國でも、むせつぽく暗い感じがするものだが、この店は朗らかな印象を與へた。メロンのザラザラな外皮を浸透して、内部の青いゴリゴリの肉を甘汁の透明なエッキスに化せしめるカリホルニヤの太陽の光が、この店の古本、古證文、古肖像畫から一切の濕つぽさを拭ひ去つてしまつたかのごとくである。私は書を漁り始めた。ところが驚いたことには、手に取る書のいづれもが法律の珍本揃ひである。壁に懸けた肖像畫はいづれも過去の名法曹家連、證文類はいづれも法律史的價値の優れたものである。こんな凝つた本屋はオックスフォウドやボストンにこそふさはしいが、この邊境都市桑港には著しく不釣合である。さても何人の經營によるものであらうかと、店内を見廻した。この時大きなデスクに倚つて、ものを書いてゐた男が首を擡げたが、大股に私の前にやつて來た。店主である。まだ割合に若いイギリス系の紳士である。白いダブルカラアが特に私の注意を惹く。氣品もあり、品物を勸めようともしないところが、月並の古本屋のおやぢさんとはちと種がちがふ。彼の話によれば、彼は珍しい法律圖書の蒐集に興味をもつて、毎年一度はロンドンに住む兄のところに行き、其處を本據にして珍本類を探し求めるのださうだ。この店にある書籍や古證文や肖像畫は、大部

分その收穫で、この種の店としてはアメリカ唯一のものだと自慢する。數年前來朝したノウスウェスタン大學法學部の名譽學長ウィグモア先生の話をすると、ああ「ハリイ」か、あれとは極く親しい間柄でしてね、と懷しげな眼なざしになる。ハァヴァアドのディン・パウンドもよく知つてゐるといふ。これは面白いとばかりに、二人はいろいろな英米法律家の話に興じて、彼は賣ることを忘れ、私は買ふことを忘れて、その日はそのまゝ店を辭し去つたのであつた。

翌日私は再び彼のこの店を訪れた。彼は兩手を擴げて歡迎してくれ、かれの秘藏する最珍品を惜氣なく私に見せてくれた。即ちそれは、古本ならぬ彼の若き妻と、十歳ばかりの男兒であつた。

アメリカの小學校で、日本風俗に對する正確な知識を要求してゐるが、文字では目的が達しにくいので、繪畫で示したい。しかし、教科用であるから高價であつてはいけない。一枚十五仙位が關の山だ、一つ適當な畫家に交渉して見てはくれまいか。おやぢさんは靜かに、こんな相談をも持ちかけるのであつた。

彼はまた、君との知遇の記念として日本の東京帝國大學圖書館に古證文を一つ寄贈しよう、

と言つて、奥行の廣い店の隣室に入つて行つた。私もかれについて行く。暗い部屋だ。電氣のスウイッチをひねると、そこには數限りない證文類が山積されてゐる。證文の束の中から彼の取りだしたのは、十七世紀のイギリスの土地讓渡證書であつて、古風な蠟材の印璽が證文からぶら下つてゐる。彼はそれをくるくると卷いて紙に包み、まるで買はれでもしたかのやうにうれしげに「さあ、どうぞ」と渡してくれた。古證文をいぢつた彼の白く長い指先の、多少塵に汚れたのを、私は見落さなかつた。今ではこの古證文は綺麗な新しい額縁に收められて、帝大圖書館の館長應接室に飾られてゐる。

ちなみにこのおやぢさんはダァアヴィルさん、店の所在地はマクアリスタア・ストリイトである。（昭和十三・三）

熊の樂園

ヨセミテ谿谷はカリフォルニヤ州の東中部に位してゐる。「ヨセミテ」とは灰色の熊の意だ。昔は熊族の樂園であつたのだらう。今日でも旅人が、この原住民族に邂逅してばつくりと一口やられることは公然の秘密である。一八五一年、白人の兵隊さんがインディヤンの群を追擊してこの地域に踏込んだのが機會となつて、ヨセミテの絶景が初めて天下に紹介されたのである。

ヨセミテ谿谷に脚を入れると、人間は完全に絶壁の裡の捕虜だ。どちらに逃げても、岩壁に衝き當るばかりだ。「大伽藍」「鷲」「哨兵」これらは聳立した奇巖に與へられた名稱だ。熟視するとみな形容がぴつたり當ると感ずるが、同時に、その怪異を競ふ巨巖の姿態は、各々獨自の威力を以て、ここに佇立する者に、慴壓しつゝ迫るのである。その中にあつて、海拔六千呎、世

界最高の絶壁の一つエル・カピタンの廣い頂上はのつぺりと殆ど平坦で、肩は角を落し、なだらかな弓狀を描いて、マアセド河の河岸に裾をひく。まづ大佛樣の胸像のその首だけを除いたとでもいふ恰好である。迫らず、騷がず、悠々たる靜寂そのものゝ姿である。他のもろもろの絶壁から、視線をこのエル・カピタンに移した時、人と自然とが完全に融合する。われわれは其處に解脫の境地、解放された喜びを味ふのである。

エル・カピタンと共に「ヨセミテ瀧」が更に名高い。それは高さ二千五百呎で、世界最高の瀧である。瀑布の床は三層の階段を重ねてゐる。第一層は約三十五呎の幅で垂直に落下してゐる。第二層は無數の白絲絲卷を一時に投げたやうである。第三層は詩の飛瀑である。まさに銀河を決した勢である。その瀑布の轟きに春の花は開き、その瀑布のしぶきに花の香は漂ひ、喉を潤す牝鹿の背にも、その花片と共に花の香がまつはるのである。

ヨセミテには、更に世界無比の森林がある。それは二十五平方哩に亙つて群生する約一萬二千のセクォイア樹の森林である。セクォイア樹は松柏科植物であるが、幹は赤くて太く、葉は短く錐狀をなしてゐる。そしてその實は「松かさ」に酷似する。氷河期に全滅したセクォイア

樹が殘存してゐるのは、全地球でたゞ北アメリカのこの地域のみであるといふ。このセクォイア深林の中に、世界一の巨木といふのがある。高さ三百呎、直徑二十八呎、全重量は一千噸以上。樹齡は恐らく三千五百年はあらうといふ。

この巨木の根元に、高さ十呎、幅九呎半の大穴が穿たれてゐる。そこを人間が濶歩し、自動車が走る。人間の自然に對する征服欲でこの穴は穿たれ、人間の慈悲心で樹は伐り倒されなかつたのでもあらう。この樹根のトンネルの天井や兩壁には多くの旅人が自己の姓名を彫りつけてゐる。「伊藤」「田中」などの日本文字もきざまれてゐる。サインして貰はねば面接の實感を得られない現代人は、この古樹に向つては、自ら進み出てサインして漸く滿足するのでもあらう。

セクォイア樹の年輪を調べながら、科學者は氣候變化のカアヴを研究する。その結果、西部アジア地方とこのカリフォルニヤの地域における氣候の時代的變化のカアヴが殆ど同一であつたことが實證されたといふ。そしてこの氣候變化のカアヴの類似性は右兩地域間だけに限らず、全世界的であるといはれる。年輪の一つ一つを細かく比較檢討し、その變化に照して文明

の興亡史を顧みるこの科學者の業績を見る時、アリストテレスやモンテスキューやバックルの說いた文化と氣候との緊密な關係といふ問題に、わたくしの思索はおのづから進展して行くのである。

この巨木の林を仰ぎ見ると、紐育の町のスカイスクレイパアが聯想される。そして米人の築き上げたあの獨自の高樓は、ヨセミテのこのセクォイア樹からヒントを得たのではなからうか、などといふ想像がわたくしの頭におのづから浮んでくるのである。

ヨセミテの自然は雄大であり、壯嚴である。一九三六年の夏ヨセミテに開かれた太平洋會議の或る懇親會の卓上演說で、某婦人代表が、「この大自然に接したときの氣持——讃美と謙讓——を以て、われわれ異つた民族がお互に接し合つたなら、世界の平和と人類の福祉とは蓋しセクォイア樹の如くに永續するであらう。」といつて、セクォイア樹の實を摘みあげて、一同に示したことがあつた。その時起つた同感の拍手は堂より溢れ出て、四圍の絕壁に反響したことであつた。この婦人の卓上演說があつてから、このセクォイアの巨樹の年輪は、たしかに二つも殖えてゐるのである。（昭和十三・六）

コンコウドの人達

街上の紐育兒はすつすつと爪先で歩く。笑顔などは作らない。或は現代美術學の學說を信奉して、皺の寄るのを防止するためかも知れない。これに反し、ボストン兒はボコンボコンと踵音を響かせる。穩かに微笑んだその顏は、旅人に一寸の間旅を忘れさせる。紐育は尖端を行く商業の町、ボストン附近は學問と藝術の都。人間の歩き方も、環境に影響されるところが多いらしい。

私にとつて、ニュウ・イングランドは樣々の意味で、アメリカ大陸中最も親みのある地域である。そしてボストンの西北二十哩の近郊コンコウドは、アメリカの文學史が誇りとする多くの思索の人を輩出せしめた聖地で、私はその自然と人とに對する愛着の故に、幾度かそこに杖を曳いて、その環境を味ふことを樂しんだのであつた。

コンコウドは一七七五年四月十九日の眞晝間、銃聲と蹄音、嘶きと鬨の聲に震動した。それは二千以上の英軍が五百のアメリカ農民義勇兵に擊破され、二百七十を超ゆる英軍の死傷者が萠ゆる若草の野邊を紅に染めたからである。この事實はアメリカの大地を動搖させ、遙か大西洋を越えて、對岸の舊世界に新世界の脈搏を感受せしめたのであつた。しかしこの歷史以來今日に至るまで、コンコウドの町は、百五十年餘りの沈默を續けてゐるのである。

古戰場に建つ大理石のオベリスクは、英軍との最初の會戰を記念するものである。すぐ前には欄干付き木造の、角度の淺い太鼓橋オウルド・ノウス・ブリッヂがある。この上で、英軍が敗戰し、潰走したのだといふ。橋の下の流れはコンコウド川、ゆるやかな水勢である。この流れのゆえに界隈の住人の氣質は穩かであるとさへいはれる。水面に映るは岸の柳、樫など。葦が密生して、風に搖れ、水鳥にざわめく。水底に光るは小石、泳ぐは小魚。

橋を渡れば正面に聳えたつ銅像、英軍を擊破したアメリカの農民義勇兵（ミニュットマン）である。シャツの兩袖をまくしあげ、右手に銃を握り、兩肩をそびやかして敵兵を凝視してゐる凄愴たるその眼光は、陽の光を受けて愈々効果的である。動く自然の中に只一つの不動のこの姿は、次の瞬間の

動作をまざまざと表現して、迫力を、觀る者の胸に傳へる。これは確かに、美術家フレンチの會心の作であるに違ひない。銅像の背後には綠の野邊が遙々と擴り、蝶も舞ひ、とんぼも止る。そして時々は仔牛もぢやれる。ピクニックのお辨當を開く家族もある。

一九三六年の初秋、私は幾年振りかで、コンコウドを逍遙した。それは天高く氣澄み渡つた小春日和、古戰場に向つて靜かに、歩を運ぶ自分に一人の老紳士が「お早う」と呼びかけた。かれは續けて言ふ、

「日本から遙々おいでか？　何か私でお役に立つことはありませんか。實は私も昔日本を訪れました。その時朝野から受けた歡待は、今でもなほ忘れられません。池田成彬氏はまだ御健在ですか？　あの方にはお世話になりました。古戰場はまだ相當遠いから、自動車でお送りしよう。あそこに見える二階家が、私の娘の家です。一寸お休みになりませんか」

紳士の低い聲も靜かな街では遮るものもなく、四五軒先きの娘の家に響いて行つたらしく、お婿さんの、「お父さん、私が俥でお供しませう」といふ、若々しい聲が聞えて來る。

しかし私はこれを辭退した。世界第一の紅葉はヒマラヤ山麓、第二は日光、第三はニュウ・

イングランドのこの界隈だと聞いてゐるが、紅葉には時期尙早の楓も、兼好法師を氣取れば「また見どころは多かんめれ」だと笑つて、親切な老紳士とお婿さんに別れた。

暫く獨り歩きをつづけてゐると、背後から一臺の自動車が馳せて來たが、靜かに止つた。見知らぬ運轉者が、そばにやつて來た。うすよごれのした白ズボンにスウェタアといふ扮裝の彼は、遠慮がちに言ひだした。

「古戰場にお出でなのですか、お供しませう。私も日本に參つたことがあります。その時は大層な歡迎を受けましてね。かうして日本のお方をお見かけしては、素通りはできません。私の家は近いのですから、お晝食に如何です？　あ、お辨當御持參？　さうですか、それぢや古戰場にお送りして、お歸りの時間にお迎へに來ませう。お茶はぜひ私の家でね。今日は實はゴルフに出掛けたもんで、こんな服裝で失禮です。」

三時間程の逍遙後古戰場を出れば、彼の自動車が待つてゐた。そして畑の中の一軒家の彼の宏壯なる邸に、私は案內されたのであつた。彼はオフィスをボストンにもつ實業家であつたのだ。

當日は日曜日で女中の休息日、お茶の接待は主人夫妻と可愛い二人の息子と一人の娘。それはまことにコンコウドらしい雰圍氣を釀したお茶であつた。

コンコウド・グレイブは一八五三年ブル氏が初めて栽培したもので、その成功の結果、今日ではアメリカ全土の食卓に盛られるやうになつたのだといふことを聞かされながら、その一粒一粒をしみじみ味つたことだつた。談偶々ハァヴァアド三百年祭に上り、總長コナントが主人の從兄弟たることを知つた。

「親類中では皆ジミイ、ジミイと子供扱ひに呼んでるんですがね。いやジミイもいつの間にか偉い出世をしました。」主人は感慨深げに首をかたむけて、につこりとした。

主人と娘さんに伴はれて、丘上のスリイピイ・ハロウの掃き清められた墓地に詣うでた。樫、楡、楓などが鬱蒼と茂る蔭に、有名無名の墓が列んでゐた。

ホウソウン、サロウ、オルコット、エマスン等のコンコウドの文人は、いづれもこの墓地に埋められてゐる。エマスンの石英の碑は、自然石をそのまゝに用ひて、印象的である。風雨に磨滅されて今は讀み難い碑文には、

"The passive master lent his hand
To the vast soul that o'er him planned"

とある。

コンコウドの環境中に成育したこれらの文人たちとは、書物を通じて、今も緣が深い。往來で知りあつたこの一老紳士と實業家の家庭、それは會話を通して結ばれた奇緣であつた。いづれも忘れ難い緣故である。そしてそれはコンコウドあるが故の緣故であることを、私は屢々思ふのである。(昭和十三・四)

ヤンキイ料理

時節柄ナンキン料理と間違へてはいけない、ヤンキイ料理である。

跳上る海老を頭から眞二つ。兩の切口にバタを薄く引き、鹽胡椒を振りかけて、オヴンで燒くこと廿分。これがボストンのうまいもの屋ダアギン・パアク自慢の燒海老料理である。皿に盛られたその大きさは、鯨差一尺はある。

その昔渡邊綱が羅生門で切り落した鬼の腕が轉げて來たのではないかと、呀と見直す。されば、とて不氣味さは微塵もなく、さえざえと赤い殼に包まれた焦目の散在する白い肉は、しきりに唾を誘ふ。

バタソウスもレモン汁も退けて、靜かに肉をかんでみると、初めの齒觸りはさくりとして、二つめは柔かく、三つめには甘みと澁みとが快く溶け合ひ、次第にビフテキのやうな濃厚味が

とけて出てくる、そこをこくりと飲込んでやれば、すつと喉元を通りすぎて行く。後に漂ふほのかなる香。名鐘は餘韻に魂を奪ふといふが、この海老は餘香に我々を恍惚たらしめる。

貧弱な材料をうまく食はせるのがフランス料理の妙、イギリスでは自然の味を生かすのが誇だといふ。

この自然を生かさうとするアングロ・サクスン趣味は、新鮮な果物と肉と野菜と魚とを豐富にもつ新天地において、はぐくみ育てらるゝによき環境を見出したらしい。（昭和十二・八）

ロングフェロウ家の日本簞笥

ハァヴァアド三百年祭を目前に控へて、舊友グラフトン・ジョウジ・ウイルソン教授が目の廻る多忙さにかかはらず、私達夫妻のために考へてくれたのが、このロングフェロウ・デイである。お蔭でその日は一九三六年における私のアメリカ滯在中、もつとも印象的なものの一つとなつた。

ウイルソンに案内されて、ハァヴァアドの下山重丸講師及び妻と共にコック・ホウスに至る。これはケンブリッヂの料亭、往來に面した庭前には色とりどりのビイチパラソルが擴げられ、その下にはテイブルと椅子とが配置されてゐる。ナプキンも皿敷も黄色地に綠の木馬を刷つた縮緬紙、店自慢の料理も數々あるが、まづ一番がボストン・ベイクト・ビインス、まあ、うずら豆の砂糖煮である。その昔この界隈では、家毎にこの煮豆の香が立罩めてゐたといふ。そして

お鹽梅をみた小姑が「おや、義姉さんの煮豆は堅過ぎるわよ」などと舌ちしたものだつたとか。さてこのコック・ホウスはロングフェロウの詩「村の鍛冶屋」の舊跡といふので、客を呼んでゐる。昔の「枝葉茂れる栗の木」は朽ちて、かげもなく、たゞその一部分が、小學兒童からロングフェロウへ贈られた肱掛椅子となつて、殘つてゐるばかりだ。

食後はロングフェロウ・ハウスに案内された。門前に聳えたいく本かの楡の大木、詩人がクインジイ總長に乞ふて校庭からここに移植したといふ楡はどれかと、梢々を仰ぎ見る。

導かれた廣間に待つ程もなく現はれたのがデイナといふ當主で、詩人ロングフェロウの孫。祖父詩人の書齋を象牙の塔として、ここから出たり入つたりの獨身の左傾思想家、しかし慇懃で愛想よく、常識の圓滿振りはお祖父さん似のいい孫。

「これはこれはようこそ。お祖父さんはこの家を自分の家ではない、アメリカの家だといつて大威張りでした。ジョウジ・ワシントンの大本營はこの家でしたのでね」などと溫い聲だ。

珍客だから、一般には公開しない部屋を全部お見せしませうと、先導してくれる。數々の部屋の裝飾に東洋美術が多いので、これはどういふわけかといふかると、デイナはエヘンと一咳。

そもそも私の叔父さんで詩人ロングフェロウの長男チァアルス・アップルトン・ロングフェロウは、内亂戰爭當時の騎兵士官、一八六九年（明治二年）偶々東洋を訪れ、六十二歳の父詩人にお土産にと買込んだのがこの美術品だといふ。佛具、佛像、繪畫、短冊、屏風に花瓶。更に奥の間にぽつねんと一棹の箪笥が据ゑてある。おやと近寄れば、奉書の紙片が貼つてある。見れば文字は墨で、筆法も快く、

横濱市山手百七十二番館　　京橋水谷町
ロングフェロー殿行　　角一屋出し

そのロングフェロー殿に冥土に行かれて、おいてけぼりを喰つたこの箪笥は、貼られた紙片の字句を、今日まで家人の誰からも讀まれないうちに、すつかり黄ばんでしまつた。初めて讀んできかせたのが私だといふので、デイナは大よろこび、箪笥の古事來歴がやつと分明になつたとて、急いでペンを走らせ書きとつてゐたが、「まさかロングフェロウの意譯ではありますまいね？」とにやり。この日本箪笥が實用品であるだけに、土産として貰つた詩人が如何なる用

途に充てたか、そして羽根ペンを握つた手がいかに屢々この引出を開閉したことかなどと考へれば、お江戸のまんなかから横濱に搬ばれ、更に太平洋を渡つてロングフェロウ家に落着いたこの箪笥に、日本と詩人ロングフェロウとを結ぶ楔を見出し、デイナもウイルソンも、われわれも、六十七の齡を重ねた箪笥を一撫、二撫するのであつた。

デイナは最後に言つた。自分は今祖父の詩の各國語の譯を蒐集してゐるが、日本譯はまだ手にしてゐない、あつたら是非送つてくれ、と熱心な口吻で言ふ。歸朝後、岩波文庫版の故齋藤悅子嬢（齋藤駐米大使の令妹）のエヴァンジェリンの邦譯を送つたところ、デイナから感謝狀が來た。流石社會主義者らしく、本の價格の低廉なる點を指摘して、萬人向きだと喜んで來た。勿論その喜びの中には、祖父の詩が日本で多くの人に讀まれるといふ、孫らしい喜びが多分に含まれてゐるのでもあらう。（昭和十三・三）

摩天樓

超モダン型の所有權といへば、なんといつても、紐育の空間所有權であらう。成程スカイスクレーパーの住人達にとつては、地主樣になるなんてことは、もう古臭い。それかといつて、彼等にとつては、自分等の占領する部屋の空間が、いつまでも借り物では滿足ができない。是非とも完全な所有權を、彼等は欲求するに至るのだ。土一升金一升の紐育では、ローマ法以來の格言に從つて、「土地所有權は上は天國に及び下は地獄に至る」(これは超自由譯である)などと慾張つたことは勿論言つてゐられない。さうした事情で、傳統的土地所有の思想は、當然平面的から立體的へと進展し、空中が、階層的に何人かの所有者に分割されねばならぬことになつて來るのである。尤も誤解のないやうに、これは法律家の空想であることを一言斷つておかう。「空中架樓閣」といふ諺が英語にある。それは不可能事を企圖することを、嘲笑した言葉であ

つたのに、紐育人はこれを文字通りスカイスクレーパーに於て實現し、却つてこの傳來の諺を嘲笑してゐる概がある。雲閣(メーソン・デ・ニュアージエ)とマドックス・フォードは呼んで讃美してゐる。全く「雲閣」ではあるが、仙人窟ではない。又その住民は雲の上人ではなく、無位を誇るデモクラットである。そこが紐育の紐育たる所以なのでもある。

スカイスクレーパーを仰ぐ者は、その工事といふものを、考へずにはゐられない。何しろこの建築は、地下工事だけでも一大事業だ。まづ地下を四五十呎も掘り下げなければならない。そして其處に、コンクリートの土臺を築き上げる。だからその大穴を埋めるために要するセメントの量は實に莫大なものだ。このコンクリートの土臺の上に、更に鋼鐵の柱が建てられるのである。紐育の高層建築の發達には、歐羅巴の力が大いに貢獻してゐることを、歐羅巴人は指摘して得意がる。まづイギリス人は、イギリスのポートランド產のコンクリートが供給されるからさといふ。又あのベセマー鋼鐵もイギリス式製法だぞと威張る。フランス人は、あの建築法は

フランスの影響さといふ。成程このゲーヂ型の高層建築は、一八五一年イギリス人に依つて發明されたのであつたが、しかし紐育の建築は、フランス人ル・デュックの影響を直接に受けたものらしい。一八八〇年に彼の公けにした建築に關する論文は、フランスでは餘り顧みられなかつたが、當時巴里の美術學校に學んでゐたアメリカの留學生達、殊にジェネを刺戟するところが強かつたといふ。彼等アメリカ留學生達は、恐らく紐育の地質が岩磐であることを知つてゐたので、特に高層建築といふことに興味をもつことになつたのであらう。歐羅巴の影響もさることながら、紐育の地磐は、地震があつても絶對に大丈夫と保證されたので、紐育では、建築物の高さに制限を置く必要がなくなつた。それにエレベーターも發明されてゐるのだから、何を怖れんとばかり、紐育の町は空へ空へと延びて行つたのである。

スカイスクレーパーのために、紐育の町は、日光封鎖から脱し得ないでゐる。町を行く人間は皆あの巨大な重苦しいスカイスクレーパーの影を背負はされてゐるのだ。スカイスクレーパ

ーは、人間に對して威嚇的だと言はれる。成程それも確かに一つの觀察である。それは建物の外觀の白とか桃色とかの鮮明な色が眼を刺戟するためでもあるだらう。或は又、直線と水準線の交錯による單純美の效果を狙つて、外觀を無裝飾としたがために、却つてその異常の高さを特に引き立たせるためでもあらう。

しかしこの建築は靜觀してゐると、又親しみ易い要素を把握することが出來る。鮮かな色の石材や煉瓦で積み上げた建物の外觀は、直感的に形容すれば、積木細工であるが、その空高く聳立する姿は、一時アメリカの名物であつたホールド・アップの姿勢とも見える。

高い窓から、彼方の霞んだ地平線を眺める時、森か林かと不審の眼を睜つてゐると、それが森でもなく林でもなく、實は自由な獨創的な形體に延び上つた建物であつたといふことは、紐育に遊んだ者の屢〻經驗するところである。實際これらのスカイスクレーパーを霞んだ空に遠望した形は、島の如く、奇峰の如く、奇岩の如く、又林の如く、森の如く感じられるものである。それは慥かに、晝間の紐育の提供する詩材である。

紐育に缺けてゐるものはお城だといふ。しかし、町中のあの四角形の窓の一つ一つには、お

城に値ひする安全さと豪奢さとが見出されるのである。彼等紐育人は、あの窓の中で、金を儲け、子を生み、これを育てゝゐるのである。夜が來て、建物の輪廓が消え、これ等のいくつもの窓の燈火のみが、夜の闇の中に、地上から天空へと點綴される光景は、晝間の紐育には考へることも出來ない神祕さを漂はせる。超モダンの紐育人すら、自分達のお城であるあの窓を見上げて、「どうです、中世紀でせう」と恍惚としてゐる。

百二階もあるエンパイヤ・ステート・ビルは高さ一千二百數十呎、斷然紐育一の、いや世界一の摩天樓である。一日私はエレベーターで六十階まで一分間千呎をぶつ通しに昇らされ、鼓膜がぴりゝと痛んだことを忘れない。百二階の屋上に立つと、高山の頂上を吹くやうな冷い烈風で下界は尙秋の候といふのに、嚴冬を感ぜしめる。このビルは、この高さを保持するために、自震するやうに設計されてゐるのだといふ。下界を見下ろすと、其處には、街上から見上げては高いが、この屋上から見下しては、まだまだ低い紐育の町の屋根が、秋の陽を受けて美しく、時々燦然と光るのであつた。そして町の道路を埋める自動車の列は、蟻の觀音詣りに似てゐる。又歐羅巴では空に聳えてゐる教會の塔が、此處では、スカイスクレーパーのために壓倒さ

れて、小さくかぢかんでゐる姿は、何物かを表徵するやうにも眼に映る。

私は十七世紀の頃、英人ハドソンがオランダ船の船長として、この紐育に上陸した頃の事を回想した。今日の建築物の敷地は當時は森林地帶だつたといふ。そして其處に住む土民の無慾さを、商人根性のオランダ人が、故國へ歸つて吹聽したといふことも讀んだことがあつた。この土民根性とオランダ根性とが複合的に、現代紐育人に遺傳されてゐるやうに考へられる。世界金融の覇者へと突進するウォール街住人の活動は、オランダ的性格を示すものだが、社會事業などには、私財を抛げて顧みない米國富豪の氣質は、確かに土人氣質だと思ふ。この土人とオランダ人との交歡は、オランダ人側からはパイプと火酒、土人側からは、煙草と毛皮との提供で始まつた。そして最初に發せられた言葉が「幾何(いくら)?」だつたといふ。全く商業都市紐育はこの「幾何?」から進展して、今日に至つてゐるのである。

同時に私は、一昨年の秋巴里の大オペラ座で見物した、ファウスト劇を回想したことであつ

た。百人に餘る若き美女が妖艶な姿態で地に臥したと見る瞬間、ファウストの前には、百に餘る墓石が展開されてゐるのだつた。そして、今我が眼下に展開される紐育の榮華ともいふべきスカイスクレーパーも、次の瞬間には一齊にひよろひよろと延び上つて來て、墓標のやうに、卒塔婆のやうに、私の前に立ち塞つて來る豫感に襲はれた。

更に、スカイスクレーパーが人類に對する皮肉な存在のやうにも、感じられて來る。世界到るところ人材拂底を叫ぶ聲が高い。しかし、これはより深い人類の惱みの發露なのではないか。人間は自分の作り出した物質文明の奴隷となつてしまひ、今ではこれを統御してゆく叡智をもつ人物が、世界中で拂底してゐるのだ。それに答へて、人傑の代用品に建築の傑物をと、こんな怪物を作り上げたのぢやないかなんどといふ空想が浮んで來る。

スカイスクレーパーは「マシーン・エイヂ」の典型的な表徴である。成程同じく天を目指しても、古いゴチック式などは、「神へ！」の祈が表徴されてゐたのに對して、このスカイスクレーパーには、かうした宗教的要素が全く缺けてゐる。それは近代人が獲得した冷靜、正確、精密によつて表徴される科學的精神の發露につきるのである。（昭和十五・四）

綠都

舳先に立つてホノルルの空を仰ぐ船客は、まづその空に魅惑を感ずる。地理書が擧つて特記するあの空、一點の雲のない群青の空に魅惑を感ずるのである。ホノルルとは「美しい空」といふ意味であるのだ。

群青の空に輝いてゐる太陽は、からからと聲を揚げて笑つてゐるかの如き太陽だ。そして長い間船室に籠りがちだつた船客の頰に、この笑ひは一寸ばかり痛い刺戟を與へる。貿易風と海流との影響で、ホノルルは同緯度の國よりも、十度は溫度が低いといはれるのではあるが、熱帶の陽は、矢張りどこでも明るくて强い。

欄に寄つて海上を覗き込むと、其處には、空の色よりも更に濃厚な群青色が漂ふてゐる。それは輝かしくて、澄み切つてゐて、人物的に形容すると「聰明な美しさ」とでもいふべき趣きが

ある。鷗外に依つて我國人に紹介された南伊太利のキャプリ島のグロット・アジューロ（青い洞窟）の水の色が、やゝそれに似通つてゐよう。更に又聯想されるのは、巴里ノートル・ダム寺院の、十三世紀の作といはれるあのローズ窓の色である。この群青色に輝く水の上を、一日に三回、各國の旅客船が、無感覺にのそのそと這ひづつて行つて、錨を投げ、お客を吐き出す。あの空の下に、この海を前にして、ホノルルの港、ハワイ群島の首都たる常夏のホノルルが、嶮しい角度をもつた綠の山々を屏風にして、木造の家、石造の家を、多彩な熱帶植物の群生する丘の上や平野の中に抱擁する。

ホノルルの特徴の一つは、植物の色の美しいことである。大樹に草花のやうな華かな、大きな花が咲いてゐる。その香は高くて芳しい。ポンシェナの花の紅の色は、白の表徴する清淨無垢を、紅の色で表現したものとでも形容したい。藤の花に似た黃金色のゴールデン・シャワーは、藤の花を「紫の蝶夜の夢に飛びかひぬふるさとに散る藤の見えけむ」と詠んだ晶子女史なら、早速金色の胡蝶の飛び交ふ夢を見ることでもあらう。ハイビスカスといふ木槿に似て更に大きな花は、種類が二千種もあるといふ。一九二五年の夏、第一次太平洋會議がホノルルで開

かれた際、當時の美しい總督夫人が、ある茶會の席で「私の故郷はカリフォルニヤです」と言つた。隣席のある代表が「カリフォルニヤとホノルルとどちらがお好きです？」と質問した。夫人は暫し無言でゐたが「ホノルルです。ホノルル程美しい花の國はないんですから」と言つて、花の顏に、卓上のハイビスカスの花を近づけて、しみじみとその香を嗅いだ情景が想ひ出される。

數限りない香の高い美しい花を首飾（レイ）に編み、これを旅行者の首にかけてやつて、歡迎の意を表したり、送別の名殘を惜しんだりする習慣が、古來ホノルルに傳つてゐる。おぢいさんが、赤い花のレイを首に卷かれて、照れながら棧橋を渡つてゆく姿は、ホノルルの波止場風景である。別離の際に贈られたレイは、船が港外を去つてから、必ず捨てなければいけない。そしてもしその花がホノルルの岸邊に泳ぎ歸つたとしたら、贈られた主も、再びホノルルに戻つて來るのだといふハワイの傳說、今でも、息子と別れる白人の母親なんかは、こんな傳說に神經質になつてゐる。私などは、ホノルルを八回も往復してゐる。私の贈られたレイは特に待つてゐてくれる人もないホノルルに、いつも漂着してゐたことであらう。

しかしビンガムといふ宣教師のスケッチに依ると、一八二二年頃のホノルルは一望ただ渺茫たる砂原で、椰子樹がぶつきら棒に其處此處に延び上つてゐたものである。かうした砂原に諸種の植物を移植したり、貯水池を設置して水を豐富に供給したりして、今日の所謂「グリーン・タウン」を仕立てあげることができたのである。從つてホノルルの自然美は、これを先住者のかうした不斷の努力と併せて觀賞すべきであらう。庭のエヴァー・グリーンの芝生に、水道のゴム管から水を撒いてゐる子供、その水に虹が映つてゐる。ブラッセルのあの小便小僧の像と對比して、これは如何にも「綠の都」に相應しい情趣であらう。

花ばかりではなく、魚まで色彩が豐かだ。虹を使つて、魚の背中に、入墨したとでも形容したい。樣々な色彩と味をもつ鮮魚のうち、その王樣とされるクムクムといふ魚は、鯛に似通つた形だが、骨までしやぶつても、未練が皿に殘る。

果物の中では、殊にパイナップルの味が世界的だといはれる。ホノルルがあんな立派な鋪裝道路を作ることの出來たのは、このパイナップルのお蔭だ。パイナップルの畑を空中から覗いて見ると、赤い土の上に綠の壘が並び、綠の川が流れ、綠の圓池が穿たれてゐるやうだ。土の

上におもとの葉よりも細い薄綠色の葉が、同じ位の長さに整然と並んで、しかもその整列が、地の極みまでも續いてゐるかと疑はれる程畑が廣い。それ程、ホノルルのパイナップル栽培業は盛んであるのだ。そこら一帶にパイナップルの酸い味が漂ふてゐる。よく熟したこのパイナップルをずぶり切ると、堰を切つたやうに、汁がどうと流れ出る。芳香は壁を貫いて隣室に、更に次の室にまで漂ひ流れてゆく。

ホノルルの名勝ヌアヌ・パリ（ヌアヌ絶壁）がある。市内が庭園美を呈出してゐるのに、市を去ること僅かに六哩の地に、ヌアヌ・パリの天下の嶮を擁してゐることは、旅行者に「ホノルルは見倦きない土地だ」と言はれる理由になる。市内は雨も細く、風も肌觸りを樂しむ程であるのに、クウラウ山脈中にあるこのヌアヌ絶壁は、貿易風の進路に當るので、烈風と豪雨に曝されてゐる。その爲に大浸蝕作用が行はれて、今日のヌアヌの嶮が創り出されたのだ。

この絶壁は又古戰場でもある。昔カメハメハ酋長が此處に勝利を得て、遂にハワイ王朝の最初の王となつた。その時、捕虜となつて虐待されるよりはと言つて、敗軍の將が悉くこの千仞の絶壁から投身して、悲壯の最後を遂げてしまつたといふ。その時も彼等を襲ふたであらう烈風

が今尙依然として、海拔千二百呎のこの峠に、唸りながら押し寄せて來る。下瞰すれば、海と、島と、平野と山からなる宇宙が、其處に展開されてゐる。水蒸氣の作用で、海も、島も、平野も、山も、時々刻々色彩の變化を見せるこの宇宙が展開される。

ホノルルの社會は、諸人種の集合に依つて成立してゐて、それは宛ら人種展覽會の觀がある。このことは七ケ國語の定期刊行物が、この都市で發行されてゐるのでも分るであらう。そして諸人種の中で最も數多いのが、日本人である。日本人は全人口の三割强を占め、現在では十五萬三千人を算すると云ふ。抑々日本人をハワイに招いた王は誰あらう、カラカウア王であつたのである。主は一八八一年、東洋を經て歐米漫遊の途に上つた。それは丁度明治大帝の御世の頃である。

來朝した王は、日本朝野の熱烈な歡待を受けた。聞くところによると王は、日本皇族の御一人を、ハワイに賜りたいといふことであつた。もしもこの王樣の大望が叶つてゐたならば、太平洋の眞中は、今日とは少しく趣の異なつたものとなつてゐたであらう。この話の眞僞は知る由もないが、王が日本の政府當局者と協議して日本の移民を招いたことは事實である。その最初の移

民は、男女百五十名の「契約勞働者（コントラクトレイバラー）」、月給は十五弗で、三年間働く契約であつたといふ。時は一八八四年である。その後ハワイの日本移民は次第に增加して、遂に今日の人口を築いてはゐるが、日本人は概して、昔々の浦島さんを初めとして、生れ故鄕に歸ることが唯一の希望である。儲けた金は「本國預金」として、どしどし日本に送られて來る。この「本國預金」といふ慣習は、日本の爲替政策の上では好都合ではあるが、殖民政策の上からは遺憾な點が多い。かうした慣習の少い支那人などは、日本人より遙に强い經濟的地盤をハワイに築き上げてゐる。勿論日本人でも、父子相次いで同じ事業の隆盛を圖り、白人の社會からも敬意を拂はれてゐる相賀日布時事社長や毛利ドクトルなどの家庭がホノルルにあることは、大いに意を强うするところである。日本移住者の敎育機關であるが、ホノルルの最初の日本語學校は、明治廿九年に資金十五弗を以て開始されたといふ。今では津々浦々にまで、日本人の居るところには「日本語學校」なるものが建つてゐる。そして毎日白人と同じ授業を終へた後、日本兒童は更にこの「日本語學校」に通學させられる。兒童に取つては、英語と日本語の二重敎育を重疊的に課せられることになるので、負擔が重くてかはいさうだけれど、二世の男女の往々惱む親子

間の思想上の誤解といふものが、それがため幾分緩和されてゆく利益はある。それから現在の經濟的狀勢の下に於ける二世にとつて、この二重教育が彼等の將來の生活の保證としても役立つてゐる。それほど白人社會の偏見は、彼等を百パーセントの米人として經濟的に發展してゆくことを困難ならしめてゐる。それは兎に角として、「賣家」と書くんでも、唐やうでも、アメリカやうでも自由自在といふ腕をもつてゐる方が、面白いぢやないかと、彼等を慰めてやりたい。

一體ハワイの歴史を遡ると、紀元五世紀頃、ポリネシヤ種族がサモア島方面からやつて來たものらしい。遙々と二千哩の海路を獨木舟に棹さして、風に逆ひ、潮流に逆ひつゝやつて來たものである。更に十一、二世紀に、再び同じサモア島方面から獨木舟を連ねて、移民が渡つて來た形跡がある。それから約五世紀の間は、これらポリネシヤ人種の間だけで、群雄割據の姿を呈してゐた。西洋とハワイとの接觸は一五二八年からであつた。この年にスペインの船がハワイに難破した。そして船長とその妹がハワイの土着民と雜婚したことも事實であるらしい。又ハワイの王冠は、ポリネシヤ風よりはむしろスペイン風であるともいはれてゐる。イギリスの

有名な探險家キャプテン・クックがハワイを發見したのは、それから二百五十年後の一七七八年である。しかし、アングロサクソン系の歴史家は、ハワイの發見者をキャプテン・クックであると我田引水的に特筆大書する。そして、クックの偉業を記念する大記念碑がハワイ島のカアワロアといふところに建立されてゐる。一七九五年カメハメハと呼ぶ酋長が、ハワイ全島を統一して、カメハメハ王朝八代百廿年の基礎を築いたのであつたが、一八九四年には王政が共和政に變り、一八九八年七月には、太平洋に向つた米國の帝國主義的發展の波浪に浚はれて、ハワイ群島は北米合衆國に合併されたのである。そしてホノルルは、カメハメハ一世以來ハワイ群島の首都と定められてゐたのである。

ハワイの歴史を讀んで興味を感ずることは、ハワイと酒との關係である。禁酒主義は、米國宣教師の影響を受けない時代に、既にハワイ土人の間に支持されてゐた。この禁酒主義の唱導者はカメハメハ一世である。當時土人が怠惰に流れ、相互に鬪爭するのを、王は大いに憂ひた。その原因が酒であることを看破した王は、禁酒令の發布を企てゝゐた。ところがその王樣自身が、ふと一口飲んだ酒の味が忘れられなくなつてしまつた。王の泥醉する日夜が續いた。王の

顧問に、ヤングとデヴィスといふ二人の米人がゐたが、祕かに王の許を脱出しようと策をめぐらしてゐた。王がこれを咎めると、二人が言つた。「王様がこんなのんだくれでは、我々の首が何時刎ね飛ばされるか心配です。」王は大いに覺醒するところがあつた。一八一八年には、自ら率先して禁酒を實行し、土民にも勵行させたといふことである。その後アメリカ宣教師の渡來以來米國からの禁酒運動がこの地にも傳つたが、民族的傳統のあつたためか、他の地域よりも好成績を示してゐたと彼等に依つて傳へられる。

明治廿年頃のことであつた。或る日總領事館の玄關に、づどんと卸されたのが、酒樽二つであつた。搖れるほど美味しくなるといふ灘の生一本が八斗も、太平洋の浪に搖られ搖られて屆いて來たのだ。寄贈者は榎本遞信大臣だ。總領事は鯨飲家であつたので、手を拍つて喜んだ。傍の夫人の顏は曇つた。「どうかこのお酒はお捨て下さい、お體に障ります」「何を言ふ馬鹿」

總領事は公用で外出した。歸途想ひ出すのは、酒の香であつた。歸館すると總領事は直ぐに酒樽を探しに行つた。なんと酒樽は破壞されて、庭に轉つてゐるではないか。日本の酒はみんな、ホノルルの土が飲みつくしてしまつてゐたのだ。この話が、當時の時事新報に、安藤總領

事酒樽を捨つと大々的に報道された。それが又、アメリカの新聞にも轉載されて、安藤總領事はアメリカ人の賞讃の的となつてしまつた。榎本大臣から手紙が來た。讀むと、よく酒樽を捨てたと賞めてある。總領事は大いに考へるところがあつた。ハワイに於ける日本人禁酒會の初代會長は、誰あらう安藤總領事であつたのである。

アメリカの禁酒法施行時代のことである。それは丁度一九二五年、私がホノルルに滯在中のことであつた。アメリカ艦隊がホノルルに碇泊した。新聞紙は擧つて、世界に精鋭と完備を誇るアメリカ艦隊に歡迎の辭を呈したのであつた。そして歡迎の宴が日本料理店「望月」で開催された。夜更けて益々宴は酣であつた。その宴席に、アメリカの年若い婦人檢閲官（プロヒビション・オフィサー）が靜に這入つて來た。敵には背を見せないが、婦人には降伏するものと訓練されてゐるアメリカの將官さんたち、總立ちとなつて逃げれば、檢閲官が追ひかける。醉眼の將官さんが、望月の庭の池の中を、太平洋と間違へて泳いだ。馬鹿に太平洋が狹くなつたわいと思つたと、後から述懷したといふ話を聞かされたものだ。

ハワイ土民にキリスト教が傳つたのが、一八二〇年である。傳道師はアメリカから、殉教を

覺悟して渡航して來た十八名の男女であつた。彼等は布教と教育とを以て、土民を導いたのであつた。王も宣教師を招じて文字を習ひ、教に耳を傾けた。時を經るにつれて、王は文字を讀むことが出來るやうになつた。王は非常に喜んで、あの宣教師達の教に耳を傾けよと、土民にも勸めた。彼等宣教師がハワイの文化に貢獻したことは、ビンガム・ホールとか、ビショップ・ミュジアムなどといふ文化的施設に、宣教師達の名が傳へられてゐることでも頷けるであらう。そして生命を賭して、非營利的な事業に全力を傾倒したこれら宣教師の子孫の多くが、現代ホノルルの社會で財閥として重きをなしてゐる。祖先が抛げ棄てた富と名譽を、子孫が拾つてゐる概がある。エマソンなら「コンペンセイション」で說いてゆくところだらう。

これらの宣教師の後裔であるホノルルの名家のうちに、クック家とカースル家とが相競ふ二大名家として人口に膾炙する。クック家の人々とは私もホノルルで親しく交つたことがある。當主のお母さんはなかなかの親日家であつた。廣い庭には日本式の一隅もあつた。そして毎年三月三日には雛祭をする。さうして、彼女は貧しい日本移民の娘達を慰めることを樂しみとしてゐたのである。又嘗て外務次官も勤め、特命全權大使として來朝したこともあるカースル氏、

今日アメリカの有力政客の一人として、アメリカ全土に叫んでゐる對日禁輸論者に向つて、猛烈な反擊を加へたと、最近新聞紙に報道されてゐるカースル氏は、ホノルルのカースル家の人である。彼が特命全權大使として來朝した際、移民法と日米關係に關して、彼と私とは、忌憚なき意見を交換したこともあつた

昔のハワイに移住して來た宣教師達の中には、日本移民の教化にも大いに努めてくれたものがある。英語の分らない日本の移民を前にして、アメリカの宣教師が說教をする。そして「酒樽を捨てた」あの安藤總領事が、それを通譯する。さうした光景が嘗ては繰返されたのである。又過日物故された人格の高潔を以て知られた「ダクタ・ハラダ」が、ハワイ大學で半生を教育事業に獻げ、米人の尊敬と愛着の的となつてゐたことは、ハワイに於ける米人の日本に對する敬愛の念を增さしめた一要素であつた。そんな歷史のある場所だけに、事變下にあつても、ハワイ在住の米人達の對日感情は、大陸の米人達より餘程緩和されてゐる。ハワイの澁澤翁と呼ばれてゐるアサトン氏（彼は翁ではないが）などは、日米親善に盡す夢を、今でも尙捨てゝゐない。事變下に於ける日支人間の關係も、ホノルルは大陸に比して割合平和的である。支那

料理店が、日本人をボイコットすれば、お客が殆ど失くなつてしまふ。つまり、顧客は殆ど全部日本人だといふやうな情勢であるからである。むしろ彼等は逆に日本人にボイコットされることを恐れてゐるのである。「商業第一、ボイコットなどは桑ばら、桑ばら」と、支那系の商人は、お腹の中で唱へてゐるといふ。又これはアメリカ人が見聞した實話であるが、ある日日本と支那の二世娘が相携へて、活動寫眞を見物に行つた。そこでは例の南京爆撃の寫眞が展開された。子女の虐殺される情景が映し出された。二人の娘は身動きもしないで見終つたが、最後に日本娘は云つた。「かういふ映畫は面白くないわ」「あたしもよ」と支那娘が答へる。さうして二人は又相携へて、映畫館を退出して行つたといふ。支那青年と日本青年とが同乘して、ホノルルの町を走つてゐた。車を操縦してゐた支那青年が言つた。「君の國と僕の國は戰つてゐる。君と僕とは仇同志だ。車から降りてくれ給へ！」「國同志が戰つたところで、君と僕とは戰つてゐないぢやないか」「ん、それはさうだな」そして二人の青年は相同乘したまゝ走つて行つた。

ホノルルは過去に於て、屢々國際會議の開催地となつてゐた。ところが、近頃は次第にアメリカ大陸に、かうした種類の會議を攫はれる傾向がある。例へば、太平洋問題調査會の中央事

務局なども、米大陸を超えた大西洋岸の紐育にまで移されてしまつた。これは種々の意味で頗る遺憾である　かうした國際的機關、特に東洋と西洋との相互的理解を深めるための機關は、なるべく人種の融合してゐるホノルルのやうな土地に設置することが順當なのである。少くも紐育のやうな、神經質的に興奮してゐる人間の多いところは不適當である。のんびりとよく眠れるホノルルに引き戻すべきだ。そしてハワイを以て日米國交の楔となすべきであらう。それはハワイ在住の日本人のみならず、米人側すらも、均しく要望するところであるのだ。

一昨年ホノルルに寄港した時、エルキントンといふ故新渡戸稲造先生の義兄に當る人から招待された。彼はフィラデルフィヤの名家の生れで且相當の金持である。彼は望のまゝに或はホノルルに住み、或はカリフォルニヤに住む。彼のホノルルの家は、ヌアヌ・パリを去ること更に六哩もあるホノルルの市とは反對側の海岸に位する地點で、山を登り、川邊に降り、そして漸く彼の家に辿りつけるのである。その彼の家は、太平洋岸に臨んでゐる。窓の下には、ぢやぶぢやぶと海の水が絶えず押し寄せてゐる。勿論その音は靜かで、既に老境に這入つてゐる主人エルキントン氏の夢を醒すことはない。

太平洋を庭として建てられた彼の家は、のんびりとして住み心地がよい。殊に椅子の坐り心地のよかつたことは今も忘れない。主人は此處に坐つて、晴れた日も、雨の日も、風の日も、さうして靄の日も海上を眺める。彼は義弟新渡戸博士が、太平洋の橋とならむと言つて、その爲に努力を吝まなかつた生涯を偲ぶ。又彼の妹たる新渡戸夫人が、博士と心を同じうして、遂に日本の地で亡くなつたことをも忘れられない。そして自分も亦、日米關係の親善に盡すことを以て義務と感じてゐる。

彼は、人間の競つて握らむと焦る寶、富といふものを、考へるのもいやであるらしい。そんなものはもう倦き倦きした。さうかといつて、これを打棄てることも面倒臭い。そこで彼は、背廣を船長服に着替へた。ソフトの代りに船長帽を冠つた。自らを舟乘りに變へて、金と緣故をもつた過去の職業を忘れたかつたのだらう。自由自適の生活を送らむが爲に海上に蒸汽船を浮べ、自らこれを動かして毎日航海するのである。船名を「お早う丸」といつて、船内の裝置は太平洋を航海する大旅客船と殆ど同樣である。これで日本まで行けるかも知れないと船長は言つた。この「お早う丸」には、エルキントンを訪れる客は皆案内されるのだが、近年のこと、ロ

ーズヴェルトがホノルルを訪問した時、彼は舊知エルキントンを訪れて、好きな釣を樂しんで何事も忘れてしまつた。ホノルルの町では歡迎の準備をして待てど暮せど大統領閣下の姿が現れなく、町中がまちぼけを喰つてしまつた。

弗の音の響いて來ることのない、ジャズの音の聞えて來ることのない、酒の香の襲ふて來ることのない「お早う丸」の上で、船長は、時には友人と語り暮す。或は讀書に耽る。又或る時は夫人と甲板に居眠る。或る時は二人の令孃を伴ふて、共に茶菓の味を享樂するのである。唯然しかうした生活の中に在つて尙忘れることの出來ないのは、日米關係である。だから日支事變のために日米關係が惡化することを看破したエルキントンは、ワシントンまで出掛けて行つて、親友であるローズヴェルトと胸襟を開いて語り合ひ、且忠告をも呈したと、私に語つた。

「それでローズヴェルト動きさうですか？」

「いや、大統領や富士山はなかなかたやすく動くもんではないよ」

「それぢや日米關係は悲觀的なものでせうか？」

「悲觀も樂觀も無用の長物さ。大切なことは、日本の考へを明瞭とアメリカに傳へて、さうし

てアメリカの考へを明瞭と理解して、兩者の矛盾する點をアメリカと一緒に解消してゆけるやうな聰明な人材を、もつと日本からアメリカに派遣することだね」

「立派な太平洋の橋が必要なんですね」

ヴェランダから外を眺めると、今迄小雨の降つてゐたどんよりとした空が明るくなつて來た。「では、そろそろお船までお送りすることにしませう」とエルキントン夫人は立上つて、自動車運轉の身仕度に取掛るのであつた。（昭和十五・四）

珈琲夜話

興亡はローマの歴史過程だ。しかし飲料コーヒーの七百年史は、絶えざる進歩と發展の過程である。人間は人間に對しては戰鬪的であるが、嗜好品に對しては愛護的であるためでもあらう。

コーヒー樹は、エチオピヤから對岸のアラビヤに移植され、漸次各地に栽培されるに至つたものであるといふ。そして昔、モカ港から追放されて、飢ゑに瀕した回教僧の目を惹いたものが、深紅に燃えたコーヒーの木の實であつた。僧は暫く考へた。「これは禁斷の木の實ではない。」そこでそつと食べてみた。かくして餓死したかと思はれてゐたこの僧の生還は、モカ港のアラビヤ人を驚かした。そしてこの奇蹟物語が遠近に傳つて行つたといふ傳說がある。

コーヒーはまづ飲料品として、人間の前に供せられた。それは實を碎いて生脂を混ぜて、團

子にしたものだつた。次には乾した實から酒が作られた。次には藥品として尊まれ、遂に飲料として世界的に愛飲されるに至つたのだといふ。

コーヒー樹は一般には熱帶地方に成熟するのだが、海拔六千呎の降霜地帶にも亦よく實を結ぶといふ。その栽培方法は、先づコーヒーの種子を苗畑に植ゑつける。約一ヶ年後に珈琲園に移し、六ケ年後には收穫されるのである。その木は濃綠の灌木で、葉は槍形、その表面の色は常濃綠、裏面は薄綠。白い花はジャズミンやオレンヂに似て可憐で、芳ばしい。壽命がたつた三日限りだ。花の盛りの頃は香りが三哩を隔つる海上の船まで漂ふてゆくといふ。開花後約六七ケ月で、實は熟し始める。最初は濃綠色で、次第に黃色くなり、赤くなり、やがて深紅となる。

珈琲栽培國は數多いが、その冠たるものはブラジル國であらう。

「サンパウロの珈琲園の木蔭には、世界中の人間を集めることができる。しかも鮨詰めではない。人に一樹を割當て、隣人とは三米突半の間隔を置いてである。ブラジルのコーヒーの木で頸飾を作れば、ブラジルの周圍を六百三十回もぐるぐると卷きつけられる。このブラジルのコーヒ

ー樹を延せば、月と地球の間隔九百五十萬キロの距離の廿七倍となるのである。これらの木を一本づつ見巡るには、一人の男が一時間五キロの速さで歩いて、二百二十年かゝる。自動車で、一時間六十キロの速力で走れば、十八年間を要する」

これはブラジルのコーヒー王が、自國のコーヒー栽培の盛況を私に自慢した時用ひた比較指數である。そのコーヒー王が日本に來朝した。ある時郊外をドライヴ中、彼は顏色を變へ、王者に似合はぬ頓狂聲で叫んだ。「たうとう日本人に盜まれてしまつた！」彼は南天の赤い實をコーヒーの實と見間違へたのだつた。それは弘法の誤りとして笑話となつたが、しかし王樣は、壽命を縮めるばかりの驚きだつたと、皆に告白したことであつた。

コーヒーを、その持味に從つて大別すると、中性のもの、甘いもの、酸いもの、苦いものの四つである。これらを考慮に入れて、甲と乙を調合して丙の味を創り出すこと、しかも香りも味も共により優れたものを創造することが、コーヒー通にとつての興味である。それは畫家が繪の具に向つて、色彩に苦心するのと同じ苦心である。美味しいコーヒーを飲むためには、まづこの調合のよいことが條件となるのである。次に、豆を新しく炒ること、新しく挽くこと、それ

に注ぐ湯は、攝氏八十五度から九十五度まで、しかもこの湯と豆の接觸期間は二分以上はいけない。殊に、コーヒーを火にかけて沸騰させることは、極く惡い。「ボイルはスポイル」といふ諺がある位だ。又その湯の水質は、アルカリ性や硬質を避けなければならない。容器はガラス、陶器等がよく、金屬性のものは好ましくないなどと、コーヒー通はなかなかやかましい。

アメリカ合衆國では、珈琲商人が毎日ホテルや料理店に出張して、珈琲のたて方を指導する。尙又全國珈琲調製者組合といふものもあつて、ホテルや料理店のために、珈琲調製の指導書を配布してゐる。紐育のウォルドルフ・アストリヤの珈琲調製法は、アメリカの一流ホテルや料理店によつて採用されてゐる。兎に角アメリカ人は、英人の好く紅茶は、例の「ボストン・ティ・パーティ」の史實の關係上緣起が惡いとあつてか、むしろ珈琲の方が好きだ。ブラジルコーヒーの消費額は北米合衆國が世界第一である。

コフィ・ハウスは一五五四年、トルコに開かれたのを嚆矢とする。巴里にも十七世紀の後半期にカフエーが開かれた。これは巴里人の日常生活に一大變化を齎したのだつた。彼等はこゝに家庭の應接間を延長した。學者も忘け者も皆こゝに集つて來た。そして一樣にコーヒーを飲

むのだつた。其處はゴシップの場所となり、やがて思想の交換所となつた。プロコプといふカフエーは、當時最も有名だつたといふ。

イギリスでも亦十七世紀の後半期にコフィ・ハウスが發生した。セント・ジェームス・ストリートのコフィ・ハウス、グリーシャン・コフィ・ハウス、ウィルス・コフィ・ハウスなどには、文人政客が相集り、談論風發の光景が見られたと言ひ傳へられてゐる。

「コーヒーは政治家を聰明にする。半ば目を閉ぢても、すべてを見透せる程聰明にする」とは文豪ポープの言葉である。支那でも、阿片の代りにコーヒーが愛飲されたのだつたら、今日の日支關係も大分趣を異にしてゐることであらう。（昭和十五・一）

ブレーメンとノルマンディイ

一九三八年八月廿三日の夜、紐育の灯の町をやつと切り貫けて、ハバグ・ロイド棧橋に着いた。見るとこゝもまた灯の街である。「わが船ブレーメンは?」と訊ねると、「あれだ!」と、灯の街を指示してくれた。街と見たは、實はブレーメンの巨體であつたのだ。紐育のスカイスクレーパーを横倒しにしたやうなその巨船の二等船客として、私はイギリスに渡つたのであつた。

二等キャピンといつても、秩父丸一等二人部屋の約三倍の廣さがある。しかも物置きつきで、風呂場つきである。服簞笥も大きく、壁にはずらりと帽子掛けが並んで、散らかりがちな船室の整頓が工夫されてゐる。

ブレーメンの出帆は夜の十二時だ。棧橋には群衆が手を振りハンケチを振つて、別離の情を

訴へてゐる。自分がつい先刻まで忙しく働いてゐた紐育の街の灯が、スカイスクレーパーに反射してゐる。そしてそのスカイスクレーパーの窓の灯は點々として、星にまで連つてゐる如くに見える。棧橋の灯は光のリボンのやうに、よろよろと水上を走つてわがブレーメンを追ふ。

一九三八年八月の末頃は、歐洲の天地には、戰亂は先づ起らないであらうと、一般に豫測されてゐた。だから當時の航海は颱風以外に怖しいものはなかつた。船のクックは、只一生懸命に美味しいものを作ればよかつた。イギリス船、アメリカ船、フランス船、イタリヤ船などのクックとわがブレーメン丸のクックは、料理の腕競べに沒頭してゐるらしかつた。だから、まづいと定評のある獨逸料理はブレーメン料理ではなかつた。從つて仕合せなのは船客であつた。獨逸國内では食糧問題がやかましいが、船上は食糧自由の別天地であつた。勿論それはアメリカ歸りであつたためでもあらうが、獨逸國内で口にすることの出來ない純良バタが豐富に供され、パンも馬鈴薯入りではない、アメリカの粉で作るふつくりとしたパンであつた。二等といへども、スープは午餐も晩餐も三種類の用意があつた。新鮮な野菜も六種は揃つてゐた。時には

チョプスュがメニューに現れなどした。お夜食(サッパ)に供されるサンドウィッチは獨逸式のもので、ペレークテス・ブレーティヘンクとよばれる餡パンを二分した大きさのパンに、各種のソーセージやチーズの一片を載せたものだ。ビールや、モーゼルワイン、ラインワインには、ぴりゝとした舌觸りのこの取り合せが調和するらしい。

流石に獨逸船だけあつて、音樂が優秀である。しかも樂師が緊張の域を脱して、樂譜に恍惚としてゐる姿を私はしばしば見受けたことであつた。又船客も殆ど全部獨逸人で、音樂を傾聽してゐるものゝ如くであつた。時には樂師に、自分の好みの樂を註文することもあつた。ダンス音樂も、ジャズでなく、ワルツを所望する傾向があつた。

獨逸の藥は世界的の評があるが、或る日私のオキシフルが盡きてしまつた。ドイツ船上では藥品は船醫の專賣だといふので、オキシフルを醫者に註文したところ、オキシフルといふ藥は知らないといふ。用途を說明すると、あゝ分つたと、うなづいた。そして更に語を補足して、しかし推量といふことは、藥品の場合には危險である。藥品は正確でなければならない。どうかそのオキシフルの瓶を屆けてくれ、調査の結果、改めて確答するといふ。その夜食堂から歸

つてみると、テーブルの上に手紙と藥瓶が置いてあつた。船醫からの手紙で、調査の結果、三共會社製オキシフルの調劑法判明、些少ながらこゝに謹呈仕り候とある。使つてみると、泡の立つのに驚く。

一體船上といふものは、階級制度の嚴然としてゐるところだ。階級制度といふより、金級制度といはうか。尤も日本船などは、二等船客が一等船客のサロンで一緒に活動眞寫を見たり、餘興を樂んだりする。又一九三六年私がグラー・ラインのプレシデント・タフトで渡米した時などは、食堂もデツキも、二等船客と同一場所だつた。キャビンの內部もメニューも、全然同一だつた。それでキャプテンに、この船には一、二等の差別はないのかと訊くと「大ありさ」といふ。どの點かと問ひかへすと、「船賃が大いに違ふさ」と平然たるものだつた。アメリカ船も階級には、餘り重きをおかぬらしい。ところがこのブレーメンでは、つくづく歐洲人の胸底に潛んでゐる階級思想の露出を感じさせられたことがあつた。それは一等船客であるナチス・ドイツに使するわが新聞記者代表團のM博士、H博士などとは舊知の間柄なので、面會に行かう

とした時である。面會手續きが實にやゝこしい。まづ前以て自分の姓名を申告しなければならぬ。すると許可證が渡される。それを肌身離さず持つて、まづ一等入口の關所に行く。關所では、許可證と顏を調べる。安宅の關の役人と寸分違はぬ目付である。やつと許されて、長い長い廊下を渡り、漸く一等社交室に出た。その社交室は歌舞伎座の觀覽席の二倍もあるやうな大きな廣間で、壁畫とシャンデリヤとで大部分の裝飾が施されてゐた。その素晴しさは、ドイツ人の計畫といふやうなものを理解するには、いゝ材料でもある。

私は從來洋行の時は、留學生時代から、慣習に從つて、船は一等に乘つたものだつた。尤も故濱尾總長は、大學から行く留學生に向つて、汽車汽船は三等に乘れと一々訓諭されたのであつたが、汽車はともかく、汽船については、恐らく誰もそれに從ふ者はなかつたらう。現在の日支事變の結果、政府の爲替政策に、國民の一人として、私も出來るだけ順應しようと思つた。さうした動機から一九三八年の旅は、初めて外國船だけは、往復とも二等を選んだのだつた。しかしアメリカの友人の中には、この私の二等旅行は、財布の輕さゆゑと合點して、「モナコで金を儲けて大に樂しみ給へ」と肩を叩いてくれた人もゐた。歐洲からの歸りは、ノルマンディ

に乘つた。ブラッセルに開催された萬國著作權會議に、日本代表として出席した關係上、私の旅行券は「ディプロマティック」に書き換へられた。日本の外交官ともあらうものが二等船客とはと、ノルマンディの事務長が一寸怪んだ樣子だつたが、別に何も質問はしなかつた。

ノルマンディはブレーメン以上の巨船と聞いてゐたから、多分船室はブレーメン以上だらうと期待してゐたところ、ブレーメンの私の部屋についてゐた物置ぐらゐの廣さで、暗くて、まるで子供のお仕置場みたいなところに押しこめられた。船賃はブレーメンと大差はないのにと不足にも感じたが、しかし葡萄酒を食事毎にたゞ飲ませるフランス船では、けちにもならうと我慢してゐた。ところが自分のキャビンなどについて不平など言へないほど重大事件を、この船はのせてゐるのだといふことを次第に知つたのだつた。顧みれば歐洲に渡つたのは八月の末、歸つたのは十一月の中旬であつた。その僅三ケ月の間に、歐洲の情勢は、平和的から、殺伐的に移りつゝあつたのだ。

その殺伐たる時相の一つである、ヒトラア總統のユダヤ人政策の結果として、ユダヤのレフュジで二等船室は滿員だつたのである。ユダヤ教教祖夫妻がゐて、これらレフュジを引率して

ゐるやうにも見えた。レフュジは皆家族づれで、荷物も多かつた。かうして自由平等の國と、彼等の憧憬するアメリカに渡るのだが、自由平等と就職可能率とは別だ。果して職を得られるか否かが心配だ。得られなければ、又ドイツに歸るより外に途はないと言つて、彼等は一樣に顏を曇らせてゐた。その昔「乳流れ、蜜滴る國」なりし彼等の祖國パレスチナは、現在ではユダヤ人とアラブ人、英官憲とが三つ巴に對立して、紛爭が絶えるひまがない。祖國はあれど、歸つてゆけぬ現狀である。

このパレスチナ問題について、舊知マクドナルド拓相が談笑裡に私に言つた言葉を想ひ出す。「パレスチナは、ユダヤ人の追放所としてヒトラアに進呈するより外に紛爭解決の途はない。」

ノルマンディが紐育に着いたのは、雪の降る感謝祭の日だつた。それから一兩日後、紐育の新聞紙はノルマンディ船員の賃銀値上請求で罷業したゝめ、出帆が延期されたことを報道してゐた。船員等もレフュジを無事にアメリカに送つたので、駄々を捏ねても、罪は輕いとでも思つたんだらう。さういへば、ノルマンディの船員達は何をするにも敏捷さが缺けてゐた。ブレ

ーメン上に働いてゐた、あのなにを言ひつけても由良之助のやうに「心得たり」と胸をうち、目で合圖する忠僕がノルマンディにゐなかつたことは、物足りないことであつた。船の二階の手摺りを拭き拭き、

ママさん、お船に脚あんの
大馬鹿さん、脚がのうたら、歩けやへん

と、フランスの古い俗謠を歌つてゐたボーイの眠さうな聲が、當分は耳についてゐた。あれはきつとボイコットを示唆してゐたんだらうと、考へ併されることだつた。

顧れば大西洋の往復も、時相と關聯のある面白い旅であつた。ブレーメンが近時、英艦に驅逐された記事を讀んで、それが自分の經驗だつたら、自分の旅は冒險的な英雄的な要素をもつものだつたらうと、平穩無事な旅が、一寸物足りないやうにも思へるが、しかしもしブレーメンが擊沈されてしまつたのだつたらと思ふと、矢張り「あゝよきかな生くるてふこと」とブラウニングと合唱する。そしてこゝに、安泰な大西洋の旅の想ひ出の筆を擱く。（昭和十五・五）

ミュンヘン會談の前夜

九月二日、ロンドン正金のオフィスで、支店長の加納君と話してゐると、ベルリン支店からの電話だ。英獨戰爭が始まるらしい。危機はこゝ二十四時間乃至四十八時間だと言ふ。ドイツに行く旅費について相談中の私に、加納君は警告した。「君、愼重な考慮が必要だね。」

その二十四時間、四十八時間も無事に過ぎ、私は九月四日の午後ベルリンに安着した。ヒトラー總統に絶對的信頼を持つためか、或はドイツ空軍の優勢に自信を持つためか、其處には、案外呑氣な空氣が漲つてゐた。若い兵隊さんが綺麗な娘と手を組んでシャーロッテンブルグの町を散歩したり、キャバレで踊つたりなどしてゐた。

ラインワインもビルスナーも昔ながらの香を失はず、節酒の御ふれもないらしいが、パンは馬鈴薯入り、バタの購買量も制限つきの統制ぶりだ。ある日退職判事K氏の裕福な家庭に、午餐に招かれた時、パンもバタも卓上にないことが、異樣に感じられた。簡單な御馳走を、相客のドイツ人たちが、遠慮しながら食べてゐた。しかしドイツ人は一般に、この食糧制限といふことに就いて、大して呟いてゐないらしい。

男の服地もスフ交りだ。飾窓の婦人服が殆ど皆黑い。化粧した顏も少く、頭陀袋をハンドバック代りに提げた婦人が多い。これらを見てゐると、祖國のために我儘を捨てゝゐるドイツ魂が摑めるやうな氣がする。

九月十七日ベルリンを去つて、アムステルダムに一泊、ヘーグに一泊、ブラッセルに一泊した。オランダでも、ベルギーでも戰爭の憂慮で一杯だ。これらの小國はいづれも嚴正中立を國策とするが、それが現實に保たれうるかゞ問題とされてゐた。ベルギーでは、今度はフランス

側から先に侵入を受けるのではないかなどゝ、噂されてゐた。

巴里に着いたのが、九月廿日の夜。廿三日故杉村大使から、三島子及び大使館員と共に晩餐の招待を受けた。宴酣なる頃、電話で、情報が大使に傳へられた。チェツコ軍の動員、巴里は戰亂の巷となるだらうと言ふのだ。大使を圍んで、世界大戰勃發當時と對比して、戰爭の場合の巴里の空襲の狀況などを一同が話し合つてゐるうちに、夜は更けてゐた。

翌朝早く、サン・ミシェルの屋臺店に新聞を買ひにゆくと、老若男女の群が殺到してゐる。皆新聞の奪ひ買ひだ。

書店には、軒並に「我が鬪爭（マイン・カムプ）」の佛譯が並べられてゐる。

カフエーではお客が皆、新聞を讀んでゐる。片隅で鳩首して何か相談してゐる男達が、濃い眉を上げたりさげたり、手を擴げたり、拳を握つたり、眉をすぼめてみたりしてゐる。戰爭か平和かを論じあつてゐるのだらうが、あれでは戰爭が始まる前に、へとへとに疲れてしまふだらう。

午後、ヴェルサイユに赴かんとガール・デ・ザンヴァリッドに到れば、其處には兵隊が劍銃を捧げて、警備してゐた。

ヴェルサイユの兵營の門前には、老若男女が沈んだ樣子で列を作つてゐる。國境の守備に出發する父や、夫や、兄弟に、接吻を交すべく集つてゐる家族なのだらう。停車場の前には、兵隊の荷物と、自轉車が山のやうに積まれてゐた。

裏町を行くと、汚いアパアトの窓に、若い女と子供の顏がぼんやりと映つてゐた外、人間の姿は一つも見當らない。

巴里へ歸る車内の大部分の客は、カトリックの坊さんと、眼光ナポレオンに似た士官達だつた。

その夜は土曜で、普通なら夜通しのカフエーが、十一時頃には、ぽつりぽつりの客の影が怪しいものに見え、給仕達は、不要の椅子をどんどん積み上げ、床を掃除してゐた。

廿六日の午餐に、舊知の經濟地理學者D君の家庭に招かれた。彼は尙未婚で、老いたる母堂との二人暮しであつた。母堂は大戰當事、この家で、幼かりしこの息を抱へて、空襲を忍んだ

のだ。今度戰爭が起れば、親子の別れは必定だと、涙ぐんだ。間斷なく電話がかゝつて來る。この母子は、その落着かぬ雰圍氣を詫びつゝ歡待に努力してゐるが、それは一貫した努力ではなく、時々力盡きたといふ感である。それから約一ケ月後に知つたことだつたが、この時既に、この若き經濟地理學者の手には、召集令が渡されてゐたのだつた。

外交研究會（Centre d'Etude de Politique Etrangère）の招請により、パレ・ロワイヤルで、私は東亞の事態に就いて講演した。それは東亞に關係ある識者の、約廿人ばかりの會合であつた。

私は講演中、桑港で、前大統領フーヴァアと會見した時、「アメリカ一般民衆の對日感情惡化の最大な原因は、日本海軍による都市の空爆にある」と言つた彼の言葉を引用しつゝ、日本海軍の空爆方針が、一九二三年のヘーグ專門委員會の決議と、大差ないものであること、それから此度の歐米への旅の直前、中支に赴いた際、S博士と今回の事變の戰時國際法への貢獻の最大なものは、「ゾーン・ジャキノ」だらうなどと話しあつたことを想起しつゝ、日本海軍の空襲を中心として、事變の各樣相について話を進めて行つた。最後に質問の時間が來た。然し講

演者への質問は殆どなく、聽講者相互間の、空襲に關するかなり激しい意見の交換が行はれた。國際法學者R博士が、空爆についてのヘーグ專門委員會の決議を詳細に說いて、日本海軍のやり方が合理的なことを說くと、或る政治家は、それは空襲の殘忍性を除去しないと抗辯して、兩者の間に論議が始まるのであつた。この政治家の考へてゐたのは、遠い支那の空爆ではなくして、今にも巴里の空に、ドイツの飛行機が群擧して、襲うてくることであつた。東亞問題の研究者たるこれらの人の關心の中心は、もはや東亞の問題ではなくして、巴里の問題であつたのだ。

裏通りで、年齡廿五歲から四十歲位の屈强の男達が、お互に寸法の身に合はぬ藍色のお仕着せ軍服姿を、揶揄しあつてゐた。

サクレ・クール、ノートル・ダム、マドレン寺院をはじめ、あらゆる教會で、平和希求の祈が捧げられた。ある修院では、一九一四年以來、嘗て唱へられなかつた特殊の祈が唱へられたのだといふ。

翌日の巴里は沸騰した。シャンゼリゼ街は、自動車の列が、まるで紐育のフィフス・アヴニ

ュのやうだ。それは銀行に行くのだらう。ソーシス、ジャンボン各種のコンゼルヴを買ひ占めに行くところだらう。小さい手鞄を膝の上に載せて、若い夫婦がテリヤを一匹脇に、田舍に逃げて行くらしい姿もある。家具を積んだ自動車、寢臺を屋根に結びつけた自動車、皆巴里を逃げて行く姿である。一樣に不安な顏つきだ。タクシーの老いた運轉手に、「戰爭はどうか？」と訊くと、「なるらしい。それは大戰以上の恐ろしい機械戰だらう。」と涙ぐんだ。

國民のかうして騷いでゐる中を、議員達は、首相や大統領を訪問して、平和的外交政策を支持すること、民心を動搖させる流言蜚語の取締、總動員の場合は、必ず議會の協賛を經べきことなどを提言した。

午後三時半、ヒトラア、ダラディエ、チェンバレン、ムソリニーの四相會議がミュンヘンで行はれることが發表された。それは確かに、巴里人にとつて、地獄で佛に會つた喜びであつた。

周圍の勸告で、巴里からイギリスへ逃げようと、ホテルに汽車の切符の交渉を賴んだが、今日の切符は全部賣切れ申候といふ返事だ。

消燈された夜の街は、頼りうるものは、交通の標識燈ばかりである。それでもホテルの二階の窓を少しばかり開けてをけば、自動車の音も、人の話聲も、靴の音も時々亂入してくるのだつた。遂に明け方の四時まで、自分は日記と手紙を書きつゞけた。しかも電氣を遠慮したので、懷中電燈を使つたのだつた。

朝六時ホテルで朝食を命じると、トウストは勘辨してくれろといふ。部屋の入口に昨夜磨きに出しておいた靴が昨日の埃のまゝ手がつけられてゐない。

午前八時の停車場は、亡命者の一團で混雜してゐた。去る者と送るものとが、悲痛な面持を交してゐる。

車内は滿員で、空席なく、立つてゐる者も多い。カレーに近づくと、大體婦人と子供から成る旅行客はほつとした顏付きで、汽車の廊下から、平和な浪の上を眺めるのだつた。アングリカン・チャーチの牧師さんが、「支那人か？」と私に訊いた。「いや日本人だ！」。彼は一寸失望したらしくも見えたが、「あ、日本人ですか、これからロンドンですか？　チェンバレンは我々の誇りです」と微笑んだ。

午後四時近くロンドンについた。日本大使館附近のホテルの戸を次から次へと叩いて見たが、皆お斷りだ。それはこのクライシスで、大陸からの亡命客が殺到するためだといふ。五軒目の宿で、一つ殘された空き部室に、やつと坐ることができた。ロンドンに來て見ると、誰もが落着いてゐて、親切だ。誰もがチェンバレンを眞似てゐるやうに感じられた。

夕食後散歩に出て見ると、瓦斯マスクのポスタアが其處此處に貼つてある。グリーン・パークの塹壕は長く堀りぬかれてゐる。空にはさかんにサーチライトが閃き、守備の飛行機のエンジンが劇しく轟き渡つてゐた。その間、ミュンヘンでは、四相の會談が進行しつゝあつたのだ。それを氣にしながら、ロンドン人はラヂオの側に坐つてゐた。夜の十二時が過ぎ、三十日の丁度一時半、ドイツからの聲で、四相は遂にズデーテン領土割讓に就いて協定に到達したと報じて來たのであつた。

その朝、歸英の挨拶のために、聰明を以て知られるミスCを、チャタム・ハウスに訪ねた。話

は自然、クライシスとミュンヘン協定とに及んだ。私は彼女に、「チェンバレンの慰撫政策に就いて、貴女はどうお考へですか」と訊ねると、「チェンバレン首相の慰撫政策が根本的に正しいかどうか、それはこれからゆつくり考へねばならぬ問題でせう。私達は危機から免がれて、兎に角ほつとしてゐるところなんです。今は首相に對する感謝で一杯です」

ミス・Cのこの返事は、ミュンヘン協定成立の瞬間に於ける英國人、否、歐洲人一般の懷いた感情の、率直な表現でもあつたのであらう。（昭和十四・六）

巴里

ロダンは「考へる男」を彫つた。「考へる女」も彫つた。巴里を語るには、あの「考へる」態度が相應はしいと思ふ。「花の巴里」など丶浮調子で、平面的に印象づけるには、餘りにも立體的な歴史を背景とする巴里であるのだ。それは宗教的敬虔さと王朝的華麗さと、そして革命の血汐を浴びつ丶成長して來た都であるのだ。

巴里はセーヌの河に沿ふた三つの島の總稱である。セーヌの河に架けられた三十三の橋はこれらの島々の交通を容易にし、頻繁にする。このセーヌの上流から下つて來たパリジイ族がラ・シテの島を開拓した。それが今の巴里の發祥だと言はれる。算ふれば昔も昔大昔、二千年も昔

のことであつた。その頃の巴里は杳として捕捉し難い。

昨年九月歐洲の危機當時、巴里、伯林、倫敦の各新聞紙は、市民の動靜を寫眞で紹介した。そのうちで、「女工の群の祈」プラットホームのベンチで、「祈る幼兒」などは、巴里を特徴づけるもの丶一つであつた。顧みれば、紀元四百五十年、巴里がアティラの襲擊を受けた時、市民は一齊に逃避に急であつた。この時、「勇氣を以て都を守れ、神亦汝等を助け給はむ」と叫んで、巴里を危機から救つたのが、聖女ジュヌヴィエーヴであつた。この聖女に依て巴里に迎へられたのがクロヴィス王。王は王妃クロチルドの德に依つてキリスト教に歸依したのだといふ。この聖ジュヌヴィエーヴと聖クロチルドの二女性の存在は、巴里を宗教の都とした一要素であつたとされる。これら聖女の與へた影響は、文學に、美術に歴然として現れてゐる。あの「女工の群の祈」も「幼兒の祈」も、その餘光なのであらう。

巴里の宗教區は七十に分たれてゐる。從つて大小の新古の寺院は數多いが、矢張りノートル

ダム寺院が一番に想ひ出が深い。誰やらが嘆稱したやうに、「フランスは巴里、巴里はノートルダムである」と言へる。

黄ばみかけたマロニエの街路樹が籟々として秋を微吟すれば、セーヌの水は冷え、その河面に描かれたノートルダムの靜かなる逆繪が慌てゝ歪んだり、崩れたりする。アヴェ・マリアの鐘の音が、夕暮の川底に、あれ、消えてゆく。玉鉾の道行く人の魂を、あれ、ゆすぶつてゐる。開いた窓から忍び込んで、團欒の一族に、諸行無常を、あれ、囁いてゐる。

この寺院は一一六三年モリス・ド・スリ司教の意志に依つて建造に着手されたが、完成されたのは十四世紀の初めであつた。言ふまでもなく無名の信者達の才能と勞働と財産との喜捨の總合が、この建築を促進させたものである。

見渡せば堂内の奥行は四百廿六呎、仰げば百十五呎の天井、それを支へる柱の數は正に七十五本といふ。浮世の光線の直射を受けないためでもあらうか、堂内に入れば自然に落着くわが心に、我ながら感づく。しづしづと奥深く進めば、ほの暗き祭壇がある。罪人をも聖者をも一様に招く、有難い囁きが漂ふてふ祭壇がある。幾百年かの昔から、巴里の悦び、巴

里の悲み、巴里の憂ひは、悉くこの祭壇の前に披瀝されたのであつた。ルイ九世が、エジプトから凱旋して「蘇の冠」を獻納したのもこの祭壇、英王ヘンリ二世がフランスの王として戴冠されたのもこの祭壇であつた、ナポレオンがお祈を捧げたのも、ジャンダークが祈を籠めたのもこの祭壇であつた、そしてボスエと聖ドミニコが説教したのも、亦この祭壇の前であつた。昨年九月の危機には平和希求の祈が、この同じ祭壇の前で、唱へられたことであつた。昨今の歐洲の危機に當つても、同じ祈が繰返されてゐることであらう。

北側外陣のローズ窓は一二七〇年に製作されたステインドグラス、模様は舊約物語の八十の場面。もし天國の面影が現世に在りとせば、それは幼兒の微笑とこのグラスとであらう。その色は、輝く陽の照つてゐる大空の群青色にも似、又晴天を映した大洋の面にも似てゐる。その光は清夜の月の如き靜寂さをもたゝえ、又曉を破る朝日の如き燦爛さをもたゝへてゐる。

かういふ内面の建物の屋上に、皮肉にもいくつかの惡魔が坐つてゐる。それは樋だなどと説明しないで、どこまでもゴブランとして見る方が面白い。それは、頰杖をついて、舌をべろりと垂らして、まるで人間の作つた巴里の繁榮を嘲笑つてゐるやうな姿態である。「不氣味だなと

呟けば、「あれの方が不氣味だよ」と空を翔ける飛行機を指して、巴里人は言つた。全く空襲は巴里人を脅かす、モダン・ゴブランであるのだ。

ユゴーは、このノートルダムからインスピレーションを受けた。そのインスピレーションに、ルイ十一世と理髪師オリヴィエールダンの史話が結びついて、名作「ノートルダム・ド・パリ」が生まれたのだつた。

一七九三年の革命の際、革命兒等は、その激情の曝し場を、このノートルダムに選んだ。ノートルダムは祈禱の殿堂から理性の殿堂に變へられてしまつた。聖母の像に代つて、踊子マイヤーが、理性の女神として禮拜されたのであつた。寺院の寶物も、鐘も、諸像も悉く取りさらはれて、文字通りがらん堂となつたその建物が、食料品店に早變りといふ變革振を見せた。そして其處に千五百の葡萄酒樽がごろごろ轉つてゐたことさへあつたのだ。しかし革命の嵐が去つた時、巴里の民衆は、昔のノートルダムの復活を希求した。かくして十九世紀に復興された

ノートルダムこそ、我々の今日仰ぎ見るノートルダムであるのだ。

巴里の誇りの一は、歩道（プロムナード）である。それは、ルイ十四世が、ルーヴル宮の眞正面に、一直線に拓いた一哩餘の大路である。この大路に、ナポレオンは、自分の「最善最美の都巴里を築き上げたい」宿望の一端を達成した。

大路の基點ルーヴルは、長らくフランス王の宮殿であつたが、革命はこの宮殿を博物館に變質せしめた。このルーヴルを出でゝ進めば、カルセルの廣場が擴つてゐる。こゝには「祖國と共和國！」と叫んで、大空を突き指す片目政治家ガンベッタの像が建ち、アメリカ獨立戰爭に參加すべく齡僅かに十九歳にして渡米し、フランス革命期には、アメリカの革命思想をフランスの民衆に鼓吹したラファイエット、赤・藍・白の國旗を考案したあのラファイエットの像が建つてゐる。ナポレオンが一八〇六年、ローマのセッティエム・セヴェール門に模造させた凱旋門も、この廣場を名高くさせる。

奥に進めば、はるばると擴がる、嘗ては王室の園であつた、チュイルリの園。其處には花樹あり、池水あり、森林あり、諸名工の精を込めた諸像がある。この園こそは「王様の御機嫌は？」とルイ十六世の安否を訊ねる小賣商人共の聲が響いた園であつた。又マリ・アントワネットが、帽子の飾花やリボンを手づから、民衆に與へた園でもあつた。

園に續いてコンコードの廣場がある。ルイ十五世の像が此處に安置されたのは、一七四八年であつた。その後間もなく、革命はこの王様の像を「自由の像」に取替へた。今日では、同じ場所に高さ廿二メートルの大理石のオベリスクが聳え立つてゐる。彫まれたエヂプト文字は、ラムゼス二世の功績を語つてゐる。これがエヂプト王がルイ・フイリップに獻納したオベリスクである。その左右に大きな噴水が、雨の日には雨を叩きながら、晴れた日には虹を踊らせながら、湧き上つてゐる。革命の日には、このコンコードの廣場にギヨティンが据ゑられた。二千八百の首が刎ね飛ばされたのは、此處であつた。ルイ十六世、マリ・アントワネット、ロベスピエールさへも、此處で首を刎ねられたのであつた。「自由、汝の名に於て犯された罪惡の多さよ！」とマダム・ロランが嘆いたと言ふその罪惡が、敢へて犯されたコンコードである。

コンコードに立つてシャンゼリゼの街を望めば――一九一四年の歐洲戰爭當時獨軍は、勝利の行進をそこに練ることを樂みの一つとして戰つたといふ――遙か彼方、晴れた大空の下に、巴里特有の藍色の霞の裡に世界最大の凱旋門が模糊として描き出されてゐる。ナポレオンは一八〇五年から六年にかけてのフランスの勝利を、高さ九十五呎のエトワールのこの凱旋門を以て、記念しようと希つたのであつた。その下には一九一四年歐洲大戰の無名戰士の記念碑があつて、國民感謝の表徵たる常燈が獻じられてゐる。この同じ場所に、新しい戰捷記念物が建てられる日はいつであらうか。

巴里よ何處へ行く？　その信仰と、その王政的典雅さと、革命的理智明晰性の複合としての巴里の行方は何處へ。想出深きこの都に幸多かれ！　しかし險惡な歐洲政局の暗雲につれて、

この都も「歐洲沒落」の渦卷の中に、これら總ての過去が一掃される危險に曝されてもゐるのである。（昭和十四・十一）

芋市・肉市・さかな市

巴里の中央市場（レ・アル）は世界一の食餌原料市場だといはれる。この市場は十棟の建物から成り、概ね鐵筋ガラス、トタン屋根の構造である。一棟毎に並んだ卸商は、なんと二百五十軒。其處に積まれる代物は、野菜の山、魚の山、肉の山、鳥の山、チーズの山等で、まさに巴里の寶の山と言ふべきである。そのもろもろの山が、一日のうちに崩壞されてしまふ。みんな巴里人のお腹の中に消え失せてしまふのだ。ゾラはこのレ・アルを「巴里のお腹（ヴォ・ントル・ド・パリ）」と呼んでゐる。全くこの太腹（ふとつぱら）を抱へてゐるのだから、ダラディエーがヒトラアに、「さあ來い！」と見えが切れるのであらう。

レ・アルは十三世紀、フイリップ・オギュスト王の設立したもので、以來巴里の夜稼ぎはレ・アル商人と泥棒と定まつてゐる。さてこのレ・アルの活躍は夜の十時頃から始まつて、翌朝六

時頃までが最も殷賑を極める。花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかはと知れど、レ・アルだけは眞盛りが見ごろとばかり、秋のある朝、駈けつけたことがあつた。

野菜市に立つと、青い匂ひが心臓の中にしみ込み、青い色は、瞼の腫れを吸ひ取つてくれる。此處は見渡す限りの野菜の山である。巴里女は瑞々しいが、野菜は更に瑞々しい。セーヌの河水に清らかに洗はれた牛蒡、ヴィナスの薬指ほどに細いその牛蒡、若人の肌のやうに柔みを含んで張り切つてゐるその巴里牛蒡。八ツ頭のやうな根付きセロリの莖の白さ、葉のさえざえしさ。生れたての赤坊のお頭(つむ)大の玉葱、その豐かに、長い白髯は一絲も亂れず、高砂の翁が今撫で下したばかりの髯を想はせる。柿かと見まがふたは洋唐がらし、色は黄、赤、綠。わが國の小笠原產のもの丶如く、大きくてつやつやしいトマト、茄子。その中に蟠つてゐる苔山は、なんと鮮かなパセリの束。デュマの好きだつたといふ茸から、日本の松茸と同じ匂ひが漂つて來る。崩れかけた馬鈴薯の山の裾に、黑頭巾、黑服の肥えた婆さんが、早起きの爲の充たぬ眠りの補足最

中、花に寢るは春の吉野、此處はこれ、芋に寢る巴里のレ・アル。この枕なき媼を、貧故と同情するは早合點、芋の豐作の年は彼等の娘の嫁入持參金が、顧客の娘さんよりも重たいことは稀でないのだ。

私は、世界を相當廣く旅して來た。しかしレ・アルの野菜程の傑作を見たことがない。それはフランスの自然の恩惠と、フランス農民の土に對する愛着心との結合である。私は祈禱と勤勞の生活を描寫した、あのミレの畫を想ひ出したことであつた。

買はれた野菜の山を搬び去るトラックが陸續として、恰も時めいた顯官のお葬式の行列のやうである。その間を荷擔ぎ人夫連が、梯子を負つて、屈み腰で歩いて行く。その梯子に、麻繩で結びつけられた木箱には、さまざまの野菜がぎつしりと詰められてゐる。からの梯子をお守(も)りしながら歩いて行く人夫連の一人が、梯子から太い麻繩をぶら下げて、一向にご存知ない。これでは妹背山の場面にはならない。浮浪人がトラックや人夫と肩を並べて、歩いてゐる。昨夜踊り明したタクシード、夜會服の男女が、腕を組んで歩いてゆく。この雜踏の中に、蠻聲は聞えず、たゞ荷擔ぎ連の連呼する「御免(アトンション)、御免(アトンション)」の觸れ聲だけで、交通が整理されてゐる。萬

人、萬車の蹂躙し去つた菜葉の、土の上に青々しく滲んでゐる跡のみが、蠻行らしく目に映る。それほど安泰な今日のレ・アルではあるのだ。

魚市の、海の底を敷いたやうに、濡れにぞ濡れた廣い床板、その上を滑りもせず、渉り歩く若衆は、ゴム靴を履いてゴム帽を冠り、水の滴る盤臺を頭に載せて「眞平々々(アトンション)」と鷹揚に人拂ひをする。この市場では威勢のいゝのは女房連だ。彼女等は毛生え藥の廣告のマネキンにもつて來いの口髭を蓄へて、滅多矢鱈にはしやいでゐる。「えゝ、生きのいゝ鯛！」「伊勢海老は如何？」などゝ、魚の鱗の塊が咽喉につまつてゐるやうな不透明な聲で叫んでゐる。魚どもは賢くも默つてゐるが、いづれも北海産、ライン産、ロワール産、セーヌ産の良質のものばかり、生臭いこの市場の其處此處に、フラスコでコーヒーが沸かされてゐる。女房連のきこし召す朝の飲物である。

肉市は野菜市や魚市に比して、遙に混雜がなく、市井を離れて、林に分け入つた時の靜けさ

を感じる。牛の肉、豚の肉、羊の肉が大塊のまゝ吊るされてゐるところは、デパアトの衣裳部に吊るされた流行服の陳列のやうだ。只色調が紅と白に統一されてゐるので、目觸りが柔い。血痕鮮かなエプロンを掛けた牛のやうな體格の男が、鋭い双物を片手に大秤の前に直立してゐる。その双物で、突然とんときな板を叩いて、見物客を驚かして面白がつてゐる。一寸シャイロックを聯想するが、顏を見ると、茶番に出すシャイロックにはいゝなと思ひ直す。親分らしい男や女が市場の一隅に坐つてゐる。犬小屋と厩とのあひの子のやうな桝といはふか、そんなものゝ中に窺屈さうに坐つてゐる。そして通る人間を一々牛や豚になぞらへて、祕かに評價してゐるらしい。恰幅の好い紳士などが現れると、「牛であつたら！」と深い嘆息を洩してゐる。

前大戦當時、ジョッフル元帥が諸外國記者に向つて言つた言葉を、私は想ひ出した。「フランスは肉と野菜によつて勝利をうるであらう。」全くレ・アルの肉の山、野菜の山を見てゐると、フランスは勝利國であると思ふ。

奇觀はチーズ市だ。自動車のタイヤーが拋り投げてあるわいと、よく見れば、チーズだ。それが何百と投げてあるのだ。神佛への供餅のやうなチーズもある。鬢つけ油のやうなチーズもある。色はとりどり、黃金色あり、深紅あり、濃みどりあり。苔のむしたのかと調べれば、青かびの密生したものである。黃色地に、大理石の脈のやうな青い細い矢鱈棒縞の模樣は、チーズの龜裂した部分にかびの生じたもの。巴里人が特に賞味するといふ蛆の這ふチーズは、遠慮したのか見當らない。

玉子市も大きいものだ。白い殼の卵の列、赤い殼の卵の列、どれもこれも均等大だ。いづれも箱に、籠に、大切に藏はれてゐる。この卵の良否を、電燈やローソクの光で透して試驗する檢査係はなかなかの巧者で、一時間に千五百の卵の質を識別するといふ。

兎角、腹が減つては、戰は出來ぬといふけれど、喧嘩はしやすくなるものらしい。雜踏の裡にも、驚異に値ひする程の、平穩な雰圍氣の漂ふ現代レ・アルではあるが、その昔、此處が喧

嘩場、叩きあひ、毆りあひの場所となつた時があつた。それは飢饉の祟りで、レ・アルの代物が缺乏した時であつた。

一七九四年の警察の調査書には、レ・アルに於ける食糧の缺乏、諸物價の不法釣上げ、仲買人の賣り惜しみ、闇取引等を列擧してゐる。割烹店經營者が一手に、品不足の市場から、どしどしと仕入れてゆく。割烹店で御馳走を食べることのできない庶民階級が買へるものは、パンばかりとなつた。巴里中の庶民のお腹が次第に凹んで行つた。先代萩の鶴千代君の臺詞を敎へられなかつた巴里民衆は、「こちとらの飢ゑは、あいつらのお蔭だ！　鳩のやうな貴族は案山子で追拂へ、案山子はギョティンだ！」と叫んで、暴れ狂つた。フランス革命は卽ちそれであつた。このレ・アルはフランス革命史の鮮かな背景をなしてゐるのである。

生命への執着を表象するレ・アルの隣に聳えてゐるのは、聖ウスタシュ寺院である。騷音と雜踏の前に橫たはるこの靜境、其處から撞きだす鐘の音は、革命の時撞かれた鐘の音と變りはない。人の生くるやパンのみに依らず、それは鐘の音に靜に聽き入つた時、レ・アルへ出入の巴里人の耳にしみ透つてゆく訓に違ひない。（昭和十四・十二）

居酒屋の唄

アルベール・サローが銃殺されたといふ噂が、ベルリンから、同盟通信によつて最近報道された。彼はフランスの急進社會黨の領袖で、嘗ては首相たりしこともあり、またダラディエ内閣では、内相になつてゐた。私はその計の事實でないことを望むが、事實ならば謹んで彼の冥福を祈る。彼と私とは、一九三六年、太平洋問題調査會のヨセミテ會議で、圓卓を圍んで、いろいろな問題について論じあつたことであつた。

ヨセミテ會議では、イギリスの現海相アレグザンダーも、フランスのサローも聲を揃へて強調したのは、集團安全保障の必要であつた。この壽府イデオロギーを英國勞働黨の首領とフランスの急進社會黨の首領とが高調することは怪しむにたりないのではあるが、それは一面、北支を中心とする日本の政策に對する間接射擊の意味合をもつてゐたとともに、特にサローなどは、

ドイツから來る祖國への危險を、頭において、かうした議論を高調したのだとも感ぜられた。

急進社會黨の首領などゝいふと、いかにも怖しく響くが、フランスでは、急進社會黨はむしろ穩健派だ。彼との交際と、彼の議論のやりかたなどから受ける印象は、野人で、頑張りやで憂國の士であるといふことだつた。私は圓卓會議その他におけるサロー代表の、フランス語でやつたあの辯說の流暢さを忘れることができない。會議の慣用語は英語であるのに、彼は平氣で佛蘭西語で滔々とやつてのけた。會議出席者の大部分は、彼のフランス語を理解できなかつたらうが、しかし輪轉機にも譬ふべき速度を以て、彼の吐露するフランス語といふものには、思はず恍惚としてゐた。勿論フランス語だから、あの速力が使へるのでもあらうが、彼の天才的能辯によるところも多いのである。私は彼の能辯から、聖フランソワ・ド・サルの能辯について、「莊重、明快、果斷なエスプリ」"un esprit, solide, clair, résolutif" と評したアンリ四世の言葉を想ひ出す。この評は、わがサローの能辯にも適中する。「その辯論の勢や瀧の墜つるに似たり」"Son discours se répondait á la manière d'un torrent" と評されたボスエ的特質、「シメトリックな構成」"une composition symétripue" といはれたブーダル的特質も、

サローの能辯のうちに、見出されるのであつた。

私は彼の人一倍大きい頭を忘れない。そして解剖の結果、稀に見る重量をもつてゐたといはれる故澤柳政太郎先生の頭蓋骨を聯想した。「拜領の頭巾梶原縫ひ直し」に表現された、特大型の源頼朝の頭の鉢をも聯想した。澤柳先生は學問で、頼朝は智謀で、そしてわがサローは能辯であんなに頭の鉢が發達したのだらう。

私は、彼と初めて握手した瞬間に受けた壓倒的な觸感を忘れない。英雄的とでも形容すべきかと思つた。ナポレオンの握手といふものを聯想したのだつた。西洋人などは始終握手をしてゐるのだから、握手などには氣をとめなからうと思つたが、さうでもないらしく、イギリスの新聞記者が、東洋のプリンスと握手した瞬間の觸感について、わざわざ詳細に描寫したことを想起する。又「お手ておべたや、胸あつや」なんかといふ言葉も、握手の國で作られた「諺」である。サローの手の觸感のうちに、私は天下を取る勢を直感したのだつたが、もし彼が銃殺されたとしたら、彼の方がかへつて天下に取られてしまつたわけで、直感の錯覺といふことを考へさせられる。

聯想といふものは、時々突飛である。サローから聯想される巴里の男に、夜のカヴァレの歌手兼歌詞説明者がゐる。矢張頭の鉢の發達した男であつた。そのカヴァレはフランスの傳統的民謡を聞かせるので有名だ。わがこの歌手は、ヨセミテ會議におけるサローの如くに生眞面目に、又彼の如く偉容を正して、客に向つて歌ひ、客に向つて滔々と説明する。「皆様、これから歌ひまするはイギリスの王様についての古歌であります。お客様の中でイギリスのお方があるなら、お聞き咎めの節もありませうが、平に御容赦下さりませ。何せ昔々に作られた歌なのでございますから……」なる程、「イギリスの王様のくそ！」と最後に繰返へす歌である。わが歌手も、お客も、石の床を踏み鳴らし、木製のベンチを叩いて、ドーヴァーにも聞えよとばかり「イギリスの王様のくそ！」と一齊に合唱する。それはミュンヘン會議が圓滿に終了して、イギリスも、フランスも、イタリヤも、ドイツも、表面的には握手して間もない、ある夜のことであつた。

このカヴァレは、カヴァ・デ・ズブリエットといつて舊カルティエ・ラタンのサン・ジュリヤン・ル・ポーヴル小路の地底にある。とかく曲りくねつたこの小路には、カヴァレらしい入口は見當らない。たゞ地下への降り口があるので、その石段を、好奇心に驅られながら降りて行つたら、それがカヴァレだつたのだ。この建物は、昔はお城の地下牢だつたといふ。

冷たい、暗い石廊を、電燈の弱い燭力を頼りに、踏み進めば、右も、左も、小房である。又摩滅された石段を降りれば、突きあたるものは、やはり小房である。そこには罪人を繋いだ鐵の鎖が、錆びついてゐる。現在の歐洲大戦で、もし百二十萬人の捕虜を繋ぐために、かゝる鐵鎖をドイツが作るとしたら、その鐵の量、それから鎖の觸れあふ音などは、一人の人間では想像しきれない。

いはゆるカヴァレの間は、建物中では一番に廣い室といふわけだが、全部石造なので重くるしい。圓天井は低くて、頭がつかへさうな感じだ。低い穹窿狀の窓からは、ノートル・ダムが仰がれる。石の壁には、落書きが散在してゐる。オスカー・ワイルドなどは、大いにこゝの雰圍氣を好んで、通つたものだつたとかいふことだ。汚い木製のベンチが客席で、高座には古い

ピアノが据ゑてあるだけの設備である。歌女は殆ど皆中婆さんであつたが、目の縁に藍色の隈取りをしたり、頭髪を乙女らしく下げて、若々しく粧ふてゐた。ニグロの血の混つたやうなみにくい歌女が、樂屋から高座への花道にかゝると、室の一隅から、お客の掛聲「ようよう、世界一の美人！」するとニグロ面、急に澄まして、首をしやんとたて直し、しなを作つて、高座に上る。拍手喝采は暫くやまない。

このカヴァレの特徴は、モダン調の歌でなく、全部古歌を聞かせるといふことだ。そして歌手は歌ひながら、要所要所に身振を添へる。お客は聽くことを樂しみとするよりも、現在を忘れて、歌の世界に浸け入つて、思はず手をうち、足拍子を取りながら囃してみたり、自ら歌つてみたりして樂しんでゐる。そして歌が終ると、好みの酒を命じて、これを飲む。醉ひがまはれば、隣のお客と仲よくなり、その肩に手をかけたり、頭をつきつけたりしてごきげんである。時々客同志の喧嘩が始まる。アメリカあたりから來たお上りさん連は、血はやふる神田兒ならぬ巴里兒だなどゝ、吃驚するが、それは實際は喧嘩ではなく、景氣づけに雇はれた男連にせ喧嘩である。だからそれを呑み込んでゐる巴里兒たちは、平然と構へてゐる。

「巴里の道に穴が多いわけは」「あの子のヴェールが飛びました」「八十八人の狩人さん」などは、猛烈な艶ものである。我國の端唄に共通な情緒の漂ふてゐるものだが、しかしすべて、直接に感情に訴へるのではなく、一つの物語の敍述である。流石に「何故(ブルコワ)」といふ言葉と、「何故(ペルル)ならば(スク)」といふ言葉が好きな國民だけあつて、歌にも、蕾と花と實の順序過程がある。

クレモンの「櫻實時(トンド・スクリズ)」といふ歌は上品なもので、家庭などで、大きな聲で歌つても恥しくないと思つたが、これによると、日本の歌謠では、櫻の花時を短いものとしてゐるのに、フランスなどでは、櫻實時を短いものとしてゐるらしい。櫻の花見時を背景にして、いろいろなローマンティックな場面が頻發するわが國に反して、フランスのローマンスは、櫻んぼの赤るんだ頃であるらしい。

輕騎兵に寄せた歌の中に、「行かしやんしたよあの人は、わたしや便りを待つばかり」、Il est parti, j'attends de ses nouelles" などゝいふ言葉を聞きながら、私はドデのル・モヴェ・ズア

ヴを思ひだしたことだつた。クリスティアンといふ青年が軍隊生活に我慢しかねて、こつそり母親のところに歸つて來る、カフエーで酒をしこたま飲むので、家に入ると水ばかり欲しがる。父親が息子の不忠が申し譯ないといつて、五十五才の齡をも顧みず、息子に代つて、兵役に服するといふ筋の短篇である。形式は違つても精神的には、これに似通つたものが、歐洲の國々には、目擊されてゐることではなからうか。

この夜の歡樂郷は、私が訪づれた一九三八年當時と今日とでは、その存在の重要性が、非常に變つてきてゐるだらう。巴里が空襲されても、こゝにゐれば安全なのだ。だから昨今は景氣づけの男を雇つて來る必要もなく、自然に只繁昌してゐることであらう。

カヴォ・デ・ズブリエットの想出とともに私は親みのふかいカルティエ・ラタンを想ひ出す。空襲の恐怖下にあるとはいへ、カルティエ・ラタンは一九一九年、一九二四年及び一九三八年に私が住んだ時と變りなく、今日でもやはりボヘミアン的な氣分を漂はせてゐることであらう。(昭和十五・七)

ヴェルサイユ宮

ヴェルサイユの土地を、ルイ十四世は彼の都に選んだ。森林と、狩の獲物と、それからルイ十三世の營んださゝやかな行宮だけを誇りとした一小村落ヴェルサイユが、遂に「第二のローマ」或は「世界的のヴェルサイユ」にまで成上つた遠因は、ルイ十四世のローマンスに在つたといはれる。彼が彼の戀人ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールと共に語り、共に踊り又相共に狩をしたのは、このヴェルサイユの田園的環境の裡に於てゞあつたのだ。それは彼が二十一歳、彼女が十八歳の若き日、アネモネ香る五月の頃だつたといふ。この美しい若き日の想出の地を生涯記念するために、王はあの美しいヴェルサイユ宮の造營を企圖したのであつた。兎に角ヴェルサイユ宮以後は建築らしい建築はないとまでいはれるこの宮殿は、確かにルイ王の偉業の一つであつたに違ひない。

ヴェルサイユ宮の建築に携つたのはルメルシエー、ル・ヴォ、マンザーの三人である。ルメルシエーの作はルイ十三世の遺した煉瓦造の假宮、ル・ヴォの作は宏大な正面の建物、マンザーの作は南北兩翼と鏡の間とである。三つの部分が別人の手になりつゝ、しかも尙其處に一貫した調和美を保持してゐることは、一つの驚異である。それはル・ヴォ並にマンザーの天禀の才と、王の優れた鑑賞眼とに俟つところが多いものであらう。

長短の直線と曲線を最も藝術的に組合せて、積上げたものがヴェルサイユ宮殿である。藝術的と言つたが、それは藝術的自由を以てゞはなく、藝術的法則に從つてゞある。大魔術師がヴェルサイユ宮を掌中に載せるならば、恐らく宮殿は崩壞して、同じ長さの大小の直線と曲線のみが掌の上に殘ることであらう。しかもその直線曲線には、何れも無限の力が籠つてゐる。

ヴェルサイユ宮は、均齊、壯麗、雄勁（マスキュウラン）の三つの形容詞を以て特徴づくるべき建築なのである。

優に六千人を收容しうるヴェルサイユ宮の正面間口は千九百三呎、窓の數は三百五十であ

る。その宮殿の奥深く營まれたルイ王の生活は！　徒然を慰めるには、世界の誇シャンパン縣の名酒と男性的ブルゴンニュ酒と女性的なボルドー酒とがあつた。又金、銀、水晶の鉢に盛られた世界中の果物と菓子とがあつた。綠の卓掛で蔽はれたカルタ臺があつた。緋のびろうどに金絲の房のたれた布で飾られた、玉突臺があつた。その上を照すローソクの燭臺は銀、シャンデリヤは水晶。王は又ルリの指揮する音樂を樂み、モリエールの劇に興じた。それらにも倦きると窓外の庭の展望を獨り樂しむのだつた。その窓下の左右の池水は、特に王を滿足させたといはれる。宮殿の光と夢を映すこの池水はまた、ヴェルサイユ宮殿の建築の峻嚴性を緩和する要素として缺くべからざるものでもあつた。

宮苑はこの二つの池から始まつて、遙か地平線の彼方にまでづつと續いてゐる。それは、庭園と言はんよりも、むしろ一つの風景と呼ぶべき大規模な眺望である。造庭家は天才ル・ノートル。彼は、戰亂に懲りたフランス人の眼には、直線と整序が何よりも落着いた美しさであることを知つて、この宮苑を設計したのである。

園には、泉あり、湖あり、運河があり、噴水がある。水を鏡として靜かに眺め入るのでは物

足らず、躍る水の姿にむしろ興味を感ずるフランス人らしい趣味を、ルイ王ももつてゐたらしい。

たゞヴェルサイユ附近には水が缺乏してゐたゝめに、彼はセーヌの河水を引いて來ねばならなかつた。かくして水鄉と呼ばれる現在のヴェルサイユを作り上げるためには巨大な國費と莫大な勞働力とが犧牲にされたのであつた。

深い森には樫や楡が老い茂つて、寂として聲がない。ルイ十三世はこの幽境で、獨り救靈に就いての默想に耽つたといふ。この森と水のつきるところは地平線だ。

この森の中や水の邊に、大理石や青銅で彫刻された幼兒が戯れ、神話中の神々が命令し、女神が憩ひ、獸が吠えてゐる。ルイ王は園を逍遙しつゝ、それらの一つ一つの像の前に立止つては、それら各々の表現する思想と自分とを、融和一致せしめて沒我の境に入つたものであらう。そしてそれは「國家とは朕なり」との確信をもちえたルイ王にとつては、少しも奇異に感じられなかつたことであらう。これらの彫刻には多くの傑作があるが、殊にテュビの作「バサン・ダ・ボロン」の馬の勢に、ロダンは學ぶところが多かつたといふ。

潤澤な水と、彫刻の傑作と、靜な深い森とを直線と曲線の上に均齊的に調和させ、しかも壯麗な宮殿をいつも背景に入れてゐるところにヴェルサイユの園の美がある。園と宮殿とは個々のものでなく、相合してヴェルサイユ宮を、作り上げてゐるのである。庭なくしてヴェルサイユ宮なく、宮殿なくしてヴェルサイユの園はない。これには建築家マンザーと造園家ル・ノートルとの呼吸の合致した苦心が見られることであつた。

ヴェルサイユ宮殿の最も歴史的な部分は言ふまでもなく、鏡の間である。奥行二百三十六呎、間口三十三呎、高さ四十三呎。その奥行の片側は庭園に面した十七の窓、片側は窓と同じく十七の大鏡、形も窓と均しく丸天井型。鏡面のヴェニスグラスは總數三百六枚である。この室はマンザーが、ローマのある建築にヒントを得て、更に獨創を加へて建造したものである。ルイ王と群臣によるこの廣間の披露は、一六八四年の十一月であつたといふ。その披露宴の光景を想像して見よう。窓掛は白地に金で百合を刺繍したもの、銀の燭臺に點るローソクは三千。その光は淑女の頸と指の寶石に碎け、鏡面に沈み、玉の杯の中に散るのであつた。ル・ブランの筆によるルイ十四世一代の偉業を寫した天井の繪は、色彩が落着いて美しい。音樂と、朗かな

話聲と、輕やかな舞踏のステップに、周圍の雰圍氣は震えてゐる。靜けさを求めて窓際に寄れば、花の香と噴水の沫が輕羅にまつはる。この廣間の色彩にも、裝飾にも豪奢華麗さを避けたのは、王と王妃、高位高官の人々とその夫人等の花の顏、花の衣を惹きたゝせるためなのでもあつたらう。鏡面に映る華かな群影で、廣間は立體的感覺を漂はせてゐる。このヴェニスの鏡面は當時は容易に得難い珍品であつたといふ。しかし今見る鏡面は鈍い色で、光澤を失つた銀紙のやうな感だ。鏡面は凹凸だらけで、映る人間の姿はいびつだ。其處にはルイ王の顏、美しいマリ・アントワネット、エドマンド・バークが憧憬したあの美しいマリ・アントワネットの顏が映つたのだつた。しかもそれは鏡の間に映つたフランス王族の最後の顏であつた。そして又それは、フランス史の最もロマンティックな部分の終末でもあつた。

普佛戰爭後、プロシャ王ウイルヘルム一世が、ビスマークやモルトケやプロシャ諸侯の面前で、獨逸皇帝として戴冠されたのは、この鏡の間であつた。それは昔、ルイ十四世の世に、ド

イツがフランスに敗けた時の恨を晴らす光景をこの鏡の間に映したかつたに外ならない。それは一八七一年のことであつた。一九一九年世界大戰が終つた時、平和條約が又この鏡の間で締結された。フランスと獨逸は代る代る、この最も美しい場所を、最も醜い人間の復讐心の滿足のために使用したのである。

現在歐洲の平和攪亂の一大原因を作つた所謂ヴェルサイユ體制を創設した平和條約締結當時の光景を、私は今回想する。聯合國の代表が將兵に護衛されながら堂々と鏡の間に這入つて來て、テーブルの前に腰を下ろした。沈默！　次に獨逸の二代表が現れると、廣間は更に森閑となる。レ・ミゼラブルのジャンヴァルジャンが、人目を避けながら往來を歩いてゆくあの姿が聯想された。蒼ざめた二人の顏は、極度に興奮してゐる。いざ署名といふ時に、獨逸代表の一人のペンが利かなくなつた。アメリカのハウス大佐の祕書が、自分の萬年筆を素早く貸してやり、漸く、署名が終了したのであつた。ドイツ代表の署名が終ると同時に、ヴェルサイユの町に砲聲が轟き渡つた。巴里でも一齊に砲聲が、平和の到來を告げたのであつた。しかし、それは平和への喜びであるよりも、むしろ復讐心充足の喜びとして響いたのであつた。會釋だけを

して、有罪判決を受けた被告人のやうに、獨逸代表は無言のまゝ退去した。この光景の心ある目擊者は、いづれも皆獨逸に同情したことであつた。それは敗れたとは言へ、大國獨逸を遇する途ではなかつた。又それは歐洲の平和を齎す措置でもなかつたのである。そこにヴェルサイユ體制崩壞と現在の歐洲動亂の萠芽が旣に存在してゐたのである。幾度かこの鏡の間に映された人間の下劣な感情の發現である、「眼は眼を以て」の光景が繰返さるゝ間は、歐洲の平和の建設は絕望である。否この同じ人間的感情が捨てられない限り、東亞新秩序の建設も世界平和の建設も、お題目以上のものとはなり得ないのであらう。

ルイ十四世の戀愛の對象としてのヴェルサイユ、フランス革命の對象としてのヴェルサイユ、獨佛の代る代るの復讐心の對象としてのヴェルサイユを顧る時、ヴェルサイユは見どころ多く、感慨また深きものであることを懷ふのである。（昭和十五・一）

ジャンとアドルフ

去る六月八日獨逸機械化部隊は、ルーアンに突進したと報道された。ルーアンから巴里までは、汽車で一時間十分である。獨逸空襲下にあつてさへとだえなかつた巴里の派手なお化粧も、公園の植樹を刈りこむ鋏の音も、流石にこの六月八日にはふつつりと消えてしまつたといふ。戰時においてこそルーアンの一事一件は、かくも巴里人の肝を冷やすのであるが、平時においては、ルーアンを近距離にもつことは、巴里人の誇りとするところである。それはルーアンが、歴史と、自然と、藝術とに豐かな都市だからである。

ノルマンディの首都ルーアンには、私も杖を曳いた日があつた。

「人生夢に限りあり。詩想盡くる日到らば、わが故郷ノルマンディに歸らむ。」と言つたギュスターヴ・ナドーは、明るい暖い陽の射すノルマンディへの憧憬が抑へ切れなかつたといふ。その明

るい暖い太陽に、私はエトランジェーなるわが脊髓を延しながら、フローベルの作「マダム・ボヴァリー」のそのマダムが、このルーアンの近郊の牧場をゆく姿を思ひ出した。彼女の磨いた靴には、ノルマンディの草の實と陽が映るのであつた。私の埃に汚れた旅の靴には、草の實も、陽の影も宿らなかつたが、その陽の落ちてゐるルーアンの土は、私の歩欲をそゝつてやまなかつた。

綠の丘の麓に、緩やかなカーヴのセーヌ河に沿ふて發達したルーアンの町は、ゴチック式建築の櫓、鐘樓、尖閣（エギユーユ）、尖塔（フレツシユ）の點々として群立する靜かな町だ。セーヌ河に近い料理屋で、晝食のメニューを讀みながら、同行の×が「プーレてのなんだつたけな」と呟いた。脇に控へてゐたガルソンが、「コケコッコー」と突然に時を作つてくれた。私はフランスから歸つた友人から、屢々この「コケコッコ」の話を聞かされたものだつたが、實演を耳にしたのは、これが初めてだつた。ガルソンの顏を顧みると、相當の年輩者だ。幾人かの日本人に、同じ藝當を演じ

て日本の國土にまで笑ひ話の種を蒔いたガルソンの一人は彼ではなかつたかと、凝視すると、ガルソンは、慇懃に私の側に來てコップに葡萄酒を注いでくれた。全く彼の「コケコッコー」はルーアンの町全部に響いてゆくやうなけたゝましい聲であつた。しかもそれを遮る音響が一つもないやうに感じられるほど、靜かなルーアンの町であつたのだ。

ルーアンの靜けさは、殊に裏通りの古代街道に漂ふ。人や、車や、馬や、雨風で磨滅された古い道路の凹凸を靴底に感じながら歩く時、靜けさは、むしろ寂しくさへなる。そしてこの都と關係の深いリチャード獅子王やウイリヤム征服王、聖女ジャン・ダークなどが、あるひは、今自分の踏んでゐる同じ道路を馬蹄に蹴つた時もあつたゞらうことを想像する。古いハーフ・ティンバー造りの住宅に、ゴチック式建築と美を競つたやうな、技巧を凝らした蜘蛛の巣がかかつてゐたのも、この古代街の一隅であつた。

ルーアンで素晴しいのは寺院である。昔は宗教的建物が九十棟も聳えてゐたといふが、今で

も、そこ〻に、壯重、壯麗なゴチック建築の寺院が散在して、あたら寶物が轉つてゐるやうな感じだ。殊にある建物の外部の裝飾の彫刻は、つまみ細工を聯想させるもので、纖細美の極致ともいへよう。

數多い寺院のうちでも特にノートル・ダム寺院は、世界に名を轟かした建築である。十三世紀から十六世紀に亙つて完成されたもので、したがつて、各期に亙るゴチック式美術を、この一つの建築の中に集めたことになる。昔ある人が十八人の男が總がゝりで、やつと撞きうるといふ一八・〇〇〇キロの大鐘を鑄て、このお寺に献納した。彼は鑄あげて、ホッとしたが、すぐ死んでしまつた。この建築の完成の蔭には、多くの美術家、工藝家の、かうした命がけの精進があつたに違ひない。かうした藝術は、「宗教」が人生のすべてゞあつた中世の雰圍氣の下においてのみ可能であり、「經濟」を強く意識する一般の現代藝術家には、愚かとも見えるだらう。

堂内の最も有名な「聖母堂」に聖香が漂ふて、そこに澤山の善男善女が祈つてゐた。同行のある日本婦人が、日本服で、この堂内に這入らうとすると、堂守の女が、帽子がなければ、堂内には入れぬと頑張る。日本では、婦人は帽を冠らぬのが禮だと辯解しても、教會内は無帽は

ならぬが御法度と、首を振つたが、背後に立つてゐる私の手から、ソフトをさらつて、婦人の頭上に載せた。もつとも滑稽な姿が、もつとも嚴肅な場所に創り出されたのである。困憊した婦人が逡巡しながら前進してゆく後姿は、まさに、棄教せんか殉教せんかと迷ふ「踏繪」を前にしたバテレン女を想はせるものがあつた。

このエピソッドから聯想することだが、數年前にあるアメリカの法學者が來朝したことがあつた。それは彼の東洋への初旅であつた。横濱に彼を迎へた私に、彼が語つた日本の第一印象は「婦人が帽子を冠らぬ國」であることであつた。彼は、コリント前書第十一章のパウロの言葉を思ひ浮べながら、「日本には聖パウロの影響は及んでゐない」と微笑んだことであつた。

裁判所の建築は實に美麗である。それは十五世紀の官廳建築のマスターピースといはれてゐる。まるく切るにしても、裁判などゝいふ元來四角四面なものを取り扱ふ場所には不似合だとも思へるが、コルネイユのやうな文豪が、辯護人として、この裁判所で辯論をやつたことを想ふと、それにはふさはしい藝術的建築物である。コルネイユは「かくあるべき人生」を描いた。それは彼が法律家であつたからだらう。ラシンは法律などはけむたがる文人であつたから、「人

間らしい人間」を描いたのでもあらう。

しかしルーアンが何よりも誇りとし、又大切にしてゐるものは、ジャン・ダークの史蹟である。過日、獨逸のフランスにおける勝利の報道を聞かされた駐日獨逸大使館員は、即座に「ジャン・ダークはたうとう出ませんでしたね」と言つたといふ。ジャン・ダークは今回の戰爭においても、敵味方から忘れられない名前である。そのジャン・ダークは一四三一年五月三十日、このルーアンで、火刑に處せられたのである。その、火焙りにあひながら、兩手を胸に祈つてゐるジャン・ダークの姿は、レアル・デル・サルトによつて彫刻されてゐる。この像の前には、詣うづる人が今尙絶えない。私の詣うでた時は丁度夕方で、聖女の容貌が夕陽に、生氣を被つて見えたことであつた。

ジャン・ダークは豐かな百姓の娘だつた。糸を紡いだり、裁縫したり、羊の番をしたりする兩親の膝下における彼女の生活は平和であり、幸福であつた。その生活を僅か十六才の少女が

捨て去つて、荊の道を選んだのであつた。それには、彼女の耳に四年間聞えつゞけた天上の聲があつたからである。「ジャンや、フランスの王様を助けて、王位に卽かせておあげよ」フランス民族のために、フランスの王様をお助けしなければならない。かうした無上命令が、弱いジャンを、強いジャンに變へたのである。

彼女が王の軍勢を指揮して、オルレアンの町で、英軍に挑戰した時、彼女は堡壁の一番乘りの手柄をたてた。その時、彼女の肩から首に一本の矢がづぶりと刺さつた。少女ジャンはよゝとばかり泣き伏したのであつた。しかし聖女ジャンは、呀として、自らその矢を引き拔いた。かくして佛軍は大勝利を贏ちえたのである。

パテの戰にも大勝利を占めたジャンは、いよいよ王様に扈從して、フランスに赴き、王様の戴冠式を仰ぐのであつた。神命を果したジャンは兩親の許への歸心矢の如きものがあつたが、フランスをフランス民族のものにするためには、まだ英軍と戰はなければならなかつた。彼女は大負傷をした。佛軍は敗戰した。彼女は傷の癒えぬ體をも厭はず、雄々しく佛軍を指揮したのであつたが、コンピエーニュ——あの六月廿二日ヒトラアがフランス側と休戰協定を調印し

たのはこのコンピエーニュ、そして歐洲大戰の時、ドイツ媾和全權の一行をフランスの英雄達が冷眼を以て迎へたのも、このコンピエーニュであつた——から退却するフランス軍を擁護してゐるところを、一人の射手（アーチャー）に捕へられて、遂に一萬フランで、英軍に賣られたのである。そして英國側から魔術師として起訴され、裁判の結果、遂に死刑に處せられたのである。

あのレアル・デル・サルトの彫刻のやうな姿勢で、七八百人の槍を握つた敵の軍勢に包圍されながら、彼女は火焙りにされたのである。

死刑執行者が火焙臺に火を點じた。少女ジャンはふるへ上つた。そして「あつ！」と叫んだが、聖女ジャンが蘇つた。そして彼女はをのれの使命の神聖性を證言するのだつた。「私の聞いた聲は、神様のお聲だつた。それは迷想ではなかつた」

ジョン・マクドネルはその著「ヒストリカル・トライアルス」の中に、ジャン・ダークの性格について「强くて、英雄的で、聖人的で、聰明で、事實の正確な認識力をもつた、稀にみる美

德を兼備した人格である」と言つてゐる。

ジャン・ダークの生涯を顧ると、アドルフ・ヒトラアに共通するものが多々あることに氣がつく。恐らく英佛側からいつたら、奇想天外の戰術を使ふヒトラアは魔術師であるかも知れない。その戰術によつて、ヒトラアは今日まで勝利を獲得しつゞけてきた。しかし彼がたとへ萬一失敗する日が來たとしても、彼はあのジャン・ダークが火焙臺の上で發したと同じ言葉を世界に向つて吐くことであらう。"Mes voix étaient de Dieu; mes voix ne m'ont pas trompé!"

ジャンの小さい胸に、フランス民族の解放が、神の御聲として響いたと均しく、アドルフにとつて、ヴェルサイユ體制からドイツ民族の解放が、神の御聲として響いてゐることであらう。

ジャンとアドルフの二つの英姿を眺めつゝ、私は、人間の意識のうちに動く强い民族魂の奇蹟的表現に對して、驚きの目を見張るのである。（昭和十五・九）

伯林

ベルリンの字義に就ては、或は「川中島」、或は「小さな湖」、或は「堰」など色々の說がある。いづれにしても水に緣故のあるこの名稱は、平々坦々たる砂原ベルリンの地勢の、唯一の異彩がシュプレー河であることに由來してゐるのかも知れない。

ベルリン最古の寺院は、十三世紀に建立され、自然法學者プフェンドルフの埋葬されてあるニコライ寺院である。この聖ニコラスは、船人守護のセイントだ。兎に角中世のベルリン人の生活と、このシュプレー河との關係は淺からぬものであつたらうと推測される。

このシュプレー河の右岸に十三世紀に發達したベルリンと、その左岸に發達したケルンとが、ベルリンの名の下に十四世紀に合併され、遂に十五世紀にブロイセン王の支配下に歸して以來、今日に至つてゐる。かくしてベルリンの歷史は短いので、因緣つきの建物なども、他の歐洲の

都市に比して、割合に少い。さりとて誇りとする美觀に缺けた都ではない。惡口屋のハイネすら「これ程の壯麗さは又とない」と嘆賞した展望は、世界漫遊家の均しく讃辭を惜しまぬところである。それはシュプレー河に架けた宮城橋から、西の方遙かに、リンデンの廣小路を望む風景である。左側に並ぶは武庫、ベルリン大學、王立圖書館、右側は皇太子宮、王立オペラ座等、それらの建築美に恍惚とした眼を、ラオホの最大傑作フリードリヒ大王の馬上の英姿に止め、更に九町も續くリンデンの並木路に轉ずれば、遙か彼方地平線に幽かに浮ぶブランデンブルグ門……。

幅約三十三間、長さ約九町のリンデンの並木廣小路は、昔凱旋の君主と兵隊の、或は馬蹄、或は逸音の轟き渡つた街道である。ナチ政府が一九三三年一月三十日革命の成就布告の松明行列を行つたのも、矢張この街道であつた。このリンデンの最初の一本はフリードリヒ大王妃の御手植えのものだといふ。そしてそれらのリンデンは時を經るにつれ、大樹となり、所謂空の鳥が巣くふまでとなつた。そして夏日には木蔭を作り、凉風を送つて、木の下のベンチに憩ふベルリン人を慰めたのであつた。しかしナチ政策は、この大樹も犧牲にしてしまつた。それ

は地下鐵敷設の工事のためだといふ。大樹に代るに小樹が植えられたが、榮養不良の小兒の如き感で、傍らに並ぶ街燈の方が目を惹く。口さがないベルリン兒の蔭口によると「ウンテル・デン・リンデンぢやない。ウンテル・デン・ランペンさ！」

リンデン並木の盡くるところに、ブランデンブルグ門が堂々と立ち聳えてゐる。十二の巨大なドリック式の大柱が立ち並んで、重い六つの扉が、天地は過ぎん、されどこの扉は動かざるべしといつたやうな壯重觀を呈してゐる。手を觸れゝば、吸ひつけて放さない神祕的な力が潜んでゐるやうで、薄氣味が惡い。ラングハンスが一七八八年から九一年にかけて建造したものである。門の頂きに安置された像は、四頭の馬を馭する勝利の女神である。一八〇七年ナポレオンが分捕つて、巴里の凱旋門上に飾つたのを、一八一四年プロイセン人が回收したものである。門外には、約二百十六町歩のティヤガルテンが擴がつてゐる。昔はプロイセン王の御獵場で、猪や熊が出沒してゐた。今は樺、松、槲の老樹が鬱蒼たる公園で、木蔭には若人達が、互に金色の第三帝國の未來を描きつゝ、語らひ合つてゐる。

獨逸が世界に誇る伯林大學はプロイセン王國の疲弊時代に、ハインリヒ親王の御殿として建造された、極めて質素な建築物である。首府ベルリンに完全な大學を創設せよと言ふ叫は、十八世紀頃から頻りであつたが、ナポレオン戰爭に慘敗したプロイセンには、その實現力はなかつた。しかし「國家は物質の力で失つたものを精神の力で補充すべきだ」と言ふフリードリヒ三世の意見と、學者兼經倫家たるウイルヘルム・フォン・フンボルトの手腕とを磐石の礎として、ベルリン大學は創立されたのであつた。そして各專門に亙つて獨逸第一流の人物を聘用することを目標としたのだつた。フィヒテや、サヴィニや、ヘーゲルやモムゼンなど、いづれも皆伯林大學の教授として世界の學界を動かした學者であつたのだ。

現在のベルリンを訪づれる旅人を特に刺戟するものが二つある。一はユダア人政策の影響であり、二は、食糧制限政策の影響である。

町を歩くと商店の窓ガラスに店名が、白く大きく書き出されてゐるのが目につく。ユダヤ人經營の商店を、かうして、特に表示してゐるのである。

ベルリン大學教授は權威ぞろひではあるが、現代ではユダヤ系の教授は如何に權威たりとも失職してしまつてゐる。或る日往年物故した、ベルリン大學のK教授の長男の家庭に招かれたとき、嘗てのベルリン大學教授として、世界の法學界に名聲を博したユダヤ系のR博士とA博士とに會見した。R博士は老人で神經質なだけに、ナチ政策に依る精神的打擊は少くないらしい。彼はナチ政策に就いて語る時は低聲となり、生垣の外に足音が響くと、急に口を緘じて、ヒトラア總統が立ち聞きでもしてゐるやうに怖ける。A博士は、その才能を認めてゐる同じ專門のイギリスのある學者に、二ケ月に一度位ロンドンに招かれて、彼の仕事を援助する。しかしこの「才能の海外輸出」は、輸出奬勵のナチ政府も次第に許可しなくなるかも知れぬと、A博士は心配してゐた。主人役のK氏も夫人がユダヤ系なので、兎角日常生活に不愉快な事があり、アメリカに住まうとも考へてゐるなどと言つてゐた。

全くアメリカに渡るユダヤ人は多數である。私が昨年十一月下旬ノルマンディ號で英國から

渡米する時、二等船客の殆ど全部はユダヤ人で、紐育のユダヤ教々祖夫妻も便乘してゐた。これらエミグレのユダヤ人達は言つてゐた。「アメリカに行くが、職があるかないか。無くば又獨逸へ歸らねばならぬのだ！」。彼等の憂鬱は食堂に於てさへ消える暇が無かつた。只子供達だけが嬉々と跳ね廻つてゐた。K氏、R博士、A博士などが、かうした曇つた顏で紐育に渡る日が近づいてゐるのかも知れない。

第二の食糧政策の影響としては、まづ馬鈴薯入りのパンの出現である。それはねつちやりとしてゐるパンだ。バタも消費制限で、ばたばたとは食べられない。

輸入品はなんでもぐんと高い。しかも紅茶も、コーヒーも、玉子まで輸入を仰ぐ必要があるといふ。さぞお困りでせうと同情すると、K氏は、食料政策なんか更に痛痒を感じない。騷ぐのは外國の新聞だけさ、と笑つてゐる。全く獨逸婦人は高い食料品に就いて不平を言ふ暇に無駄の省略に頭をひねつてゐる。アメリカの國際アパアトの各室の戸口に捨てられた料理屑袋の、

一番小さいのが獨逸婦人の、一番大きいのが、日本婦人のだと言ふことである。

食糧も表面は缺乏してゐる如くであるが、落着いて觀察すると、なる程K氏の言ふやうに、痛痒は更にない。まづ食料品店を覗いてみれば、パンが不味くとも、バタが十分でなくとも、それに代るウルスト、ケーゼ、菓子の種類の豐富なのに驚く。殊に百貨店のウルストの賣場は全く見ものである。長さ八九間の眞鑄の棒二段に吊してあるのがウルスト、種類は約廿種。そのぶらりと下つたところは、大小の赤い氷嚢の如く、又赤へちまにも譬へられる。其處には焦げたやうな鹽氣のある濃厚な香が漂つて、衣物に移り香が殘る位だ。賣子は庖丁の刄を研ぎながら、お客の註文をまつ。そしてお客の指圖のまゝに、如何に小片たりとも厭はずに切る。一體ソーセージの名は、紀元三世紀の、世界最古の料理本に出てゐる。ナポレオン戰爭の結果は獨逸のウルスト製造が大進歩をした。世界大戰當時獨逸の捕虜が各種のソーセージの製法を日本で傳授したものだつた。

これも百貨店のラインワインやモーゼルワインの賣場。酒名を貼つた十五ケの樽が並んでゐる。鎭守樣のお祭の時に叩く太鼓のやうな形の、鐵枠つきの樽である。空瓶に漏斗を當てゝ樽酒を注げばごぼごぼと音して、ぷつと漏斗一面に泡が吹き上る。賣子は瓶にコルクの栓をしてお客に渡す。その瓶も、コルクの栓までも家庭から持つて來る客が大部分だ。全く獨逸婦人のすることらしいと合點される。こゝは新しい酒を古い瓶に盛るところだ。このワインと小片ウルストだけでも榮養は十分だ。獨逸人のお腹が膨れてゐるのも尤もだ。

そしてベルリン人は夜の八時過ぎる頃から、カフエーに這入り込んでゆく。其處で求める彼等の飲食も亦大部分ビール、ラインワイン、パンの上にソーセージなどを載せた「ベレークテス・ブレーチヘン」。同時にお客は、壁に飾られたヒトラア總統の寫眞に目禮をすることを忘れない。それから、愛國切手を賣るにこやかな軍人の勸誘に應じることをも忘れない。「ヘル・オーベル」が、チップで重くなつたズボンに手を入れて、小錢をぢやらぢやらと撫でまわす音が聞えて來る。折柄教會の鐘が響き渡る。ベルリンは今尙、かうして繁昌しつゝあるのである。

（昭和十四・九）

無憂宮

ポツダムへの汽車時間の具合を訊ねると、伯林のホテルのポルティエは早速調べてくれたが、さて附け加へた。「私はこれでも、昔はポツダム宮殿の近衞兵でした。」彼の顏は瞬間輝いた。輝かしかつた帝政時代のこと、彼自身の轉業を餘儀なくせしめた社會民主黨時代のこと、準戰時的體制を取るに至つた第三帝國のことなど次から次へと想ひ出したのか、暫く眼を閉ぢてゐたが、「いづれゆつくり、そのお話をしませう。」と言つて、彼はナチ式擧手の禮を行つた。

ポツダムに私を案內しながら、舊友K博士は、嚴父が學問上の功績によつて、廢帝に拜謁を仰せつかつた光榮の場面を思ひ出してゐるらしかつた。

「ポツダムはプロイセン王國のブランデンブルグの首都で、ホーヘンツォルレン家の威武と藝術とに輝く都であつたのです。不思議なものですね、新政策を標榜してあらゆるものを片端から

改革してゐるナチ政府が、ポツダム宮には復舊主義をとるんですからね。まづ、藝術は長しといふところでせう、ハヽヽ」

誰もがホーヘンツォルレン家を背景として考へたいらしいポツダムの地は、十世紀にはポットウピミと呼ばれ、川魚に惠まれた漁村に過ぎなかつたが、十七世紀に、フリードリヒ・ウイルヘルム大選擧侯が其處にお城を築いた。以來代々のプロイセンの王様はこのポツダムのお城を愛護し、それを美化し、又その附近に新にお城を築いた。就中フリードリヒ大王のこゝに遺した無憂宮（サンスシー）は、美術的價値の特に高いものであつた。ポツダムが今日獨逸に於て、藝術の都の一つとして數へられるに至つたのは、この無憂宮に負ふところが多い。

ポツダムは又武人の都である。それは精鋭プロイセン陸軍の搖籃の地である。此處では、戸毎に六人の近衛兵を宿泊させるための屋階が設けられてゐた。しかも王様にまでこの六人の近衛兵を宿泊せしむる義務が負はされてゐた。武人の睡眠のために、ポツダム市民が住んでゐるやうなものであつた。尾張名古屋は城でもつといふが、都ポツダムは城でもち、又武人でもつてゐたのだ。

一昨年の夏の或る日、K博士と共に、私は質素な門を潜つた。それは「ドイツのヴェルサイユ」と呼ばれる、無憂宮への入口であつた。溪流が大河に終る如く、靜かな音樂がクレッシェンドゥで終る如く、この事なげに見える入口に始まる無憂宮は暫く本體を隱して、さて最後にその壯麗な姿を現すのである。

美事に鋏の入つたリンデンの並木路を行けども行けども、何物も見えないが、一寸右に曲ると、驚異すべき壯觀が、遙か彼方に、鬱蒼とした大樹の林と林の間を通して展開される。六十六呎の高い段々の頂上に、大空を背景として、サン・スシ宮殿が建つてゐるのである。夏の空は輝き、宮殿正面のドームは燦き、段々の兩側に設けられた葡萄の溫室のガラス戸は燃え渡る。今しがたまでリンデンの青い色と土の黑い色のみを見ながら歩いて來た私の面前に突如として展開されたこの光景は、倦きた航海の船中で、蜃氣樓を見つけた船客の心理を聯想させるのだつた。長い段々は、アベルの夢に見た天使の梯子を聯想させた。ふと林の中から、金鈴を

振つたやうな鳥の聲が立つた。その止んだ後に、冷氣がさつと漂ふ。名にし負ふポツダムの夏の涼しさとはこれだなと思つて、あたりを見渡したが、恐らくこれを誰よりも愛でたであらうフリードリヒ大王は、見當らなかつた。

この無憂宮は、第二シレシヤ戰爭（一七四四——四七）中に建造されたもので、建築家はクノーベルスドルフ、設計家はフリードリヒ大王自身だといふ。彼の趣味を基礎としたロココ樣式のこの建築は、フランス式の單純な模倣でなく、大王の獨創に富む點で、獨逸ロココ樣式とも稱せらるべきだといはれる。

大空に向つて堂々と聳える宮殿の多い歐羅巴に、一階建の低いこの宮殿の外觀には、近よれば、安定美と單純美の倦かぬものがある。色調は白と黄の平和色。ガラス戸を開ければ、直ぐ白砂の庭だ。

宮殿中央の丸いドームが有名な大理石の間で、イタリヤ產の各種の大理石が、柱に用ひられ

てゐる。床までが彫刻の施された大理石だ。此處で、大王はその親しい友と共に卓を圍んで、晩餐を樂しんだのだつた。美酒、美食を嗜んだ大王は、しかし、賄費の豫算年額三萬六千マルクを超過させることはなかつた。その晩餐の光景は、現在この食堂に飾られたアドルフ・フォン・メンツェルの繪で、これを偲ぶことができる。

王の書齋は、床も壁も杉と紅葉を用ひた、落着いた色調の、氣持のいゝ部屋だ。王は此處で、その趣味とした詩、哲學、歴史を研究したのだつた。フランス文學への憧憬の深かつた王は、自らフランス語で詩作もした。フランス文人への手紙も此處で書いたのだつた。彼がヴォルテールを態々この王宮に招いて、起居を共にした年月もあつた。今でも、ヴォルテールの部屋といふのがあるが、その壁の模樣にはラフォンテエヌの偶話から取材したものもあり、ヴォルテールの似顔だといはれる猿も取落されてゐない。大王の皮肉な性格から出た、いたづらなのかも知れない。尤もこの部屋の完成前に、大王とヴォルテールとは喧嘩別れをしてしまつた。だからこの猿をヴォルテールは見なかつたことであらう。この書齋から想起することだが、王は、先王が尙武の餘り、學藝を輕視したことを憂へて、大いに學問を奬勵した。王は普通敎

育の義務年限を、五歳から十三歳までと制定したかつたのだが、それは財政上の理由で實行不可能だつた。

大王は音樂にも造詣が深かつた。音樂の間には王の吹き鳴らした、黑白染分けの笛が今も飾つてある。

歐洲の多くの有名な王宮が道路と並行して建てられてゐるのに反して、この無憂宮は段々によつて、塵界と斷然隔離されてゐる。我かしこにあらば、我に憂なからむ」と述懷したフリードリヒ大王は、俗塵を拂ふ意味で、この高所に築城したのだらうか。或は眺望の裡に、憂を忘れようとしたのか、「モダン・ジャーマニー」の著者イリス・バーカーのやうな反獨家は、恐らく、ホーヘンツォルレン家の血に流れる山賊根性から、見下しの利く場所を選んだのだと解するかも知れない。我國でも、山門五三桐では、石川五右衞門が、山門から見下してゐる。しかし實際は王はこの高所をまづ、葡萄の溫室を作るために利用したのであつた だから宮殿は後から建築

した。國家財政問題に一隻眼を具へた王は、農業振興の一助として、果樹栽培を奬勵した。從つて大王自ら範を垂れようとしたのかも知れない。葡萄のためだつた無憂宮が、後には大王の最も氣に入つたお城となり、その生涯の大部分が此處で過されること丶なつたのである。只「我かしこにあらば、我に憂なからむ」と述懷したにも拘らず、憂は容赦なく王を襲ふて來たのだつた。殊に無憂宮にあつたればこそ、大王のもつ憂ひが殖えたとも言へる。それは外でもない、附近の風車の音響であつた。大王はその讓渡を交渉したが、小屋のおやぢさんは首を振つて一向應じないどころか、王の庭園設置のために、風が弱くなつたのは、營業妨害であると、逆襲して來る。王の役人が「値段に拘らず賣らないと言ふのか？ しかし王樣は無償でも取上げることが出來るのだぞ」と言ふと、おやぢさん「ベルリンの高等法院（カンメルゲリヒト）がある間はそんなことはできませんよ」と撥ねつけた。流石は「プロイセンス國法典」の名制定者、又「アヴォカ・デュ・ポーヴル」と自稱しただけあつて、大王には、おやぢのこの言葉が特に氣に入つたと傳へられる。又王は、人生の最大の憂ひたる死をもこの宮殿で經驗したのだつた。それは一七八六年八月十七日で、暴風雨を冒して觀兵式を行つたことが、王の死の原因となつたのである。その時

も定めしあの金鈴の如き鳥の聲が、無憂宮の庭に響いて行つたことであらう。

大王は軍略、外交に於ても非凡の能力を持つてゐた。

「遠距離の地の獲得は寧ろ國家の重荷だ。國境の一寒村は二百五十哩を隔てた都市より大切だ」と、大王は敎へてゐる。ビスマークはこれを至寶として、遠征の誘惑を斷乎として撥ねつけ、いつも獨逸國内の强化に全力を濺いで、獨逸を强國としたのだつた。

フリードリヒ大王の外交の祕訣は、敵の不用意、不懸念の間に迅速に行動することであつた。彼は子孫を誡めて曰ふ「自己の野心、計略は、なるべく祕すべきだ。祕密は戰術にも、攻略にも、不可缺なものだ。」

又他の著作の中に、プロイセンの隣國中最も危險視すべきはロシヤだ、と王は喝破してゐる。ロシヤと戰爭して勝つても、分捕るものがない。だからロシヤとは手を握るか、外國と戰爭させることだと書いてゐる。

フリードリヒ大王は近代的な「軍事資源」の問題だの、イデオロギーの問題などは考へなかつたらう。そして異つた政治經濟的背景の下に於てゞはあるが、獨ソ協定を結んだヒトラアの外交政策は、フリードリヒ大王の遺訓に合致するものとも見られるかも知れない。

一九三三年三月廿一日ヒトラア總統は、ポツダムの古い敎會で、フリードリヒ大王の偉業を想起しつゝ、第三帝國の將來の祝福を祈つたことであつた。そして大王と均しく、獨逸國の威武を、彼は發揚してゐるのである。

しかし威武の精神は、必ずしもプロイセンと獨逸に特殊なものではない。イギリスにもフランスにも、その同じ威武の精神が國史の根元に潛在してゐる。北歐神話の神々の父、萬物の父は、軍神オディンである。オディンは戰死した勇士の魂を、ヴァルハラ宮殿で迎へた。その宮殿の若い女神達（ヴァルキリラ）は、特に戰鬪を見ることを好み、その槍で、死に値ひする勇士に記號を附けて、これをヴァルハラ宮に案内して、オディンに謁見せしめ、且、そこで彼等を饗應した。ヴァルハラに於ても、死者の靈は終日決鬪を娯樂としたのであつた。尤も其處では、傷は、毎夕晩餐の前には癒やされることにはなつてゐた。かうした神話に現れた北歐民族

の尙武的精神は、シャールマンの大帝國建設ともなり、ナポレオンの歐洲征服ともなつた。又大英帝國建設の背後にも、かうした精神が潛在してゐたのである。そしてそれは又、現今歐洲大戰に於けるドイツ陣營と英佛陣營とに、共通な民族的傳統でもあるのだ。

パリのリュクサンブール畫廊に飾られた「夢」は、十九世紀後半のフランス畫家ドタイエの傑作である。露營の兵士が戰捷の夢を見てゐる繪だ。この同じ夢は、今日もヨーロッパの空の下で結ばれてゐることだらう。オディンを拜んだ祖先の子孫の榮える限り、それは不斷に繰返される夢なのであらう。（昭和十五・二）

文庫と圖書館

一九一九年の夏私はスキスを去つてドイツに入り、暫くの間、伯林に滯在した。それは文部省留學生としての五年目のことである。當時の留學期間は三ヶ年を原則としたが、私の場合は、研究題目が外國法制であつたので、特に四年に延長され、私はその全部をアメリカとイギリスで過した。しかし私は、比較研究上、大陸の法制にも一應接したいと思つて、五年目は自費留學を出願し、それが許されたのであつた。

その頃のドイツは、初期インフラチオン時代で、一磅は初め約八十マルクを中心とする相場を現出してゐたが、漸次二百マルク位まで上つて行つた。そして國內物價はまださう釣上らなかつたので、自費留學でも左程苦しくはなかつた。それと同時に、この經濟環境の下に、いくつかの學者の文庫が相當安い値段で賣物に出たのが私の眼に映じた。そのうちで、當時物故さ

れたヨゼフ・コーラーの文庫が特に私の興味を唆つたのである。私は故教授の御曹子アルテゥール君の案内で、その文庫を點檢し、日本の學界のため、その獲得を熱望するに至つた。蓋しコーラー教授は、アルラー・コーラーと呼ばるゝ有名な博識の學者であつただけあつて、文獻蒐集の範圍があらゆる法律學の領域に及び、かつ各部門の文獻も相當精選された跡があつたからである。殊に比較法制史的資料は、容易に集めえざる多くの貴重な文獻を包含して居つた。實はこの文庫のことについては、アメリカ留學中、過日來朝されたウィグモア先生から聞及んで居つたのである。それは、コーラー教授が、世界大戰前、アメリカ旅行中、コーラーとウィグモアとの間に藏書賣買の交渉があり、その時のコ教授の提議した代價はたしか五萬弗であつたと聞及んだ。そしてこの交渉は、値段の點で不調に終つたのであつた。アルテゥール君の私に提議した代價は五千磅であつた。マルクに換算すれば巨額に上つたが、ポンドで計算すればコーラーがウィグモアに提議した値段の半額であつた。しかし五千磅も相當な大金で、その獲得が問題となつた。ところが幸ひ現京城大學總長山田三良先生が巴里に居られたので、相談の手紙を出すと、先生から早速返事が來て、當時これまた巴里旅行中の實業家織田昇次郎氏が、

その金を出してもよいといふから、交渉萬端を賴むといふのであつた。これに大に力を得て、三菱商事の代表者野間恭二郎君の商才を借り、フォック書房を中に入れて、四千磅で買入の交渉が決つた。相手方の私が法律家であるといふので、フォック側でも辯護士に依賴し、私達は準據法つた。の問題までも詳細に規定した契約書を作成したものである。この契約締結までの交渉は、色々の事情から數ケ月に及び、非常に骨が折れた。そして三ケ月の豫定であつた私のドイツ滯在も、お蔭で八ケ月に延びて了つたのである。その後コーラー文庫は無事日本に到着、織田氏は穗積陳重及山田三良兩先生の意見に從ひ、東京帝國大學に寄贈せらるゝことになつた。そしてコーラーの高弟穗積重遠教授指導の下に、平野義太郎君が主としてその整理に當り、カタログも完成したのであつたが、それは大震災で全部灰燼に歸して終つた。私は數ケ月に亙る伯林での骨折を想起して、眞に諸行無常を感じたのであつた。

震災直後私は圖書復興の任を帶び、經濟學部の上野君と一緒に歐米へ派遣せられ、彼地に約一年半を過した。私はコーラー文庫についての右の經驗から、圖書復興については、文庫買入が

最も重要な項目をなすべきであると考へて、それとなく多くの學者を歴訪し、その藏書の狀況を調査したのである。その際私の感じたことは、フランスとドイツとで、學者の藏書に就いて、趣きを異にするといふことであつた。私は、フランスの法律學者フランソア・ジェニーをナンシーに訪問した。それは當時公刊されつゝあつた彼の著書「シアンス・エ・テクニック」の脚註に引照された文獻が相當豐富であつたので、この人は多分藏書家であらうといふ見當をつけたからである。ところがこの見當は全然外れて終つた。氏の藏書は豫想外に貧弱であつた。私は彼に向つて率直に、「あなたの著書に引照された文獻は何處で御覽になつたか」と質問すると、氏は、「大學圖書館で」とあつさり答へたのである。そして私は同じ目的で、ボルドーにレオン・デュギーを、トゥルーズにモリス・オーリゥを訪問したのであるが、それらの人の所有する藏書は佛法律家に不可缺の「シレー」や「グローズ」の如き佛判例集等月並圖書以上多くを出でないのに失望したのである。そして文庫は、矢張ドイツで買入れなければ駄目かなと思つた。ドイツの學者は、猫も杓子も私藏の文庫を持つ癖があるやうである。そして學者の隱退又は死亡と共に、何々文庫といつて、賣物が出るのである。

かくして私はドイツに行つた際、當時留學中の我妻榮君及び中川善之助君と共にワッハ教授をライプチヒに訪ね、ワッハ文庫を買入れ、又、中川君にハイデルベルクまで出張をお賴みして、ノイベッカ文庫の買入も出來た。かくしてそれらは、圖書復興についての重要な要因をなすに至つたのである。

藏書癖の有無は個人的なもので、國民性にもとづくものではないかも知れない。又藏書癖がないことは、その人の作品價値が低下する理由とはならない。又それは文獻研究の怠慢を意味するものでもない。かへつて個人的藏書癖は圖書館制度の未發達と、その利用が不便である現狀とを反映するものであるかも知れない。（昭十・八）

圖書・平和宮・放尿坊

世界の耳目は、今、オランダに集注されてゐる。そのオランダの醫書が、德川時代のわが醫界に貢獻したことは、周知の事實である。「蘭學事始」の記事などから推して、蘭語の解剖書の解釋に、鳩首して惱んでゐる當時のお醫者連の顏付きなどが想像される。そしてレンブラントの「チュルプ教授の解剖講義」に描かれたオランダのお醫者さんたちの顏付きなども想ひ浮ぶ。

この蘭語の醫書研究から始まつた近代日本醫學は、その後長足の進歩をした。最近ある醫學者から聞いたのだが、日本醫學は、今オランダ醫學の程度にまで進歩したさうだ。これは必ずしも日本醫學への輕侮の言葉ではないのだ。一昨年ヘーグで、K公使と日蘭研究員交換の可能性といふことについて話しあつたが、醫學の分野が一番に實現可能性が多いだらうといふことに落着いた。日蘭兩國の醫學は相互的に學ぶべきことが多いからだ。

去年の十二月、ライデン大學日本學教授ヨハンネス・ラーデル博士から、十一月十二日附の英文書簡が東大圖書館に屆いた。それは同博士が、アメルスフォートのオランダ哲學學校に貸してある西洋哲學に關する書籍五百四十九點を、東大圖書館に寄贈したいといふ申込みであつた。歐洲戰爭の結果、同校が空襲の危險があるから、多數の友人をもつ東大の圖書館に送りたいのだが、受けてくれないかといふのである。そして博士の友人として、姉崎正治、高楠順次郎、黑板勝美、辻善之助、小倉進平、橋本進吉、久松潛一、福島直四郎、宮本正尊等の諸學者並びに東大圖書館の長澤前司書官、水野司書官、土井司書などの名が列記されてゐる。その五百四十九點の哲學書のリストは、十四葉の寫眞にうつして同封されて來たのであつた。又さすがは日本學の教授だけあつて、英文書簡と一緒に、次のやうな日本語の手紙が筆勢鮮やかに書かれて、同封されてゐた。

拜啓

同封の寫眞に登錄しました西洋哲學に關する書物を寄附として東京帝國大學圖書館に差上げたいと思ひまして Rotterdam から船で貴方の圖書館に御送附します。御承諾を求めて御返事をお待ちしてをります。

昭和拾四年拾一月拾二日

敬具

東京帝國大學圖書館長

J. Rahder

そこで私は、十二月十五日日附で、右の圖書の寄贈申込みを喜んでお受けする旨の手紙を送つた。十一月十二日附の氏の手紙では、これらの書籍はロッテルダムからパナマ運河または南阿を回航する船で送るといふことであつたが、その後博士は熟慮の結果、安全を期するため、小包で、一部分はシベリヤ經由で、また一部分は船便で送ることにしたらしい。又右の哲學書のほか、言語學、歴史、美術、土俗學等の書物をも加へて、あるひは直接東大圖書館宛に、あるひは博士の友人福島助教授宛に送られた。そしてそれらの大部分は、すでに安全に東大圖書館

に屆いたのである。

ラーデル博士の教鞭をとるライデン大學は、チュリップの花園の連る地域に在る。オランダのチュリップの種類は現在約二千種もあるさうだが、しかし例の「チュリップ・ノワール」といふのはデュマの空想に止まるもので、チュリップ史には、未だ嘗てない色彩だといふ。とにかく、さうした二千種ものチュリップが咲き匂ふ園の中に、ドイツの落下傘が、赤とんぼのやうに、無限に落ちて來る光景を眼に浮べながら、私はラーデル博士の安否を考へる。しかし、愛藏書を好機に禍から救ひ出したほどの先見の明ある氏のことであるから、博士とその家族とは、むろん無事に避難してゐられるだらう。また希ふことは、私のこの推測が誤たざることである。

ラーデル博士の寄贈書から聯想するが、一體、オランダ國は小さいが、世界文化への貢獻は非常に大きい。まづ國際法の父で同時に法哲學の祖でもあるフーゴー・グロチッスを、十六世紀に生んでゐる。哲人スピノザと畫家レンブラントを十七世紀に生んでゐる。それから現代においては、八人のノーベル賞受領者を出してゐる。

一九三八年九月十七日、私はベルリンを去つて、オランダ、ベルギーを經て、フランスに向つた。その當時はチェッコ問題で、歐洲は騷然としてゐた。國際列車の窓から眺めると、これらの國々の境界線といふものは、一目瞭然でない。こゝでは、一樹の葉はドイツに茂りその根はオランダに張つてゐる。一鳥の嘴はベルギーにあつて、尾はフランスに垂れてゐる。こんな國境をもつてゐて、現代のやうな險惡な國際的環境のうちに、よくこれらの國の人達は安閑と眠つてゐられるものだと思つた。同時に、これらの一國に戰が起れば、周圍の國々全部が、まきぞへを喰ふことが容易にうなづかれる。從つてオランダやベルギーの人達が、お互になによりもまづ戰爭を怖れて、嚴正中立といふことを高唱する心理は、十分理解できるやうな氣がした。

さて、國境に來ると、ドイツ政府の役人が、全乘客の懷中に所持するマルク貨の檢査にやつて來た。國外に、一人拾マルク以上を携帶させないドイツ政府の政策を徹底させるためであるのだ。私の隣席には、ベルギーを目指すドイツ婦人が、老母と幼女を同伴してゐたが、役人が

くると、財布の底をはたいて、役人と聲を併せて、マルクの勘定を始めた。お互に愛嬌たつぷりである。

オランダ領内に這入ると、背廣服にソフト帽の男と、黑地に赤線入りの制服を着た男が、オランダ國の役人であると名乘つて、乘客のパスポートを調べて歩いた。ある乘客に對しては、荷物を開けさせたりしたが、それは極めて簡單なものであつた。

オランダでは、汽車はいつも地平線と平行して走つた。その地平線と汽車との間に見えるものに、山羊や牛が横臥つてゐる牧場がある。それは、この國の約四割を占めるといふ牧場の一部である。それは大量的にイギリスに輸出される良質のバタ、チーズに關係の深い牧場である。牧場に沿うて切られたいくつかの堀がある。それは、オランダの晩夏の白雲を映した、長い長い小川の如き堀である。動かない風車がある。鷗の姿がある。この國の約三割を占めるといふ畑がある。そこには日本と同じやうに、藁が積んである。稻に似た苗が、藁のやうなもので、整然と圍はれてゐる。紫色のキャベツ、パセリなどもある。黑い土の上に赤い馬鈴薯がごろごろと轉つてゐて、傍に、薯を掘つてゐる老農夫の服は藍色だ。花畑も續くが、九月はチュリップ

には時期外れで、アマリリスが盛りである。山の姿はなく、木の梢越しに見えるのは、教會の塔だけである。

アムステルダムに近づいたが、案内書を持合せてゐなかつたので、宿屋が分らない。そこで隣席の老紳士に、「アムステルダムの宿屋は、どこがいゝでせう」と相談した。老紳士は、宿屋には不案内らしく、立ち上つて行つて、二三人の客と相談してゐたが、やがて、私の顏を見て、「ホテル・カールトン」を教へてくれた。その後オランダ案内記を見ると、アムステル・ホテルとカールトンとは共に一流のホテルだが、アムステルは、古風で、閑靜で、學者向きとある。カールトンは派手好みのお客向きとあつた。老紳士は、少し見當違ひの選擇をしてくれたわけだ。

黑服のお婆さんに紙に包んだ花束を强ひられながら、旅行者の荷物らしい黃色い貼紙のついた自轉車が無數に並んでゐるプラットホームを渡つて、改札口に出ると、水色や灰色の制服を

着た宿引きが、代る代る私のところに來て「何々ホテルに、一夜二グルデンの宿泊料で御案内しませう」と、安い宿料を餌にして、釣らうとあせる。急に、小さい國に來たことを痛感する。

ホテル・カールトンは、運河沿ひの、フランス式の宿だつた。案内された部屋の壁に、ベルが三つ並んでゐる。一つのベルの脇には、女中が床を掃除してゐる繪がある。次のは、ボーターが鞄を擔いでゐる繪、次は、ボーイが食膳を搬んでゐる繪である。私の註文は、このベルを一つ押せば、口をきかないで、達せられるのだ。さすがに、レンブラントやルーベンスの繪を慕うて來る世界各國のお客を相手にする國のホテルだけあつて、お客の語學にまで、注意が屆いてゐるのかと思つた。ウォルドルフ・アストリヤのやうな米國一流のホテルでは、總ての點に行き屆いてゐることを誇とするが、お客の語學にまでは注意が屆かない。

カールトンの朝食は、一寸風變りであつた。大皿に山盛に積まれたパンが、食卓に載せてある。そのパンは、麩のやうなパン、輕燒のやうなパン、ねじパン、コルクのやうな、ぼそぼそしたパン、白パン、葡萄パン、カステラパン。お客が食卓につくと、ボーイが多種多樣のソーセージの大きな薄切れを載せた大皿を持つて來る。他のボーイが、各種のチーズの大きな薄切